

---

# その者の拳は滅殺の拳

ハジケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その者の拳は滅殺の拳

### 【Nコード】

N5695Y

### 【作者名】

ハジケ

### 【あらすじ】

リリカルなのはの世界に降り立った一人の格闘家・・・彼はこの世界にどのような変化をもたらすのか・・・

## リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（前書き）

この作品は思いつきで書いたんですけどよろしくお願いします。

## リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家

俺は今少しだけ困っていた・・・

「参ったな何故かは分からないが俺の中の殺意の波動が揺らいでいる・・・。」

これでは次元転移ができない・・・この世界的环境下では修業の質が高まりそうにないから早く何処か別の世界に行きたかったのだが・・・。

「この世界・・・実は何か特殊な物でもあるのか？」

でなければ俺の殺意の波動は揺らぎはしない・・・。

「少し探るか・・・ん？。」

俺は足の下に違和感を感じたどうやら何か踏んだようだな・・・。

「何だこれは・・・？」

俺が踏んでいたのは石だったしかしこの石ただの石ではないな・・・。

フエイト Siad

私とアルフがジュエルシードを探していると一人の男の人がいた・・・あれは！？ジュエルシード・・・まさかあのジュエルシードを狙ってるの？

「おいそのアンタその手に持つてる者を渡しな！」

私が思想に浸ってる間にアルフが男の人にジュエルシードを渡すように言っていた素直に渡してくれればいいけど・・・。

「嫌だと言ったら？」

「力ずくで奪うよ！」

「ちよっ、アルフ！」

「大丈夫だよフェイトあいつ魔力を感じないしちゃんと加減してすぐ終わらせるさ！」

「それならいいけど・・・。」

男の人 Siad

すぐに終わらせるか・・・相手の実力も分からんようではこの世界の奴らの実力もたかが知れているな。

「すぐに終わるといいがな。」

「心配しなくてもすぐに終わるさ！」

あのアルフとか言う奴が攻撃を仕掛けて来た・・・この世界ではあのスピードを早いと言うのだろうが・・・。

「遅すぎる。」

シャツ、ビツ。

「あ・・・あれ？あの男は・・・。」

「後ろだ・・・。」

「なっ、いつの間に!？」

「貴様では俺に勝てん・・・。」

「何でそう断言できるのさ!」

「貴様は俺に魔力が無いと言う理由で勝てると思ったみたいだが・・・。」

「普通そう思うだろ!」

「普通か・・・戦いにおいては多くの要素が入り交じる・・・魔力が無いそれだけで相手を甘く見るのはどうかと思うぞ。」

「うっ・・・それは・・・。」

「それとその金髪の少女・・・フェイトと言ったな何故、攻撃をして来ない今の俺はお喋りをして隙だらけだと思わなかったのか?」

「え・・・そっ、それは・・・。」

「考えられなかったのか？俺の話を聞くのに少し集中してしまっ  
て？」

「はっ、はいそうです・・・。」

「ふむ・・・そうか相手の話しに耳を傾ける事は別に悪い事ではない  
がな。」

素直な子と言う所か・・・。

「アンタ何者だい・・・？」

「俺は・・・」

「よっしゃー！ここからはじまるぜー！」

「なっ、何だい！？」

「むっ・・・（大きめの気が現れた・・・。）」

転生者 Siad

いたよいたぜフェイトちゃんがそれにアルフも！・・・なんかしら  
ねー男もいるが無視だ。

「ねー彼女達ちょっといい！」

「何だいアンタ？」

「ジュエルシード集め手伝ってあげるよー。」

「何でジュエルシードの事を！？」

「ジュエルシード・・・？（もしかしてこれが・・・。）」

「大丈夫、俺さあ君たちの味方だから・・・あ、それと俺の目さあ二人ともちよつと見てくんない。」

魅惑の魔眼発動！これで二人は俺の・

グサ。

「イッテエ！目が目があああー！！」

「ちよつ、アンタ何いきなり目潰してんの！？」

「こいつが変な術を発動しようとしたからだ。」

「変な術！？」

「あれは恐らくチャームの類だな。」

「チャームだつて！？」

「目イテエ・・・くそツメエよくもやりやがったな！それにばらしやがって！こうなりや力ずくだ！」



男の人 Siad

力ずくか・・・確かにこの世界のレベルでは尋常ではない気の量だな・・・。

「戦うのか？」

「何だびびってんの！だろうな、なんたって俺は巨大な魔力と魔法以外にも超サイヤ人並みの気を持ったハイブリッド転生者びびってもしかーねえよギャハハツ・・・」

ドゴン！

「隙だらけだ・・・。」

「いつ、いつのまに・・・しゃべってる最中にきつ、きたねえぞ・・・」

「戦いの最中に喋る奴が悪い。」

「あ・・・ぐつ。」

どうやら気絶した様だなそれにしても転生者とは・・・。

「あっ、あの助けてくれてありがとう。」

「別に礼を言われる様なことはしていない。」

「いや・・・あの变なの魔力は実際巨大だったアタシたちじゃ勝てなかったと思う。」

「確かにな。」

「何かアイツ、アタシ達狙ってたみたいだしそれを倒したアンタには礼を言っよ。」

「そうか・・・。」

「あつ、あのジュエルシード・・・。」

「んっ？これか・・・こんなの別に要らんしな・・・やる。」

「あつ、ありがとう・・・。」

「さて行くか・・・。」

「どこにいくんだい？」

「さあ・・・？」

「さあつて・・・。」

「あつ、あのよかったら家に泊まっていきませんか？」

「いいのか？」

「はい、助けてもらった恩もありますし。」

「そうかありがとう助かったよ、この世界にはまだ不慣れだね。」

「この世界？アンタ別の次元の人間かい。」

「ああ、そうだ。」

「あの一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「名前なんですか？」

「そうかさつきは言えなかったな・・・俺の名前は、キルアだ。」

「キルア・・・キルアさんですね。」

「フェイトく早く家帰ろうお腹減ったよー。」

「うんそうだねアルフ帰ろうか・・・キルアさんもほら一緒に。」

「ああ分かった。」

しかしあのジュエルシード言う石ただの石では無いようなんだが何故あんな少女が集めているんだ・・・それに転生者とは・・・まあ今考えても仕方ないな・・・。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（後書き）

フェイト「小説どうでしたか？できれば次も見てください！」

キルア「よろしく頼む。」

## キャラ紹介（前書き）

キルアのキャラ紹介です。

## キャラ紹介

### キルア

次元を渡り歩く旅の格闘家、旅の目的は己の中の殺意の波動を完全に克服する為である。

### 能力

殺意の波動（次元転移の為に使用はしているが戦闘では滅多に使わない。）

### 技

暗殺拳をベースに強化した技を使う。

### 性格

人に厳しく自分に厳しい性格、戦いにおいては非常に冷静。

### 見た目

黒い胴着に身を包んでいる。

髪は少し跳ねっ毛の黒髪。

目の色は青色。

身長は178cmである。

荷物袋を持っている（ストリートファイターのリュウのものと見た目は同じ）

バカな転生者

こいつ今後でるかな・・・。

リリカルなのはの世界でハーレムを目論む・・・こいつだけじゃないけど

技

正直どうでもいい。

性格

バカ

能力

キルアにとってはたいしたことなし

見た目

別にこいつの見た目なんか読者様も知りたくないと思う。

転生者「おい俺の紹介いいかげんだぞ!？」

作者「だってただの字数稼ぎだもん。」

転生者「テツメエ!」

作者「キルアさん黙らせてください。」

キルア「分かった。」

ガン!

転生者「ひでぶう!」

作者「読者の皆様これからもよろしくおねがいします。」



## キャラ紹介（後書き）

作者「本当はキルアの紹介だけで良かったんだけどな・・・。」

キルア「ネタに影響がでるから出せないものがあつた・・・だからどうでもいい奴で字数稼ぎ・・・と言う所か・・・。」

作者「うんそうだね。」

フェイト「キルアの語られない部分・・・気になる。」

作者「それは物語でおいおいね・・・読者の皆様これからもよろしく  
お願いします。」

意外にも料理が出来る格闘家（前書き）

作者「今回は少しほのぼの系かな？」

## 意外にも料理が出来る格闘家

「ふむ・・・これは良い所に住んでいるな。」

フェイト達の住んでいる場所は明らかな高級マンションだった・・・。

「キルア、ご飯の用意するね。」

「ああ・・・頼む。」

「もぐもぐ・・・。」

「ん？」

アルフはすでに何か食べているようだった見てみると・・・

「・・・ドックフード？」

「何？キルア？」

「いや・・・何でも・・・。」

「そう？」

アルフは狼の使い魔だと思うのだが・・・まあ狼でもドックフードを食べることはあるだろうな・・・。

「キルアー！ご飯出来たよ！」

「ん？随分早いな・・・カップラーメン？」

「え・・・嫌いだった？」

「いや、そうでは無い、いつも食べてるのか？」

「うんそうだよ？」

「そうなのか・・・育ち盛りにカップラーメンを毎日・・・これは悪いな・・・」

「仕方ない・・・俺が作ろう・・・」

「えっ？」

「育ち盛りにこんな物ばかりではいかんからな・・・」

「キルアって・・・料理できるの？」

「出来るぞ。」

「意外だねえキルア、アンタ見た目からして格闘家だろう、ただ焼いて食うしかできないと思ったよ。」

「かつてな格闘家のイメージを付けるな。」

「確かに調味料が無い場合が多いから大方単純な食べ方になるだろうが・・・」

「さて・・・冷蔵庫の中は・・・空だな・・・」

「じつ、じめんなさい。」

「いや・・・別にいい、無ければ採って来ればいい・・・。」

「アンタ・・・今、買ってくるじゃなくて採って来るって言った？」

「言ったが？まあ狩っても来るが。」

「じゃあ、お金渡すね。」

「ああ米と調味料の分だけでいいぞ。」

「え？それだけ・・・？」

「他のは金がかからんからな。」

「なんで？。」

「たぶんキルアの奴、自然にある奴採ってくる気だ・・・。」

「それって大変じゃあ・・・。」

まずはスーパーで米と調味料だ・・・次に野菜だな・・・山菜なら山にあるだろう・・・次は海で魚でも狩るか・・・。

「行つて来る・・・。」

こうして俺は材料をとりに行った・・・すぐに戻るが・・・。

「行っちゃったね・・・」

「そうだね。」

「戻ったぞ。」

「早っ!？」

「別に驚かなくてもいいだろう・・・」

「いや、驚くよ!てか何その巨大な魚!？」

「マグロだが・・・。」

「マグロって・・・何か本当、凄いねアンタ・・・。」

「早速作るか・・・しばらく待っているフェイト」

「う・・・うん。」

「一体どれほどのものが出来るんだろうねえ・・・。」

「楽しみにして待ってよアルフ。」

「さて・・・マグロは切り分けて使わない分は冷蔵庫に入れよう・・・  
マグロは軽く醤油で煮付けるかな・・・。」

山菜は・・・味噌汁にでもするか・・・では始めるか・・・

「まだかねー。」

「もうすぐだと思うよアルフ。」

「出来たぞ。」

「うわぁ・・・凄い。」

「こりゃ美味しそうだ。」

「いただきます！」

「この煮付け美味しいねえ。」

「アルフ・・・さっきドックフード食べてなかったか？」

「こんなの見てたらお腹減っちゃたんだよ。」

「まあ・・・多めに作ったし別にいいが・・・。」

「この味噌汁も美味しい。」

「そうか・・・それは良かった。」

「誰かの作ったものってあったかいね・・・。」

「ん？何か言ったか・・・フエイト？」

「ううん．．何でもない。」

「そうか．．では俺も食べよう。」

こうして俺達は三人で食事を楽しんだ．．。



意外にも料理が出来る格闘家（後書き）

フェイト「キルアの料理、美味しかったね。」

アルフ「そうだねフェイト。」

キルア「喜んでくれてなによりだ・・・。」

作者「次回もどうか読んでくださいね！」

石集めを協力する事にした格闘家（前書き）

今回プレミア登場です！

## 石集めを協力する事にした格闘家

フエイト S a d e

「あの・・キルア、ちょっといいかな？」

「何だ？」

「お願いがあるんだけど・・。」

うう・・キルア、お願い聞いてくれるかな？

「ジュエルシード集め手伝ってくれる・・？」

「あの石集めか・・分かった手伝おう・・。」

「本当！」

「ああ・・本当だ。」

「やったあ！」

えへへ・・キルア、手伝ってくれるんだ。

「何を喜んでいるんだいフエイト？」

「キルアがジュエルシード集め手伝ってくれるって！」

「本当かい！確かにキルアは凄まじい力を持つてるから協力してく

れると嬉しいね!」

「うん、だよな。」

「・・・でもキルア本当にいいのかい?」

「何だ?」

「アンタ見たところ旅の最中みたいだけど・・・何か目的があるんじゃないか?」

「あつ。」

確かにキルアは旅の最中みたいだ・・・私のお願いで足をひきとめるのは・・・

「その事なら気にしないでいい、目的はあるが・・・それは急がなくてはいけないことではない。」

「本当!」

「こりゃ頼もしい仲間が出来たね。」

えへへ・・・キルアと一緒にジュエルシード集めてくれる・・・嬉しいな。

キルア     S a d e

ジュエルシード・・・あの石は明らかにこのような少女・・・フェイト

が欲しがる物ではない・・・では誰が・・・

「キルアに協力してもらおう事、母さんに報告しなきゃ。」

「プレシアの所に行くのかい・・・？」

むっ・・・アルフの表情が暗くなっただな・・・それに母さんに報告・・・  
プレシアの所・・・そういう事が・・・。

「キルア、ちよつと一緒に来てくれる？」

「ああ・・・分かった。」

「じゃあ・・・行くよ、次元座標876C4419・・・。」

・  
転移の魔法か・・・ジュエルシードを欲しがっているのは・・・恐らく・・・

「『時の庭園』テストロッサの主の下へ！」

時の庭園・・・

「少し変わった空間だな・・・。」

高次元空間・・・と言う所か・・・

「キルア、行くよ。」

「ああ・・・分かった。」

「母さん・・・失礼します。」

「何かしら・・・フェイト・・・あら、その男は？」

何だ・・・あの目は・・・娘を見る目じゃないぞ・・・いや・・・冷たいものとは別のものも感じられるな・・・

「あの・・・ここにいるキルアにジュエルシードを集めを手伝ってもらう事になりました。」

「こんな魔力を全然感じない男に・・・？」

この世界は魔力基準だな・・・

「キルアは魔力が無くても凄い強いんだよ！」

「本当にそうかしら・・・。」

「なら自分の納得の行く試し方をすればいい・・・。」

「そう・・・分かったわ。」

杖を向けて来たな・・・魔法か・・・

「えっ！？母さん、待って！」

「避けられるかしら？」

雷の魔法を奴は放って来た・・・普通に避けられるな・・・

ビッ、ビッ

「一步も動いてないのに無傷！？」

「何を言っている・・・ちゃんと避けた・・・まあ攻撃を受けたとしても無傷だが・・・。」

あれぐらいではな・・・

「動いたと言うの・・・全く分からなかった・・・。」

「どうこれがキルアの実力だよ！」

「・・・分かったわ、フェイトこの男に協力してもらいなさい。」

「あつ、ありがとうございます。」

「プレシアのあんなに驚いた顔なんて初めて見たね！」

「あつ、アルフ！」

アルフ・・・お前も初めは驚いていたよな・・・。

「じゃあ帰ろうか、キルア。」

「そうだな・・・。」

「ちょっと待ちなさい．．キルア、貴方に話があるわ。」

「何だ？」

「フェイトとアルフは部屋から出なさい。」

「はっ、はい。」

二人きりで話し．．奴は俺に何の話がある．．？

「キルア、質問いいかしら？」

「別にいいが．．。」

「貴方、何者？」

「俺はキルア．．旅の格闘家だ．．。」

「そう言う事を聞いてるんじゃないわ．．貴方の力についてよ。」

「あれは修業で培った力だが？」

「修業ですって．．！？」

「それにあの位の動き．．俺の知ってる世界の奴は大体できたぞ．．？」

「貴方．．一体どんな世界を生きて来たの．．？」



「そこまで答える義務は無いな。」

「そう・・・分かったわ。」

「今度はこちらから質問していいか？」

「何？」

「あの壁の向こうから・・・死んだ者の匂いがするのは何でだ・・・？」

「・・・！？」

「まあ・・・余りにも言いたく無い事なら話を無くていい・・・。」

「そう・・・ありがとう・・・。」

「あと一ついいか？」

「何？」

「お前、病気だろう・・・。」

「・・・！？何で分かるの・・・。」

「お前の気の流れが乱れていたからな・・・。」

「気？」

「人の中に流れる生命エネルギーだ・・・。」

「そうなの・・・。」

「お前にこれをやろう・・・。」

俺は袋から薬を取り出しプレシアに差し出した。

「これは・・・?」

「薬だ・・・飲め・・・良く効く奴だ。」

「あつ、ありがとう。」

「病気を治したら、フェイトに対する・・・自分の中で押し殺している感情に・・・素直になるんだな。」

「・・・!？」

「では俺はフェイトの所に行こう・・・。」

プレシア    S a d e

あのキルアという男・・・何なのまるですべてを見透かしてるよう・・・。

「フェイトに対する気持ちか・・・。」

確かに私の心の中にはあの子を・・・フェイトを・・・道具ではなく・・・もう一人の娘として見ようとした気持ちがあるのかもしれない・・・

「だつて・・・」

あの子の私に対する感情が余りにも純粹なのだから・・・

「でも・・・。」

今更考えたつて無駄よね・・・。

「私の体はもう長くない・・・。」

そう言えばさつきキルアから薬をもらつたわね・・・本当に効くのかしら・・・私の体の病はそう簡単に治るものじゃ・・・。

「騙されたと思って・・・飲んでみるかしら。」

ゴクン・・・あれ・・・これは・・・

「か、体が軽くなった・・・。」

まっ、まさか治つたつて言うの!?

「こんな薬を持つてゐるなんて・・・キルア・・・貴方、本当に何者なの・・・?」

キルア     S a d e

「むっ・・・。」

「どうしたのキルア？」

「いや・・・何でもない・・・」

「そう？じゃあ家に帰ろう。」

「そうだな・・・」

プレシアの気の流れが正常になった・・・ちゃんと薬を飲んだようだな・・・

「明日からはキルアも一緒にジュエルシード集めだね、がんばろう！」

「ああ・・・そうだな。」

明日からジュエルシード集めか・・・フェイトの身をちゃんと守らねばな・・・そんな事を考えながら俺はフェイト達とともに帰路についた・・・。

## 石集めを協力する事にした格闘家（後書き）

キルア「次からはジュエルシード集めか・・・。」

作者「一応そうですね。」

フェイト「キルアがいるからとっても安心だよ！」

作者「確かにキルアさんチートですからどんなことあっても対応してくれますからね。」

キルア「世の中には俺より強い奴もいる・・・。」

フェイト「謙虚なんだね、キルアは！」

作者「あのお二人さんよろしくお願いします。」

フェイト「はい！」

キルア「では次回も・・・。」

フェイト「どうかこの小説を見てください！」

欲深き者には破滅のみ。  
(前書き)

重要なオリキャラ登場！

欲深き者には破滅のみ。

「はああ・・・。」

今キルアは気を高め練り上げていた。己の体が鈍らぬように・・・これをかれこれ朝の三時から四時間は続けている。

「ふう・・・これぐらいで良いか・・・さて・・・戻るとしよう。」

アルフ Side

「ふぁー・・・ん?」

キルアがいないねえ・・・。

「どこいったんだい・・・トイレかな?」

「トイレじゃ無いぞ。」

「わっ!?」

いつからそこに!?

「急に現れないでおくれよ、心臓に悪いじゃないか!」

「次からは気をつけよう・・・。」

「まったく・・・。」

「さて・・・朝飯でも作ろうか・・・。」

「ふぁ・・・おはよう、アルフ、キルア。」

「おはよう・・・フェイト、今から朝飯を作るから待っていてくれ・・・。」

「うん、分かった。」

「食べたらジュエルシード探しだね。」

「そうだな・・・。」

このあと私とフェイトはキルアの作った朝ごはんを食べた。やっぱり美味しかったね。

キルア Side

「さて・・・行くか。」

「そっぴゃキルアって飛べるのかい？まあアンタなら走ってもついてこれそうだけど・・・。」

「飛べるぞ・・・。」

「魔力もないのにどうやって飛んでるの?。」



「それは気力だな・・・。」

「気？」

「簡単に言えば生命エネルギーだ・・・。」

「ふーん・・・アンタの強さの秘密はそれかい？」

「まあ・・・そうかな・・・。」

まあ・・・別の力も俺は持っているが・・・それは戦いでは滅多に使わないしな・・・

「気かぁ・・・私も使えるかな？」

「修業をすればな・・・。」

まあ・・・フェイトは魔力の資質が高いから気よりも魔力を高めた方がいいだろうが・・・。

「さて・・・話はこれぐらいにしてジュエルシード集めを開始しよう・・・。」

「うんそうだね。」

俺達はジュエルシードがあるのかまだ探索されていない場所に向かった。

「この辺りはまだ探してないんだよね。」

「では探すでしょう・・・。」

「あつ、キルア、ジュエルシールドに衝撃とか与えちゃダメだからね。」

「分かった・・・。」

大方・・・暴走でもするのだろうか・・・。

「さて・・・あの石の力を探ってみるか・・・。」

ふむ・・・感じないな・・・。

「力が発動してる状態ならすぐに見つかるのだろうか・・・。」

神経をもつと研ぎ澄ますか・・・。

フエイト Side

「んー反応ないなー。」

ジュエルシールドが発動していないのか、それともただ無いだけなのか・・・。

「もつと頑張つて探さないと・・・。」

お母さんの為にも・・・。

「フェイトちゃんみつけた・・・プヒヒ。」

「えっ、何!？」

「ジュエルシード探してるんでしょ・・・ぼくちん持つてるよ、しかも原作じゃ見つからなかったのをね・・・プヒヒ。」

「・・・原作？」

「ジュエルシード欲しいんでしょ、ぼくちんのお嫁になるならあげるよ・・・プヒヒ。」

「な、何言ってるのこの人・・・。」

何か・・・怖い。

「まあ、嫌って言うてもお嫁にするけどね・・・プヒヒ。」

「ひっ、さ・・・サンダースマッシャー!」

バチィ!

「やつ、やった・・・?」

「だめじゃないか! 未来の旦那様に攻撃しかけちゃ! それにぼくちんはSSSランクの魔力を持つてるんだからこんなのきかないよ!」

「あ・・・ああ・・・。」

「ちょっとおしおきしなきゃいけないかな。」

「ひっ……。」

怖い……助けて……キルア！

「おい……フェイトに何をしようとしている……。」

「プヒヒ!？」

「キルア!」

キルア Side

ジュエルシードの力を感じて、その場所にフェイトと知らない奴の  
気を感じ、何かと思い……来てみたらこんな事になってるとはな……

「プヒヒ……なんだお前は？」

「それはこっちの台詞だ……貴様は何者だ……。」

「ぼくちは転生者さ。」

転生者……会うのは二人目だな……。

「そうか……転生者か……。」

「プヒヒそれよりもお前は誰かって聞いてんだよ、ぼくちをおこ  
らせるの怖いよ。」

「別に貴様が怒っても怖くはないが・・・まあ・・・答てやる、俺はキルアだ・・・」

「キルアだつて？そんな奴原作にいたかな？」

「キルア、助けに来てくれたんだね、ありがとう！」

「ああ・・・無事のような・・・フェイト。」

「プヒヒー！お前何フェイトちゃんと仲良くしてんだぶつ殺すぞ！」

「殺れるものならな・・・」

「なめやがつてー！くらえー！SSSランクま・・・」

ドガッ。

「プヒヤフ！？いたいよーお前なにしゃがつた！」

「普通に殴っただけだが？」

「うそつけーお前がなぐるとこなんか全然みえなかったぞ！」

「貴様に目視できない速さなだけだろう・・・」

「くっそーお前も転生者だったんだなードラゴンボール基準の力もらいやがつてーずるいぞー！」

「俺は転生者じゃない・・・」

「うそつくなー！転生者でもない奴がこんな力、もってるわけないだろ！」

「それより・・・貴様、ジュエルシードを持っているな・・・大人しく渡せ・・・。」

「嫌にきまつてんだろぅがー！くそこぅなったらジュエルシードの力を使う！」

「えっ！？」

「プヒヒ・・・プヒッ、力がみなぎる。」

「確かに魔力が上がったみたいだな・・・。」

「くたばれー！！」

「キルアー！」

「・・・。」

シャッ、ドゴォー！

「ブビィ！？」

「ジュエルシードは貰うぞ・・・。」

「簡単に倒しちゃった・・・やっぱりキルアは凄い！」

「さて・・・ジュエルシールドも一つ手に入った事だし・・・フェイト、アルフを呼んで帰るぞ・・・」

「うん、そうだね。」

俺とフェイトはアルフを呼びに向かった・・・

キルア Side OUT

「ぐぞー壊れチート転生者め・・・。」

「彼は転生者では無い・・・。」

「！？誰だ・・・お前。」

「私はある御方の使者だ。」

「神の・・・か？」

「・・・力が欲しくはないか？」

「な・・・に・・・？」

「素晴らしい力をあげようと言っているんだ、君の知っているドラゴンボールとかいう漫画のキャラとやらの力を遥かに越える力を・・・。」

「ほんとか!？」

「本当だとも。」

「どのキャラより強い力だ!？」

「計測では超一星龍とかより遥かに強いな。」

「何!？くれ．．．いますぐ、くれ!」

「焦らなくとも、すぐに渡そう．．．受けとれ!」

ある御方の使者は転生者の胸に光る玉を押し込んだ。

「プヒッ?プヒィー!」

「力は与えてやったぞ。」

「ミナギ．．ル、チカラガミナギルゾ。」

「．．．（精神が壊れかけているなこいつの精神力はこんなものか．．．）」

キルア Side

「むっ．．．。」

何だ．．この巨大な気は．．。



「キルア、やっぱアンタ凄いねえ、SSSランクの魔力のうえにジユエルシードの力使う奴あっさりやっちゃうなんてね・・・どうしたんだい？」

「巨大な気がこちらに向かってくる・・・。」

「何だって!？」

「キルア・・・コロス」

「な、何だいコイツ。」

「この人・・・さっきの転生者とかいう人に少し似てる・・・。」

「しかし・・・気の性質は全くの別ものだが・・・。」

「ウガガ・・・シネツ！キルア！」

ブオン！

「スピードもさっきとは全く別ものだな・・・だが・・・捉えきれる。」

ガッ。

「ウケトメタ、ダト!？」

「この位では俺を倒せん・・・。」

だが・・・どうやって、この短い時間の間にこんな力を身に付けたん

だ．．？

「ヴ．．ベボラ．．ガギグヤチャベ．．．。」

「！．．．フェイト！アルフ！目を閉じろ！」

「えっ、何で？」

「何で閉じなきゃいけないんだい？」

「いいから早くしろ！」

この技は．．見られたくないからな．．。

「わ、分かった．．。」

「閉じるよ．．。」

「それでいい．．。」

「ヴグオアエ！」

「久々に使うな．．この技を．．」

今は殺意の波動なしで使えるとはいえ．．使えば殺意の波動に響くからな．．。

「くらえ．．．瞬獄殺。」

ドガガガガガガガガガガッ！キン！！

「ガ．．．ガ．．．ガ．。」

ボシュツ！

「もう開けていい？」

「ああ．．。」

「ありや？さっきの奴は？」

「消滅させた．．。」

「え．．．殺したの。」

「奴は精神が崩壊して力を暴走させ爆発しそうだったからな．．．人殺しと言うならそう呼んでも構わん．．．事実そうだからな．．．」

「ううん．．．言わないよ．．．だって仕方なかったんでしょ．．．私たちを守るために．．．」

「そうだよ、キルア、アンタが気にすることはないよ！」

「そうか．．．」

だが．．．俺が人殺しなのは間違いない．．．なぜなら．．．

「それよりもキルア、早く帰ろう！」

「そうだよ、帰ってゆっくり休もうじゃないか。」

「そうだな・・・。」

それにしても・・・奴はどうやってあんな力を手に入れたんだ・・・。

キラア    S i d e O U T

「ふむ、やはりこうなったか・・・それにしてもあの男の力は・・・あの御方に報告しておくか・・・。」

この謎の使者は何者なのか・・・そしてあの御方とは・・・？

欲深き者には破滅のみ。（後書き）

作者「いやーみごとにオリ展開フラグたったな。」

キルア「大丈夫なのか・・・？」

作者「頑張ります・・・。」

フェイト「それにしても私キルアに全然ついていけない・・・。」

作者「一応、フェイトもパワーアップさせようかとは思っただけど・・・。」

フェイト「本当！」

作者「でもキルアには結局は全然及ばないと思うけど。」

フェイト「だよね・・・。」

キルア「人には可能性というものがある・・・フェイトが俺より強くなる可能性もあるだろう・・・すぐには無理だが。」

フェイト「そう言ってくれると嬉しい・・・ありがとうキルア！」

キルア「・・・普通の事を言ったただけだが・・・。」

作者「では読者の皆様どうか次回もこの作品を見てください。」

フェイト「次回もどうかよろしくお願いします！」

キルア「次回もよろしく頼む・・。」

転生者再び！（前書き）

バカな転生者再び！

転生者再び！

キルア Side

「・・・フェイトちょっと昨日、転生者から手に入れたジュエルシードを見せてくれ・・・」

「うんいいよ？」

「・・・。」

「どうしたの？」

「いや・・・何でもない・・・。」

「そう？・・・そう言えばこのジュエルシード原作では見つかったないジュエルシードとか言ってたな昨日の転生者って人。」

原作？それにしても・・・昨日の違和感は確かな物だったか・・・このジュエルシード最初に見た物とは、何か違う・・・ほとんど同じなのだが・・・。

「では、ジュエルシードは返すぞ。」

「うん。」

「さあ今日も、はりきってジュエルシード探そうかね。」

「そうだね、アルフ。」



「いや・・・今回は俺だけで探しに行こう・・・。」

「えっ、何で？キルア。」

「フェイトにアルフ、お前らは俺と会う前から休まずにジュエルシードを探してるんだろう・・・たまにはゆっくり休め・・・。」

「えっ、でも・・・。」

「分かったよ・・・キルア、アタシとフェイトは今日は休むよ。」

「アルフ！？」

「フェイト確かにキルアの言う通りだフェイト特にアンタは無茶してるじゃないか。」

「で・・・でも・・・。」

「フェイト、休息も時には重要だ。」

「わっ、分かったよう・・・キルアと一緒に探したかったのに・・・キルアのバカ・・・。」

「何か言ったか？」

「なっ、何でもない！」

「そうか・・・朝飯と昼飯は冷蔵庫に作り置きしてあるのがあるからそれを食べてくれ・・・夕方までには帰る・・・では行って来る。」

「気をつけてね、キルア！」

「ああ・・・分かった。」

俺はフェイトがまだ探してないと言っていた場所に向かった。

「ふむ・・・では神経を研ぎ澄まして・・・。」

「見つけたぜえ！」

「お前は・・・最初に会った転生者。」

「覚えていたか！」

「まあ・・・一応・・・。」

「ムツカツクなテツメエ・・・。」

「ジュエルシード探しで忙しいんだ・・・相手にしてる暇は無い。」

「ここにやジュエルシードはねえよ！原作にこんな場面はなかったからなあ！」

「原作？」

フェイトが言うには昨日の転生者も原作がどうか言っていたらしいな・・・情報を引き出すか・・・。

「おい、原作ってなんだ・・・？」

「それやこの世界のアニメだろ！」

「アニメね・・・。」

「もしや・・・この世界は知り合いの科学者が言っていた漫画とやらによく似た世界・・・そんな所か・・・？」

「おい・・・原作で見つかっていないジュエルシードってのはあるのか？」

「はあ？何言ってるの？全部見つかってんだろお前、にわか転生者なの？」

「俺は転生者じゃない・・・。」

「原作ではジュエルシードは全部見つかっている・・・か・・・では昨日の原作にはないジュエルシードと言っのは一体・・・？」

「転生者じゃないって・・・じゃあお前のその力なんだよ！？」

「まあこの世界はあくまでもよく似た世界・・・原作とやらと違う所もあつて当然だな・・・」

「テツメエ・・・何者だ！？」

「ただの・・・旅の格闘家だ。」

「そんな答えで納得できると思ってんのか！パワーアップした俺の力でぶっ・・・」

トンッ

「情報提供・・・礼を言う・・・無駄に戦うのは好まないんで・・・気絶してもらっ」

「あ・・・あが。」

「さて・・・」

色々気になる事はあるが・・・ジュエルシード探し・・・再開だ。

「ふむ・・・この辺りには無いようだな・・・」

あれだけ探したのだから間違いないな・・・。

「そろそろ、夕方だ・・・帰るか。」

今回の収穫は無しか・・・

フエイト Side

「キルア・・・そろそろ帰ってくるかな？」

ガチャ

「今戻ったぞ・・・。」

「あつ、お帰りキルア！」

「んで？ジュエルシードは？」

「すまないな・・・見つからなかった・・・。」

「きつ、気にしないでいいよ！明日、私と一緒に見つければいいんだから！」

「ねえ・・・フェイト、私にとって事はアタシ抜きかい？」

「あつ、アルフそういう事じゃないよ！」

「ごめん・・・ちょっと忘れてた。」

「そう・・・ならいいんだい。」

「今日はジュエルシードを見つけれなかった詫びに特別な料理を作ろう・・・。」

「特別な料理？」

「何だろう・・・気になるな。」

「ウヤパマチヨスだ。」

「ウヤパマチヨス！？」

全然聞いたことないよそれ!?

「それ・・・美味しいのかい?」

「ああ・・・美味しい。」

キルアがあんなに笑みをこぼすなんて・・・どれだけ美味しいんだろう?  
う?

「では・・・作るのに取り掛かるう。」

「楽しみにしてるよ、キルア。」

料理中~~~~料理終了。

「出来たぞ。」

「凄いこんなの見たことない!」

「いいにおいだねえ〜いただきます!」

ガブツ・・・もぐもぐ

「どうだ?アルフ。」

「これは!?!説明できないけど美味しい!すっごく美味しい!」

「じゃあ、私も。」

パク・・・もぐもぐ。

「美味しい・・・これすごく美味しいよ！」

「そうか・・・喜んでくれて何よりだ。」

「これ、材料何なの？」

「チムウマムとウラパラルにカリマミナグだ。」

「聞いた事ない食材だね？」

「まあ・・・貴重だからな。」

「これ・・・母さんにも食べさせてあげたいな・・・。」

「そうか・・・では届けて来よう。」

ブン・・・

「えっ・・・？」

キルアが・・・急に消えた！？

プレシア Side

「・・・・・・。」

「どうした、そんなに驚いた顔をして？」

「普通、目の前に人がいきなり表れたら驚かないかしら？」

「ふむ．．それもそうか．．。」

「と．．言っよりどうやってこの場所に來たの？フェイトは一緒にやないみたいだし。」

「俺の力を使って來た．．このぐらいの移動なら大丈夫なんでな．．。」

「本当．．貴方すごいわね．．ああ、それと礼を言わなきゃ．．病氣、調べた所完全に治っていたわ．．ありがとう。」

「別に礼を言われる事はしていない．．。」

「所で何しに來たの？」

「これを渡しに來た。」

「これは．．？」

「何これ．．いい匂いはするけど．．。」

「ウヤパマチヨスと言う料理だ。」

「ウヤパマチヨス？聞いた事ないわね．．で、何でこれを私に渡しに來たの？」



「フェイトがこれをお前に食べさせてあげたいと言ったからだ。」

「!?!?そう・・・。」

「じゃあ・・・俺はフェイト達の元に帰るぞ・・・。」

「待って!」

「何だ?」

「フェイトに今度一緒に・・・ご飯食べましょって伝えて・・・。」

「・・・分かった。」

ブン・・・

「・・・言っちゃったわね私・・・以前なら絶対あんな言葉考えられないわ・・・。」

私の心が病がなくなつた事で変わってるのかしら・・・。

「とりあえず頂こうかしらウヤパマチヨス。」

パク・・・もぐもぐ。

「美味しい・・・!?!?」

それに何かお肌のツヤが良くなってる!?

「これは素晴らしいわ・・・。」

キルア Side

「戻ったぞ・・・。」

「どこに行ってたのキルア？」

「プレシアの所だ。」

「母さんの所に!？」

「フェイトが母さんにこの料理食べさせいと言ったからな届けて来た。」

「そうなんだ・・・ありがとうキルア!」

「礼を言われるほどの事ではない・・・それよりも、フェイト・・・近々良い事があると思うぞ・・・。」

「えっ、何？」

「さて・・・何だろうな？」

全て伝えるよりも・・・こちらの方が分かった時に嬉しいだろう・・・。

「さて・・・俺もウヤパマチヨスを食べるか・・・。」

「あーゴメン、キルア。」

「何だ・・・アルフ？」

「アンタの分まで食べちゃった・・・ウヤパマチヨス。」

「何・・・！？」

「ごめん・・・キルア私は止めたんだけど・・・。」

「いや・・・いい・・・俺は別の物を作って食べよう・・・。」

ウヤパマチヨス・・・楽しみだったんだがな・・・。



作者「読者の皆様これからこの小説をどうかよろしくお願いします！」

フェイト「次回も見えてね！」

アルフ「よろしく頼むよ！」

キルア「どうか・・・この小説を見てくれ・・・。」

## 白き魔法少女との出会い（前書き）

リリカルなのはの主人公高町なのは登場！

## 白き魔法少女との出会い

「キルア！ジュエルシードの反応があつたよ！」

「ん？何処だ？」

「ちょっと遠いけど海鳴つて所。」

「では・・・すぐに向かうか・・・。」

「アタシは別のジュエルシードを搜索するよ。」

「転生者とか言う奴等がいるからな・・・気をつけろよ・・・。」

「分かつてるって。」

キルアとフェイトは海鳴のジュエルシードの反応がある場所に向かった。

「ん？何だ・・・あの辺り、空間が灰色になっているぞ・・・。」

「あれは・・・広域結界！？」

「見た所、辺りの空間との時間軸をずらす結界術か・・・。」

「でもこれが発動してるという事は・・・私以外の魔導師がいる。」

「そうか・・・では、ジュエルシードの元に向かうぞ、フェイト。」

「うん。」

キルアとフェイトはジュエルシードの元へと向かう。そしてその場所には巨大な猫と白い魔法少女とフレットがいた。

「でかい猫だな・・・。」

ジュエルシードの気配を感じるな・・・あの猫。

「何だろうあの人たち？」

「あれは・・・！？」

片方の格闘家風の男はともかく、もう一人の少女は僕と同じ世界から来た魔導師！？まずい！今のなのはじゃ勝てない！

「フェイト、さっさとジュエルシードを回収しよう。」

「うん、そうだね！」

「ちょっと、何を言ってるのあなたたち！ジュエルシードはユーノ君のなんだよ！」



「証拠は？」

「えっ、証拠はユーノ君がそう言ったから……。」

「そう言ったからか……果たしてそれは本当の事なのか？」

「えっ？」

「巨大な力を持つジュエルシードを自分の手に置くための嘘だったら？」

「なのは、僕は嘘なんか言っていない！」

「……私は……私はユーノ君を信じる！」

「なのは！」

「信じるか……迷いのない、いい目をしてるな……だが……周りをよく観察する目はまだまだだな。」

「えっ？」

「キルアー！ジュエルシード封印完了したよ！」

「えっ！？？」

キルアがなのはとユーノと会話している間にフェイトがジュエルシードを封印していた。

「喋ってる間に……卑怯だぞ！」

「喋って、隙だらけなのが悪いんだよ？」

「なに！？」

「貴様は格闘技の試合中に余所見をした選手がやられて、相手の選手に卑怯だと言ったらどう思う？」

「え、それは余所見した方が悪いんじゃないや……。」

「そうだ……余所見した方が悪い……だからフェイトの行為を卑怯だと言うのは間違いだ。」

「ぐっ。」

「キルア、あの子……ジュエルシードいくつか持ってるね。」

「ああ……だな。」

「茶髪の少女……なのはとか言っただな大人しくジュエルシードを渡せ……無駄な争いは好まん。」

「嫌です！これはユーノ君のなんです！」

「君たちはジュエルシードを集めて何をしようとしているんだ！？」

「……知らん。」

「知らんって……。」

「何をするかは本当に知らん。」

「母さんの研究に必要なって事は聞いてるけど・・・私も何をするかは知らないや・・・。」

「ジュエルシードの危険性が分かっているのか!？」

「いや・・・正直、手に終えん物では無いと思うな。」

「魔力も無い人間が何を言っているんだ!」

「魔力が無くてもキルアには気があるんだよ!」

「気?」

「生き物に流れる生命エネルギーだよ!」

「生命エネルギーって・・・それは一体どれほどのものなんだ・・・?」

「別に貴様に見せる必要はない。」

「なっ。」

「それよりもそのあなた・・・ジュエルシードを渡して。」

「嫌です!」

「じゃあ力づくでも。」

フェイトはバルディッシュを構えた。

「!・・・戦うしかないんだね。」

なのはもレイジングハートを構える。

「フェイト。」

「キルアは手出ししないで・・・ここは私だけでやるから。」

「そうか・・・分かった。」

今二人の魔法少女が激突しようと・・

「お、いたいたフェイトちゅわん!」

「えっ、何!??」

「お呼びじゃない、なのはもいるぜー。」

「あなたもしかして・・・転生者!??」

「え、何で分かったの?もしかしてあつたことすでにあんの?」

「・・・まあね。」

「てか、その格闘家風の男も転生者?」

「これと言つのは何度目だろうか・・・俺は転生者じゃない・・・。」

「ふーん、まあいいや・・・とりあえず、なのは死んどきな！この白い魔王め！」

転生者3はなのはに向かってSSSランクの魔法を放とうとした・・・だが

ガッ

「へ・・・いつの間に？」

キルアが転生者3の腕を掴んでいた。

「おい・・・貴様、いきなりこのような少女に向かって白い魔王と言う発言と殺そうとするのはいけないんじゃないか？」

「か、彼いつの間にあの転生者と言う奴の腕を掴んでいたんだ！？」

「あの人、私を助けてくれたの？。」

「うぎ、放せ！」

「分かった・・・。」

パッ

「たく、いてえじゃんよ・・・さて、なのは殺そ。」

「何を勘違いしてるんだ？」

「へ？」

「俺は腕を放しただけで貴様を倒さんとは言っていないぞ・・・？」

「なんだと！？」

「心配するな・・・死なんぐらいの力加減でやってやる・・・。」

「んだと！」

「羅刹旋風脚！」

ギョオオ！

「ぐばあ！？」

「黒龍拳！」

ドガッ、ガッガッガッガッガッ！

「あべし！？」

「業・波動拳！」

ドンッ！

「うばあ！」

「ふう・・・久しぶりにこれらの技を使っ たな、たまには使わんとな・・・。」

「何が起こつたんだ・・・？」

「技を使ってこいつを倒しただけだ。」

「技を使つてたのか!？」

「フェイト、余計なちゃちゃが入った事だし今日はもう帰ろう・・・  
ジュエルシードを集めていればまたいずれこいつらとは会つだろう。」

「うん、そうだね。」

キルアとフェイトは帰ろうとするが・

「待って!」

なのはが呼び止めた。

「何？」

「私、高町なのは!あなたの名前は。」

「・・・」

「フェイト、名を語られたら返すのが礼儀だ。」

「うん・・・私はフェイト・テストロッサ。」

「フェイトちゃんだね・・・あのそちらの私を助けてくれた人は・・・」

「？」

「キルアだ。」

「キルア・・・さんですね。」

なのはは顔を赤らめながらキルアの名を呟いた。

「？・・・行くか、フェイト。」

「・・・。」

「どうした？フェイト。」

「なっ、何でもないよ！」

あの子もしかしてキルアの事・・・。

「む・・・この転生者はこんな所に置いておけんから山奥に捨ててくる。」

「えっ？」

「こんな奴をこんな所に放置していいと思うか？フェイト。」

「思わない。」

「だろう・・・。」



そう言つとキルアは転生者を抱えて消えた。

「あつ、消えた!？」

「すぐ戻つてくるよ。」

「戻つて来たぞ。」

「早つ。」

「まだ遅いほうだ・・・。」

「あれで遅いのか!？」

ユ一ノは凄く驚いた。

「じゃ、キルア帰ろう。」

「そうだな。」

キルアとフェイトは家に戻るのだった。

「・・・。」

「なのは？」

「あの人かつこよかったな・・・。」

「え？今なんて？なのは。」

「なっ、何でもないよ！」

一人の少女は恋に芽生えたようだった・・・。

## 白き魔法少女との出会い（後書き）

フェイト「……。」

キルア「フェイトはどうしたんだ？」

作者「乙女には色々あるんですよキルアさん。」

キルア「そうか？」

フェイト「（恋のライバルが増えちゃったよ……。）」

作者「（そもそもキルアさん恋愛事、興味無しだけどね……。）」

アルフ「私、出番少なかった……。」

作者「すいません次回ちゃんとけっこう出ますよ。」

アルフ「そう？。」

作者「では読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしく願います。」

フェイト「次回もどうか見てください！」

アルフ「次回もよろしく頼むよ！」

キルア「こんな小説だが次回もどうか見てくれ。」

溢れる思い・・・嬉しい涙（前書き）

プレシアが本当にいい母親って感じですよ！

溢れる思い・・・嬉しい涙

「プレシアにジュエルシードを今どれくらい集まったか報告しに行ってみたらどうだ？」

キルアはフェイトにジュエルシード集めの報告を提案した。

「うーん・・・そうだね行こうか。」

「何言ってるんだいキルア！まだ報告しに行く必要なんかないよ！」

アルフは怒り気味に反対した。

「アルフ・・・でも報告は必要だと思うよ？」

「でも・・・。」

「とにかくプレシアの所に行くぞ。」

「何でキルアが妙に行く気があるんだい？」

「・・・。」

プレシアがフェイトと共にご飯を食べようと言っていたからなど今は言えんな・・・それではサプライズにならんからな・・・。

「少しプレシアに聞きたい事があるだけだ。」

「ふーん・・・そうかい。」

「じゃあ・・・行くよ。」

フェイトは転移魔法を展開した・・・そしてプレシアの元へ。

「よく来たわね・・・フェイト。」

「?・・・。」

母さん・・・雰囲気が違う・・・?

「それで、何をしに?」

「あつ・・・ジュエルシード集めの報告を・・・。」

「そう・・・現在、幾つなの?」

「みつ、三つです・・・。」

これぐらいじゃやっぱり怒られるかな・・・。

しかしフェイトの予想とは違う行動が返ってきた。

「そう・・・まだまだ全部には程遠いけどよくやったわね、次からも

頑張りなさい。」

「えっ!?!」

フェイトは予想とは違う答えに驚いていた・・・その横でアルフも思わず口を開けて驚いていた・・・。

「フェイト、この前ご飯と一緒に食べましょって伝えていたわよね。」

「え・・・!?!」

プレシアの言葉を聞いたフェイトはもの凄く驚いた顔をした。キルアがちゃんと伝えていないから当然である。

「えっ!?!何を驚いた顔してるのフェイト・・・私はちゃんとキルアに伝えてって・・・。」

「えっ・・・聞いてないよ!?!キルア!。」

「ん・・・伝えたぞ?近々良いことがあると・・・。」

「え?あれがそうだったの!?!」

「キルア、何でちゃんと伝えなかったの!?!」

「そちらの方がフェイトの喜びも大きいだろう?サプライズと言う奴だ。」

「・・・意外ね貴方、真面目そうだからサプライズなどと言うものには興味無さそうなのに・・・。」

「・・・仲間から学んだ事だ。」

「仲間？キルアの仲間ってどんな人達？」

「面白い人達だ・・・。」

あの人達は元気だろうか・・・。

「それよりもプレシア、フェイトと一緒に、ご飯を食べるんだろう。」

「そうだったわね・・・アルフ、それにキルア貴方達も一緒にどう？」

「へっ！？アタシもかい！？」

「いいのか？」

「だって貴方達はフェイトの大事な人でしょ？」

「俺は一緒にいた期間が短いけど・・・。」

「一緒にいた期間なんて関係ない！キルアは大事な人だよ！」

フェイトは力を込めてそう口にした。

「大事な人か・・・そう言われると嬉しいものだな。」



「えっ！？嬉しいって・・・」

フェイトは頬を赤く染め、キルアを見た。

「俺もフェイトは大事な人だと思っている・・・」

「え・・・！？」

フェイトは今の言葉で顔を真っ赤に染めた・・・しかし・・・

「そう・・・大事な妹の様なものだと思っている。」

「え・・・？」

なんだ・・・妹の様なものか・・・。

フェイトはがつくりと頭を下げた。

「何を落ち込んでいるんだ？フェイト。」

「何でもない！」

「？・・・。」

「・・・クスッ。」

「母さん？」

「いや・・・フェイトの反応を見てたら可笑しくて・・・つい笑っち

やった。」

「え・・・母さん、笑ったの!？」

「だって貴方がキルアの前で表情を豊かに変えるんだもの・・・その貴方の反応が面白くて。」

「もー!母さん!」

「ごめんごめん、フェイト。」

フェイトとプレシアは笑いあっていた仲のよい親子のように・・・。

「あんなプレシア見た事ないよ・・・。」

「フェイト・・・幸せそうだな。」

「えっ、本当だ・・・フェイトすごくいい顔で笑ってる・・・。」

「あはは、母さんったら。」

「うふふ、ごめんフェイトでも反応が面白かったのよ。」

二人が笑いあってる所にキルアが口を出した。

「さて、そろそろ楽しい会話は食事をしながらにしないか？」

「あっ、それもそうね。」

「ねえ、ご飯を食べながらキルアの旅の話をしてよ。」

「それは私も知りたいわ、キルア、是非聞かせてほしいわ。」

「別に構わないが・・・。」

「母さん、キルアの旅の話し楽しみだね。」

「うふふ、そうね。」

「俺の旅の話などで盛り上げられるのか？」

「アタシも気になるし盛り上がると思うよ。」

「だいいが・・・。」

「どうかしら？」

テーブルの上にはプレシアの作った手料理が置かれていた。

「すごく美味しそう。」

フェイトは目を輝かせながらそう言った。

「いただきます！」

フェイトはそう言い料理を口にした。

「どう？フェイト。」

「もぐもぐ・・・うつ、うつ・・・グスッ。」

フェイトは急に泣き出した。

「どうしたのフェイト！？口に合わなかったの！？」

「ううん・・・美味しいよ・・・ただ嬉しくて・・・とっても嬉しくて、  
つい涙が出ちゃっただけ・・・。」

「フェイト・・・そんなに泣く程、嬉しかったの・・・ありがとう。」

プレシアはフェイトを優しく抱きしめた。

「おかあさん！うつ・・・うああん！」

「フェイト、ごめんね・・・こんな寂しくさせて・・・。」

私が自分の気持ちに蓋をしたがために・・・。  
貴方が私のもう一人の娘・・・アリシアの大切な妹と言う事に気づ  
いていたのに気づかないふりをして・・・。

プレゼントは何が欲しいアリシア？

んーとね・・・妹が欲しい！

えっ！？

だってそれなら、おかあさんがお仕事が忙しくて家に居なくても寂しくないもん！

ごめんねアリシア・・・今まで貴方の大切な妹に酷い事をしてきて・・・でもこれからは愛情をちゃんと注ぐわ・・・そして出来れば貴方も一緒に注いで欲しいわ・・・アリシア。

「フェイト・・・。」

「なあに母さん？」

「ジュエルシード集め続ける？貴方がしたくないならしなくてもいいわ。」

「えっ！？」

「だって危険な事もあるし・・・。」

「続けるよ・・・だって母さんの研究に必要なんでしょ？私、母さんの役に立ちたい。」

「フェイト・・・でも・・・。」

「それに危険な事なら大丈夫！だってキルアが守ってくれるもん！」

「フェイト・・・うんそうね、キルア・・・フェイトを絶対に守ってね。」

「当然だ。」

フェイトを守る事はすでに心に誓っているからな……。

「アンタら話すのもいいけど料理食べなよ。」

「あっ……そうだねアルフ。」

「キルアの旅の話を聞かせてもらおうかしら。」

「……本当に聞くのか？」

「聞く！」

「聞きたいわ！」

「本当に親子だな……二人は……。」

このあとキルアはくたくたになるまで旅の話をさせられた……。

溢れる思い・・・嬉しい涙（後書き）

キルア「話すというのは疲れるな・・・。」

フェイト「でもキルアの旅の話してて凄かったよ!」

アルフ「本当にねえ・・・てかアンタが次元を超える事ができたのも驚いたよ!」

キルア「俺がプレシアの所に一人で行った時点で気づくべきじゃないか?」

アルフ「えっ!?!」

フェイト「私、気づいてたよ。」

アルフ「あ、アタシだって気づいてたさ。」

フェイト「さっき驚いたって・・・。」

アルフ「あれはジョークだよ!」

キルア「（嘘だな・・・。）」

フェイト「それにしても凄いやね傷付いてもすぐに傷が燃えて直る人があるなんて。」

キルア「実際、あの回復力は凄まじかった・・・。」

作者「あの三人ともそろそろ・・・。」

フェイト「読者の皆さん次回もこの小説をよろしくお願いします!」

アルフ「読んでおくれよ!」

キラア「楽しんでもらえれば幸いだ・・・。」



気を使える様になりたい金髪の魔法少女（前書き）

フェイトがキルアから気を学びます！

## 気を使える様になりたい金髪の魔法少女

「ねえ、キルア。」

「何だ？フェイト。」

「私、気を使える様になりたい。」

「・・・しかし、フェイトには魔法があるだろう。」

「でも気を使える様になりたいの！」

「・・・分かった・・・しかしすぐに使える様には、なれんぞ。」

「うん！」

こうしてキルアによるフェイトの気の修行が始まった。

「・・・ねえ、キルア。」

「何だ？」

「立って、じっとしてるだけで気を使える様になるの？」

フェイトは不安げにキルアに問いかけた。

「いや、ならないが？」

キルアは真顔で使える様にはならないと答えた。

「えっ！？じゃあこれの意味は？」

「意味ならある・・・これは自分の中の気を感じれる様になるための修行だ。」

「自分の中の気を・・・」

「そう、まずは自分の中の気を感じられなければ気を使える様になる事を教えられん。」

「て、事はこれはキルアも通った道なの？」

「まあな・・・」

もつとも俺は一分で済んだがこれは言わんほうがいいな・・・

「じゃあ頑張るよ!」

「ふむ・・・では、まずは三時間・・・頑張れよフェイト。」

「さっ、三時間!？」

フェイトは三時間もこの体制でいる事に驚いた・・・しかしこれもキルアが通った道だと頑張る事にした・・・

三時間後・・・

「どんな感じだフェイト？」

「自分の中になんかこうポワッてるものを感じる・・・」

「それが気だ・・・それにしてもポワッとか・・・感じ方は人それぞれだしな・・・」

「ねえキルア、私もう気を使える？」

「いや、まだだが？」

「えー、まだなんだ・・・」

「気はそんなにいきなり使えるものではないからな・・・」

まあ個人差もあるが・・・何より戦闘一族なら生まれてからすぐに使えるだろうがな・・・

「次は昼飯まで組手をしようか。」

「組手？」

「軽く戦っただけさ。」

「きつ、キルアと？」

「そうだが、こちらは一切攻撃はしない・・・するのはフェイトだけだ。」

「そつ、そうなんだ良かった・・・。」

「しかし、ただ攻撃をするんじゃない・・・気を集中して攻撃するんだ。」

「気を集中・・・。」

「自分の中の気を攻撃する時の拳に集めたり・・・という感覚だ。」

「うん、分かったよキルア。」

こうしてキルアとフェイトの組手が始まった！

「はああ！」

フェイトは真っ直ぐキルアに向かって拳を突きだした！

パシッ

しかしあっさり止められる。

「気を全然集中出来てないぞフェイト！あと拳を突きだす時はもつと脇を閉めるんだ！」

「はっ、はい！」

「しかし今の突きは中々良かったぞ。」

「ほつ、本当！」

「ああ、さあ次だ！」

「はい！」

二人の組手が始まってしばらくたち・。

「いいぞフェイト！驚きだ！今日だけでここまで気を集中出来る様になるとはな。」

「そつ、そうなの？」

「それに格闘技の才能もあるかもな・。拳の打ち方や蹴りの放ち方が中々うまくなって来た。」

「それはキルアがどう直せばいいか教えてくれたから・。」

「しかしそれを早くにも学んだのは紛れもないフェイトの才能だ。」

「そつ、そうかな・。」

フェイトは照れながら頬を指でかいた。

「さて・。そろそろ組手は終わりにするか。」

「私、まだ続けたい！」

「そうか、なら続けよう。」

「いくよ！キルア！はああ！」

ガッ！

「また筋がよくなったな！」

「まだまだ！」

ヒュッ！シャッ！ビッ！

「いい動きの流れだ！」

「まだまだ良くなるよ！」

「その調子だフェイト！」

ヒュッ！ガッ！ドッ！

「いいコンビネーションだ！」

「えへへ・・・次いくよ！」

「来い！」

フェイトはキルアとの組手に夢中になっていた・・・特にキルアに誉められるのが嬉しいようだ。

二人の組手の時間がしばらく経つとアルフがやって来た。

「ちょっと二人とも昼の時間はもう過ぎてるよ！アタシはもうお腹ぺこぺこだよキルア！」

「それは済まなかったなアルフ。」

「ごめんね、ちょっと夢中になりすぎちゃった。」

「まったく・・・。」

「では・・・大急ぎで飯を作るか。」

「私もお腹ぺこぺこだから早く食べたい！」

「まあ・・・あれだけ動けばな・・・今日の飯はちょっと豪華にするか。」

「わーい、やった！」

「今日はフェイトが気の鍛練を頑張ったからな・・・。」

「次も頑張るよ！」

「うむ、毎日の積み重ねが大事だからな。」

「早く気を自由自在に使える様になりたいな・・・。」

「使える様になるさ・・・フェイトなら。」



「キルアにそう言われると嬉しいな。」

「何で俺にそう言われると嬉しいんだ？」

「・・・キルアの鈍感!!」

「何で急に怒ったんだ？フェイトは。」

「鈍いねえ・・・キルアは。」

「感は鋭い方だと思うが・・・？」

「戦いとかのはね・・・。」

「・・・？」

「こういうのは自分で気づくしかないよ。」

「努力しよう・・・いたい何の感が鈍いんだ・・・？」

「はぁ・・・。」

。フェイトも大変な恋をしたねえ・・・と思い悩むアルフだった・・・。

## 気を使える様になりたい金髪の魔法少女（後書き）

作者「フェイトが気を学びましたね・・・格闘魔法少女誕生か!？」

フェイト「格闘魔法少女かあ・・・いいかも!」

キルア「だが、今のフェイトでは気を使った実践はまだ厳しいな。」

フェイト「う・・・そうだよな・・・。」

キルア「フェイト、俺は今のフェイトではと言っただけだぞ?」

フェイト「それって・・・成長した私ならできるってこと?」

キルア「そうだ・・・フェイトは才能があるからな。」

フェイト「私・・・早く気を自由自在に使える様に頑張る!」

キルア「魔法の鍛練も怠ってはいけないぞ。」

フェイト「うん分かってるよ、キルア。」

作者「では読者の皆様こんな小説でしがどうか次回も見てくださいます!」

フェイト「次回もよろしくお願いします!」

キルア「次回もできれば読んでくれ・・・。」

謎の存在・・・

とある場所・・・ある御方の使者はそのある御方に報告をしにきていた。

「????様・・・報告したい事があるのですが。」

「報告しなくとも分かりますよ・・・ヒュプノ。」

「御存じでしたか・・・。」

「あの格闘家の事でしょう・・・。」

「はは、その通りでございます。」

「あの格闘家と金髪の魔法少女の出逢い・・・それは数奇な運命かもしれません・・・。」

「リリカルなのはのアニメとやらの原作とは違う方向へ向かわせるからですか？」

「それなら転生者もさほど変わらないでしょう・・・そもそもあの世界はリリカルなのはとやらのアニメと似ているだけ・・・必ずしも原作とやらの同じ道を歩むとは限りません・・・。」

「はは、その通りであります。」

「私達が手を加えたのもありますがね・・・。」

「左様ですね。」

ガシヤ、ガシヤ。

「おや・・・閃光の騎士ではないですか・・・閃華はどうしたのです？」

「いえ、閃華はまだ？？？様にお会い出来る様な身分ではないかと・・・。」

「そうですね・・・私は別に気にはしませんが・・・。」

「ありがたい御言葉、感謝致します・・・？？？様。」

「ところで閃光の騎士・・・私に何か用があるのではないですか？」

「私にあのキルアと言う男に接触する許可をくださいませんか。」

「別に構いませんよ・・・。」

「はは、感謝致します・・・？？？様。」

ガシヤ、ガシヤ。

「閃光の騎士は、あの格闘家に接触してどうするつもりでしょうか？」

「気にしないでいいですか・・・閃光の騎士が何を行うにしても・・・それもまた彼等にとって試練なのです・・・。」

「はは、左様ですね。」

「人々が力（光）を求めた先にあるのは破滅の未来か、それとも・  
・」

## 格闘家、温泉旅館へ（前書き）

キルア達が温泉旅館にタイトル通り向かいます！  
あとフェイトがさらにパワーアップ。

## 格闘家、温泉旅館へ

フェイトの気の修行を始めてから数日・・・。

海鳴のとある温泉旅館の近くでジュエルシードの反応が見つかったらしい。

今日その温泉旅館に行く予定だ。

そして現在・・・俺は早朝からフェイトとある事をしていた。

そのある事とは・・・。

「いくよ！キルア！」

「ああ・・・来い！フェイト！」

俺とフェイトは早朝から組手をしていた。

毎日の鍛練・・・それは強くなるために必要だからな・・・。

それにしてもフェイトの成長率には本当に驚いたな・・・。

まさか短期間でここまで成長するとは、確かに才能があるとは思ってたが・・・。

ヒュッ、ガッ。

「・・・キルア、集中してないでしょ？」

「ん？すまないな、フェイト。」

「でも、攻撃全然、当たらないんだよね・・・。」

「反射的に体が動いているからな。」

考え事をしている時にあの人達はよくイタズラで攻撃を仕掛けてくるからな・・・。

そんな経験をしたためか体の無意識のうちの反応が異常に良くなったんだよな・・・。

「フェイトは、だいぶ気が大きくなったからな・・・。」

そろそろ気弾や武空術を学んでもいいかもしれない・・・。

「フェイト、そろそろ組手は終わろうか。」

「えー、もう終わるの？」

「結構長い時間したと思うが・・・それよりもフェイト、最後に気弾と武空術を学んでもらう。」

「気弾？武空術？」

「武空術は俺が飛ぶときに使っているもので、気弾は自分の中の気を外に撃ち出すものだ。」

「なるほど。」



「どちらも気を使った戦いにおいては基礎となる重要なものだ。」

「はい！」

「まずは気弾からいこうか。」

「気弾・・・どう放てばいいんだろう？」

「自分の掌に気を溜めるように意識するんだ。」

「うん分かった、はああ・・・。」

フェイトは自分の中の気を掌に溜めるように意識した。

「いいぞ、掌に気が集まって来た。」

「あつ！光の玉みたいのが・・・。」

「フェイト、そのまま撃ち出すんだ。」

「うん・・・はあ！」

フェイトは掌から気弾を撃ち出した。

そしてそれは・・・キルアに当たった。

ボンッ！

「えっ！？ごめん、キルア！」

「いや別にいい、ダメージは無いからな。」

「それって私の気弾が弱いつて事なのかな・・・。」

自分の気弾は弱いのかと落ち込んでしまうフェイト。

しかしキルアは言った。

「フェイトの気弾は気を学び始めた者にしては中々だぞ、ただ俺がフェイトよりも遥かに強いから効かないんだ。」

「確かにキルア、私よりも遥かに強いよね効かなくて当然か・・・。」

「だがそのうち効くようになるかもしれない・・・強さと言うものは常に変わっていく、フェイトが俺より強くなる可能性だってある・・・そう、しゅ・・・」

「修行を頑張ればでしょ？」

「ふ・・・その通りだフェイト。」

「えへへ・・・私頑張るよ、いつかはキルアの隣に立てるぐらいに。」

「いつかは隣にか・・・頑張れ、フェイト。」

キルアは軽く笑みを作りフェイトにそう言った。

「あっ・・・（キルアのあの顔、反則だよ！あんなに格好いいなんて！）」

「どうした？フェイト。」

「なっ、何でもないよ！」

「そうか・・・ならいいが。」

「さあキルア、次は武空術の修行でしょ！」

「そうだな・・・武空術は自分の全身の気をコントロールする事で、できる術だ。」

「全身の気をコントロール・・・。」

「フェイトなら、すぐに少し浮く位は出来る様になるはずだ。」

「よし！頑張るぞ！」

このあと少し時間が経ち・・・。

「キルア！飛べる様になったよ、魔法で飛ぶのとは少し違う感じがする。」

「そうか・・・それにしても凄いな、フェイトはここまで自由に僅かな時間で飛べる様になるとは・・・。」

キルアはフェイトの事をまさしく天才だなと心の中で思っていた・・・。

彼もその天才の中でも最上級に値するのだが・・・。

「さて、これで今日の修行は終わりだ・・・温泉旅館に向かう準備をしようかフェイト。」

「うん、そうだねキルア・・・でも本当によかったのかな、温泉旅館の近くにあるジュエルシードの探索をキルアだけに任せて・・・。」

「別に気にする事はないフェイト、俺にはジュエルシードの封印が出来ないから・・・探索に駆り出すのは当然だ。」

「早く見つけて戻って来てね、封印は夜に行うつもりだから・・・。」

「分かっている・・・早く見つけて戻れば温泉旅館を満喫出来るしな・・・。」

「私、キルアと一緒に長く居たいし・・・。」

「何か言ったか・・・？」

「何でもないよ！それより温泉旅館に行く準備しよう。」

「そうだな。」

俺とフェイトとアルフの三人は温泉旅館に向かった・・・。

「さて・・・ジュエルシードを探すか・・・。」

「気をつけてね。」

「まっ、アンタなら何があっても大丈夫だろうね。」

「ふ．．そこまで信頼されると嬉しいものだ．．では行ってくる。」

俺は温泉旅館の近くにあるジュエルシードの力を感じて場所を探った．．。

ジュエルシードの力を探るのにも慣れたので存外簡単に見つかった。

「さて．．場所は覚えたし、戻るか。」

俺がジュエルシードを見つけて旅館に戻ると前に会った事がある高町なのはと言う少女にアルフが絡んでいた。

なのはの側にいる少女らは、なのはの友人だろう．．。

「何をしている？アルフ。」

「あつ、キルア早かったねえ．．いやちよつとね、こいつはこの前聞いた高町なのはって言うジュエルシードを集めてるもう一人の魔法少女なんだろ．．だから。」

「ジュエルシード集めから手を引け．．そう言っていたんだろう？」

「その通りさ。」

「だが今、言う事でもないだろう・・・ここは旅館だ今はそういつい  
ざわざは無しにしよう。」

「うつ、分かったよ。」

「うちの連れが迷惑をかけて済まなかったな。」

「あつ、はいキルアさん。」

「今は普通にゆっくりしているといい・・・。」

「あの・・・キルアさん。」

「何だ？」

「フェイトちゃんもここに来ているんですか？」

「ああ・・・来ているぞ。」

「そうですか・・・。」

「だが今はジュエルシードを賭けて戦うとかは無しだここは暴れる  
所では無い、安らく所だろう？」

「はい・・・そうですね。」

「では部屋に戻るぞアルフ。」

「分かったよ、キルア。」

キルアとアルフは自分達の部屋に向かって行った。

「ねえ、なのはあの人と何話してたの？」

「はぁ・・・キルアさん。」

「なのはちゃん？」

「おーい、なのは。」

「やっぱり、格好いいなあ・・・。」

「・・・駄目だこりゃ。」

キルア達の部屋・・・

「フェイト、ジュエルシードのある場所は見つけたぞ。」

「本当！ありがとうキルア。」

「あとさっき高町なのはに会った。」

「・・・言う事は。」

「まあ夜に間違いなく対辞するだろうな。」

「うん・・・だね。」

「さて・・・俺は少し温泉に浸かって来るか。」

「あつ、私も行く。」

「アタシも行くよ。」

三人は温泉に浸かりに行った。

「ふう・・・いい湯だ。」

しかしこう温泉に浸かるとあの人達の事を思い出すな・・・。

悪ふざけで湯に浸かってる時に足に凍結魔法を仕掛けてきたり、電撃を流してきたりか・・・。

湯の中で急に勝負を始めたりもしていたな・・・。

女湯・・・

「アルフ、やめようよ。」

「何でだいフェイト。」

「やっぱり覗くのは良くないよ。」



「でも見たいじゃないかキルアの裸、フェイトだって見たいんだろ  
う。」

「確かにあの筋肉の引き締まった体は気になるけど・・・。」

「だろう?。」

「でもぉ・・・。」

「ちょっと見るだけ、ちょっと見るだけ。」

アルフは覗こうとするが・・

「アルフ、覗こうとしているのは分かっているぞ。」

「えっ!?。」

「フェイトに悪影響を与える行動をするな。」

「あつ、悪影響だなんて・・・。」

「覗きは悪影響じゃないのか?。」

「あつ、悪影響ですゴメンナサイ。」

「分かれば良い。」

「ほら、アルフ怒られたでしょう。」

「キルアのケチ。」

「いや、それおかしいよアルフ。」

なんかかんやで三人はのんびり湯に浸かった……。

そして夜……ジュエルシードのある場所へ。

「あそこだ、フェイト。」

「うん、じゃあ封印を始めるよ……お願いバルディッシュ。」

『yes, sir』

フェイトはジュエルシードの封印を始めた……そして封印は無事に成功した。

封印が終了した直後、なのはとユーノがやって来た。

「くっ、一足遅かったか。」

「また会ったねフェイトちゃん……。」

「うん、そうだね。」

「やっぱり戦わなくちゃいけないのかな？」

「ジュエルシードを集めてる限りはね。」

「話し合いでどうかならないかな？」

「じゃあ、ジュエルシールドを全部渡して。」

「それはできないよ。」

「じゃあ戦うしかないね・・・ジュエルシールドを賭けて、お互いに一つずつ。」

「やるしかないんだね。」

「バルディツシュ・・・今回は私だけで戦ってみたいの・・・悪いけど今回は一緒に戦えない、ごめんね。」

フェイトはバルディツシュに謝る・・・しかしバルディツシュは別に気にしなくてもいいですよと言う。

「ありがとう・・・バルディツシュ。」

「デバイス無しで戦う！？何を考えているんだ彼女は！？」

「今のフェイトは、デバイス無しでも相当強いんだよ、フェレット。」

「そんなわけ・・・でもこれでなのは勝ちは決まりだ！」

フェイトがデバイス無しと言う事でなのはの勝利を確信するユーノ・・・しかしその考えは直ぐにひっくり返される。

「フェイト、前にも言ったが気と魔力は相当の鍛練がなければ同時に使えば反発する・・・だから気を使う戦闘をする時は魔力を押さえ

るんだ。」

「うん、分かってる。」

「じゃあいくよフェイトちゃん。」

「私は負けない!」

フェイトとなのはの二人はお互いに戦闘体勢に入った。

「この勝負すぐに終わるね、なのはの勝ちで。」

何故か自信満々にそう発言するユーノ・・・しかしにその言葉にキルアは・・・

「おい・・・貴様、フェイトを嘗めすぎだ。」

「いや、でもデバイス無しで勝てるわけ・・・」

ドガッ!

「がつ。」

「隙が多いよ貴方。」

なのははフェイトの拳を受けて怯んでいた。

「なつ、何だ!?あの子魔法無しで飛んでる!?それに何でただの拳がバリアジャケットを貫通するほどの威力があるんだ!?!」

「フェイトの拳はただの拳じゃない気がこもっているのさ。」

「気!？」

何だそれとは驚くユーノ。

しかしそんな驚いているユーノはほっといて、キルアはフェイトとなのはの戦いをじっと見ていた。

「油断したようだな・・なのは。フェイトがデバイスを使わないと言う事で心に隙ができたか。」

冷静に分析を行うキルア。

このままいけばフェイトが勝つな・・そうキルアは考えているが、なのはが何か逆転の秘策を思いついたりしてフェイトが劣勢に陥る可能性もあるかもしれない・・そうも考えていた。

ユーノとは違いキルアは楽観的にはならなかった。

「くっ、デバインシューター!」

なのはは桜色の魔力弾を放った、しかし・・。

「これぐらいなら、気を集中すれば弾ける!」

フェイトは手に気を集中し魔力弾を全て弾いた。

「なっ!？なのはの魔力弾を素手で弾くなんてそんなバカな!？」

「くっ、ならこれならどう!」

なのははレイジングハートに魔力を溜めている、大技で来るようだ。

「砲撃魔法がくる!?!?!なら今考えた技だけどこれで...。」

フェイトは両手を後ろにやり頭上後方に巨大な光の玉を作りだした。

「む...あれは。」

「何だ!?!あの光の玉は!?!」

「フェイト...気弾の撃ち方を教えたばかりだと言うのに...あれほどの技を生み出すとは...凄いぞフェイト。」

「いくよフェイトちゃん...ディバインバスター!?!」

ドゥッ!

なのはは桜色の直射砲撃魔法、ディバインバスターを放った!

そしてフェイトも...

「食らえー!?!」

ポヒュウ!

フェイトは頭上後方に作った巨大な光の玉を両手を前に突きだし放った!

そしてその光の玉はデイベインバスターを撃ち破りなのはに直撃した。

ドーン！

「きゃあ！？」

「なのは！」

「勝負・・・ありだな。」

フェイトとなのはの戦いはフェイトの勝利によって幕を閉じた。

「さあ、ジュエルシードを出して。」

「私は・・・まだ・・・。」

なのはが何か言おうとした時、レイジングハートからジュエルシードが出てきた。

「れっ、レイジングハート！？」

「主人思いの優しい子だね。」

フェイトはレイジングハートから出てきたジュエルシードを手に入れた。

キルアは戦いが完全に終了したのを感じるとなのはに近づいた。

「お前！なのはに何をするつもりだ！」

「これを飲め・・・。」

キルアは丸薬の様な物を取り出すとなのはに渡した。

「は、はい。」

ゴクン。

「あ、あれ？」

なのはがキルアから渡された薬を飲むとなのはの傷が全て癒えた。

「彼は何をしたんだ！？」

「回復薬を飲ませただけだ。」

「こんなに一瞬で傷が治る薬があるのか！？」

「なのは、出来れば他のジュエルシードも渡して欲しいんだが・・・。」

「それは出来ません・・・ジュエルシードはユーノ君のだから。」

「そうか・・・だがジュエルシードを集めている限りはまた激突する事になるぞ。」

「キルアさんは何でジュエルシードを集めているんですか？」



「フェイトと約束したからだ。」

「そうですか・・・一つ聞いていいですか？」

「何だ？」

「フェイトちゃんの目・・・最初に会った時と変わっている気がするんですけど・・・。」

「確かに変わったな・・・まあ、フェイトだけでは無いが・・・。」  
「変わったのはプレシアもだな・・・。」

「キルアさんには助けられた事があるけどジュエルシード集めは譲れません。」

「それはこちらもだ・・・。」

「キルア！何でそいつの傷を治しちゃたのさ！」

「いいんだよアルフ、私もあの子が傷ついたままなのは嫌だし・・・。」

「フェイト、アルフ・・・旅館に戻って寝るか。」

「こんな戦いのあとに僕らと同じ旅館にいるのか！？」

「一つ言っておくフェレット・・・俺の知っているある人の言葉にこんな言葉がある。」

「何？」

「それはそれ、これはこれだから関係ねーよ・・・だ。」

「わ、訳がわからないよ。」

「なのはも戻ってゆっくり休むといい。」

「あつ、はい。」

「それにしてもフェイト、戦いの中で生み出したあの技は中々凄かったぞ。」

「そつ、そうかな。」

「で・・・技名は何なんだい？フェイト。」

「技名か・・・考えてないや。」

「そのうち付ければいいだろう・・・。」

「そうだよね。」

「それにしても・・・。」

フェイトの成長は楽しみだ・・・そうキルアは考えながらフェイトとアルフとともに温泉旅館に戻るのだった。

## 格闘家、温泉旅館へ（後書き）

作者「いやーフェイト強くなったな・・・もうこれは時空管理局のあいつより強いんじゃないかな。」

フェイト「時空管理局のあいつ？」

作者「こつちの話だから気にしないで。」

キルア「それにしても気を使った初めての实战であそこまで戦えるとは・・・本当に凄いなフェイト。」

フェイト「キルアの指導が良かったからだよ。」

アルフ「それにしてもあのフェレットは物事を甘く見すぎじゃないかい？」

作者「確かにそうかもしれないね。」

フェイト「魔力と気を同時に使えたらどんな感じ何だろう・・・？」

作者「（感想であつた・・・ネギまのタカミチのあの技・・・いいかもしれない。）」

アルフ「んじゃそろそろ。」

フェイト「読者の皆様これからもこの小説をお願いします！」

アルフ「次も見えてくれよ！」

キルア「次回もよろしく頼む・・。」

格闘家、遊園地に行く（前書き）

今回は再びほのぼの系！

## 格闘家、遊園地に行く

「フェイト、遊園地に行こうか。」

「えっ！？そ、それってデートの・・・」

「アルフとプレシアも連れてな。」

「あつ、何だそう言う事が・・・。」

家族で行こうって事かと少しガッカリするフェイト。

「何だ遊園地は嫌か？フェイト。それではこのもらった遊園地のチケットも無駄になってしまう・・・。」

「全然嫌じゃないよキルア！・・・あれ？そう言えばキルア何で遊園地のチケットを持っているの？」

「これはだな一人で外に修行に行った帰りに人を助けたら礼に貰えたんだ。」

「そうなんだ。」

「礼などいらなかったんだが押し付けられてしまっただけ・・・。」

「でも母さんと一緒に遊園地か・・・楽しみだな。」

キルアと二人きりも良かったけどね・・・。

「プレシアを呼んでくる。」

ビッ・・ビッ

「連れて来た。」

「フェイト、ジュエルシード集めで怪我はしてない？ちゃんと寝れてる？」

「だ、大丈夫だよ母さん。」

「本当、凄い変わりようだねえプレシアは。」

前までは考えられないよあのプレシアの姿はと思うアルフ。

「さて・・・遊園地に行く準備をしよう。」

キルアは遊園地で食べる昼のために弁当を作り始めた。

「おや？どんな弁当にするんだい？」

アルフはどんな弁当になるんだろうとキルアが弁当作るのを見に来た。

「アルフ、見たら楽しみが減るぞ。」

「それもそうだね。」

キルアに楽しみが減ると言われアルフは弁当作りを見るのをやめた。

「キルア、私もお弁当作るのが手伝うわ。」

「そうか、プレシアよろしく頼む。」

遊園地に持っていくお弁当はどうやらキルアとプレシアの合作になるようだ。

「キルアとプレシア、仲良く料理してるねえ・・・あれが夫婦の姿って奴かね。」

「えっ！？キルアと母さんは年が離れているから夫婦はないと思うよ！？」

「でも年の離れた夫婦もいるし・・・。」

「でもキルアと母さんが夫婦とか絶対ダメ！」

「力を込めて言うねえ・・・そんなにキルアが好きかい？」

「えっ！？あっ・・・。」

顔を真っ赤にするフェイト。

「隠さなくても分かるよ同じ男を好きになったんだから。」

「えっ！？同じ男って・・・。」

「アタシもキルアの事が好きになったのさ、強いし頼りがいがあるしね。」



「うん・・・あと、とっても優しい。」

「そうだね。」

「恋のライバルだねアルフ。」

「これは譲れないよフェイト・・・てかライバルはプレシアもだね。」

「えっ!？」

「プレシアも明らかにキルアに好意を抱いているからね。」

「かつ、母さんもキルアが好きだなんて・・・。」

「準備出来たぞ、フェイトにアルフ、遊園地に向かうぞ。」

「フェイト、お弁当頑張ったから楽しみにしてね。」

「う、うん・・・母さん。」

「どうしたのフェイト?」

「なっ、何でもないよ!」

「それなら良いけど・・・。」

「それよりも早く行こう!」

キルア達は遊園地向かった。

遊園地・・・

「うわあ・・・色んな物がいっぱいだ。」

目を輝かせながらフェイトは遊園地のアトラクションを見ていた。

「うふふ、見てるだけで楽しそうね。」

「そうだな。」

それにしてもこういう場所に来ると異常なまでに頑丈な人と小さい動物を思い出すな・・・。

「ねえあれ乗ろう!」

「メリーゴーランドか。」

「良いわね乗りましょう。」

キルア達はメリーゴーランドに乗った。

「ふむ・・・始めて乗るがこんな感じか。」

「何かある意味新鮮な気分ね。」

「馬さんが上下に動く。」

「んゝアタシには合わないね。」

キルア達はメリーゴーランドを乗り終えた。

「楽しかったね。」

「次は何をするのフェイト？」

「んー・・・じゃあ、あれに乗る！」

フェイトが指差したのはコーヒークップだった。

「一杯に二人までの様だな。」

「じゃあ私キルアと乗る！」

「ずるいよフェイト！アタシだってキルアと一緒に乗りたいよ！」

「何故、二人は俺とそんなに乗りたいんだ・・・？」

「こういう時はジャンケンで決めればいいんじゃないの？」

プレシアがそう提案する。

「そうだね、母さん。じゃあ行くよアルフ。」

「分かったよフェイト。」

「待って私も一緒にいいかしら。」

「母さんもキルアと一緒に乗りたいの？」

「いや、私はちょっとジャンケンがしてみたくなかっただけ・・・。」

しかしプレシアも心の中ではキルアと一緒に乗りたいと思っている。

「・・・いいよ母さんも一緒にやろう。」

「行くよジャンケン・・・。」

「」「ポンッ。」「」

フェイト　グー

プレシア　グー

アルフ　パー

「やったー！アタシの勝ちだー！」

「まっ、負けた・・・。」

「残念ね・・・。」

「アルフ、何故そこまで喜ぶんだ？」

「全くキルアは鈍感だねえ・・・。」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ、さあ乗ろう。」

コーヒーカップに乗るキルア達。

「母さんもつと回すよ。」

「ふふ、まだまだこれぐらい平気ね。」

「おらおらどんどん回すよー！キルア！」

凄い早さでコーヒーカップを回すアルフ、しかしキルアは凄く平気そうな顔をしている。

「風が気持ち良いな・・・。」

「これだけ回したのに平気な顔してる！？・・・と言うより何かアタシが気持ち悪くなって来た・・・うぶっ。」

「どうしたアルフ？気分が悪くなったか？」

「うん・・・ちょっと・・・。」

アルフはコーヒーカップから降りたあとキルアに背中を擦ってもらった。

「気分は良くなったか？」

「うん・・・何とか。」

「調子に乗って回しすぎるからだよアルフ。」

「反省してるよ・・・。」

「次のアトラクションに行ったらそのあと昼御飯にしよう。」

「そうだねキルア。」

「次は何処に行くの？フェイト。」

「お化け屋敷！」

「お化け屋敷・・・分かったわ行きましょう。」

お化け屋敷に向かうキルア達・・・しかしそこである人物と鉢合わせする。

「あっ!？」

「どうした、なのは知り合いか？」

「あっ、貴女は高町なのは!？」

「なのはでいいよフェイトちゃん。」

「あっ、うん・・・なのは貴女もここに来ていたんだ・・・。」

「うん、お兄ちゃんと一緒に・・・その初めて見る女の人はフェイトちゃんのお母さん？」

「うん・・・そうだよ。」

「優しそうだね。」

「私の母さんだもん。」

「ねえ、キルアあの子が例の？」

「ああ、そうだ。」

「本当にフェイトと変わらない年ぐらいの子ね。」

「だがジュエルシードを集めると言う意思是強い。」

「そうなの・・・私はフェイトにジュエルシードを集めさせるためにあの子を傷付けさせてるのね・・・。」

「プレシア・・・。」

「今更こんな風に善人ぶってもね・・・私はフェイトに貴方と出会う前は酷い事をした悪女なのに・・・。」

「自分に罪悪感を感じる人間と感じない人間は違う。」

「え？どう言う事？」

「自分に罪悪感を感じるなら自分の中の罪に向かい合っている・・・しかし感じないなら目を背けている・・・お前は向かい合っている人間だろうか？プレシア。」

「そう言われると少し胸が楽になるわ・・・私はちゃんと向かい合っているのね・・・。」

「ああ・・・それにジュエルシードはなのは達には手に余るかもしれない・・・。」

「えっ？それはどう言う・・・。」

「あのキルアさん、一緒にお化け屋敷に入りませんか？」

「別に俺は構わないが・・・フェイトは？」

「私も別に構わないよ。」

「そうか。」

「待て、俺が構うぞ胴着を着た男と一緒に、なのはをお化け屋敷に入らせるか！」

「お兄ちゃん、何で胴着を着てたら駄目なの！」

「いや、胴着を着てなくても駄目だが胴着を私服にしている変な奴を妹と一緒ににお化け屋敷に入らせる兄はいない！！」

「お兄ちゃん！ごめんなさいキルアさん。お兄ちゃんが失礼な事を言っただけ。」

「いや、別に気にしてない。」

「キルアさんは心が広いですね。」

頬を赤く染めながらキルアにそう言うのは・・・それになのは兄が反応した。



「はっ！まさか・・・妹をたぶらかしたなクソ野郎！！」

キルアに襲いかかるなのは兄・・・しかし。

チョン。

「がはっ！？」

キルアが軽く拳を当てると気絶した。

「ちゃんと軽くやったんだが・・・気絶したな・・・済まないな、なのは。」

「いや、いいんです・・・お兄ちゃんには少しこのままでいてもらいます。」

「放って置いていいのか？」

「はい、いいんです。」

笑顔ながら怒気を込めた声でなのはは言った。

「じゃあお化け屋敷に入るか。」

キルア達は気絶したなのはの兄を放って置いてお化け屋敷に入った・・・。

「む・・・意外にリアルだな。」

「お、思ったより怖い……。」

「か、母さん……。」

「つ、作りものよ……。こんなの……。だ、だから大丈夫よフェイト。」

「プレシア、アンタ声が震えてないかい？」

「き、気のせいよ。」

う　あ　あ　あ　・　・　・

「ひっ！？何！？」

「変な声、聞こえた……。」

「あ、アルフあっちから声がしたから見に来て……。」

「何でだい！？プレシアが行けばいいだろ！？」

「俺が見て来よう。」

「気をつけてキルア……。」

「死なないでくださいキルアさん。」

「呪われないようにねキルア。」

「アンタらこれアトラクションだよ。」

「ん？」

キルアが声のした方に行くと・・・

「ヴァアア・・・オマエノタマシイヨコセ。」

スッゴいリアルなゾンビの作りものが出てきた。

「「「きゃあああああああ！！！！？」」「」」

「うわ、気持ち悪っ。」

フェイト、なのは、プレシアが叫んでアルフはゾンビの見た目を気持ち悪がった。

「ふ・・・これぐらい何とも無いな・・・それよりもフェイト、プレシア、なのはそろそろ離れてくれないか？」

フェイト、プレシア、なのはは怖がってキルアに抱きついてた。

「あつ、ごめん。」

「すみません。キルアさん。」

「こ、怖かった。」

「怖がったふりして抱きつく、その手があったとは！」

「何を言っているんだ？アルフ。」

「こつちの話だから気にしないでいいよ。」

「そうか・・・とりあえず先に進もう、じゃないとお化け屋敷から出られないぞ？」

「ここまで怖いなんて・・・早く出たい・・・。」

「あつ・・・怖がった時に思いつきりユーノ君握っちゃった・・・。」

「（ひつ、酷いよなのは・・・）」

「このお化け屋敷何でこんなにクオリティ高いのよ・・・。」

「こんなもの本物に比べたら全然大したことはないさ。」

「キルア、アンタ本物にあつた事あるのかい・・・。」

「まあな。」

「ほつ、本物つてどれくらい怖いんだろ・・・。」

「かつ、考えない方がいいわ・・・フエイト。」

キルア達は怯えながらもお化け屋敷を進む（キルアとアルフは怯えていない。）。

「そ、そろそろ終わりかしら．．．。」

「出口は近いようだ。」

「このお化け屋敷本当に怖かったよ．．．。」

「ここに来るまでにユーノ君何回も握り閉めちゃったし．．．。」

「（何か．．．うつすらと川が見えてきた．．．）」

「早くお昼食べたい。」

出口を前に気を抜く者達．．．しかし大抵お化け屋敷と言うものは安心しきった時に一番怖いものがくる。

ガシッ

「あれ？足を何かが掴んでる．．．。」

フェイトが恐る恐る足下を見ると．．．。

「ヴ．．アアアア．．．地底ノ世界ニオイデ。」

「ウスグラクテキモチイヨ。」

地面からゾンビが大量にでてきた。

「「「きゃあああああああああ！！！！！？」」」

走って逃げるキルアとアルフを除いた三人。

「・・・そんなに怖いか？これ？」

「アタシは平気だね。」

「俺達も出るか・・・。」

「そうだね。」

キルアとアルフも三人に続いて出ていった。

「はあ・・・はあ・・・怖かった。」

「心臓に悪いわ・・・。」

「ユーノ君、握り締めたまま走っちゃった・・・。」

「（・・・それに乗ればいいんだね・・・。）」

「さて・・・そろそろ昼にしようか。」

「どんなお弁当かね。」

「お弁当どんなの作ったの母さん？」

「見てからのお楽しみよ。」

「お弁当かあ……。」

「多めに作ったから、なのはも一緒に食べるか？」

「良いんですか!？」

「フエイト、構わないか？食事は大勢で食べる方が美味しいと思うが？」

「うん、別に良いよ。」

「ありがとう！フエイトちゃん！」

「さて……。では、場所を移動しよう。」

キルア達はお弁当を食べれる場所に移動した。

「うわあ、凄く美味しそう！」

「どれが母さんが作ったのでどれがキルアが作ったのだろうか？」

「食べて、当ててみて。」

「うん！いただきます！」  
パクツ・・・モグモグ。

「これは・・・母さんが作ったの？」

「いや、それは俺が作ったのだ。」

「酷いわフェイト、私が作ったの分からなかったの・・・。」

「えっ！？ご・・・。」

「冗談よ、フェイト。」

「えっ！？もう母さんったら！」

「ふふふ、ごめんねフェイト。」

「何かいいですね・・・こういつの。」

「そうだな・・・。」

バクバクモグモグ

「うん、本当に美味しいねこれ。」

「俺達も食べようか・・・。」

「そうですねキルアさん・・・あのちょっといいですか？」

「ん？何だ？」

「あーん。」

なのはは箸におかずを掴んでキルアに向けていた。

「何だ・・・？」



「あの口を開けてください……。」

「口を？」

「はい、口……。」

「ちょっと、何やってるの！キルアにあーんだなんて私がやりたいよ！」

「フェイト、口から凄い事が出てるよ。」

「あーんって何だ……。？」

フェイトとなのははで、ひと悶着あったが基本食事は楽しく終わった。

「お昼ありがとうございます。」

「いえ、別に良いのよ。」

「ではそろそろ私はお兄ちゃんの所に戻ります。」

「そうか……。所でそのフェレットさつきからぐったりしてるんだが……。」

「あつ、本当だ？ユーノ君疲れて寝ちゃったのかな？」

「……………」

「フェイトちゃん。」

「何？」

「次のジュエルシード渡さないよ。」

「私だつて譲れない。」

「じゃあね、フェイトちゃん。」

「・・・うん、なのは。」

「フェイト、次は何処へ行く？」

「次はね・・・」

このあとキルア達は色々なアトラクションに行った・・・そして最後に・・・。

「観覧車からみる風景って空を飛んでみる風景とは違うね母さん。」

「そうね・・・フェイト。」

「母・・・さん。」

「どうしたのフェイト？。」

「眠く・・・なっちゃった・・・。」

そう言ってプレシアの膝に頭を置くフェイト。

「遊び疲れたのね．．．。」

「ああ．．．アルフもだな．．．。」

アルフはキルアの膝の上に寝ていた。

「二人も寝た事だし今貴方にある事を話すわ．．．。」「何だ．．．？」

「フェイトは、クローンなの．．．私の娘アリシアの．．．。」

「そうか．．．。」

「私は最初はこの子をアリシアの変わりとして産み出した．．．でもこの子はアリシアの変わりにはならなかった．．．。」

「それは当然だ．．．この世に全く同じ人間など産まれはしない．．．。」

「そう．．．その通りよ．．．なのに私はあの子を失敗作などと思っってしまった．．．あの子は失敗作などではなくフェイトと言うもう一人の娘だったのに．．．。」

「今はちゃんとフェイトを愛せているだろう．．．。」「貴方のお陰よ全部。」

「大した事はしていない．．．。」

「それと私がジュエルシードを集める理由．．．それはアリシアを生き返らせるためよ．．．。」

「生き返らせるか．．．。」

「貴方は生命の理に反しているって言う？」

「いや．．．大切な者を生き返らせたいと思うのは普通だろう．．．。」

」

「そう・・・普通なのね・・・。」

「ただその為に他の誰かを犠牲にするのはいかながな。」

「そうね・・・私は貴方と会うまではフェイトを犠牲にしてたわね・  
・道具として扱っていたんだもの・・・。」

「今は違うだろう？」

「ええ・・・そうね・・・。」

「所で一つ良いか？」

「何？」

「ジュエルシードを全部集めて使ったら・・・全部壊して良いか？」

「ロストロギアを壊すって・・・貴方にならできそうねキラア・・・  
ええ良いわ。」「了承確かにもらったぞ・・・そろそろ下に着くな・  
・プレシアはフェイトを抱えてくれ・・・俺はアルフを抱える。」  
「ええ・・・分かったわ。」

こうしてキラア達の一日は終わりを告げた・・・。

## 格闘家、遊園地に行く（後書き）

作者「今回の後書きはキルアさんとプレシアさんに出てもらいます。」

プレシア「キルアと二人きりだなんて・・・緊張するわ・・・。」

キルア「そんなに緊張する事は無いと思うが・・・。」

プレシア「今日の話、何か間を全然開けてない所があっただけであれは・・・?」

作者「あー・・・あれは、お二人の会話にスピーディー感を持たせようとしたんでわざとです。」

キルア「読みにくい気もするが・・・?」

作者「んー・・・そうですねでもあれで良かったかったです。」

プレシア「それにしてもロストロギアを壊すだなんて・・・キルアは考える事が違うのね・・・。」

キルア「俺の知っているあの人達の中の殆どはこんなもんぶっ壊すって言うと思うが・・・。」

プレシア「貴方の世界が変わってるのね・・・。」

キルア「否定は出来んな・・・。」

作者「ではそろそろお二人さんお願いします。」

プレシア「読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願い致します。」

キラア「次回もどうか読んでくれ。」

## 金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（前書き）

作者「更新が遅くなって申し訳ありません。早く更新できるように頑張りたいと思います。」

## 金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる

「キルア！私、新しい技が欲しい！」

フェイトはキルアに突然そんな事を言い出した。

「新しい技？フェイトには、あの時なのはを倒した技があるからまだいらないんじゃないか？」

「気を使った技がフォトンバスターだけなのは、なんか寂しいよ！」

あの時の技の名前はフォトンバスターに決まっていたようだ。

「しかし、まずは一つの技の質を高めるのが重要なんだが・・・」

「でも一つだけじゃバリエーションが少なすぎるよ！」

「ふむ・・・一理あるな。」

「だから技を教えて！」

「分かった・・・しかし気を使った技だけではなく魔法も教えよう。」

「キルア、魔法使えないのに魔法教えられるの？」

確かにキルアは魔法が使えない、そのキルアが魔法を教える事が出来るのだろうかフェイトが疑問を持つのは当然である。

「確かに俺は魔法を使えない・・・だが教える事は出来る。」

「え？何で？」

キルアの教える事が出来ると言うのはつきりとした発言にフェイトは



頭に？マークを浮かべる。

「魔導書を持っているからな・・・使えなくとも理論などは理解している。」

「キルア、魔導書持ってたの！？」

驚くフェイト、当然だろうキルアは格闘家だ。

魔導書は普通に考えて必要ない。

「旅に出る時の餞別に貰ったんだ。」

「何で魔導書をあげたんだろう？」

フェイトがそう考えるのも仕方ない、だってキルアは格闘家だもの。

「戦いにおいてあらゆる技術を知るのは大事・・・この本を読めばその知識が役に立つ事もあるだろうと言う事でな。」

「なるほど魔法への対処法を知ると言う事においては格闘家にも魔導書は役に立つと言う事何だね。」

「ああ、そう言う事だ・・・だが。」

キルアは若干表情を崩し苦笑いをした。

「この本に書いてある魔法・・・高等な物が多くてな、中々この本に書いてある魔法に通ずる魔法を使う相手には巡り会わなかった。」

「え・・・？それって・・・。」

「この本の知識は余り役立ってないな・・・魔法は経験で殆ど対処法を覚えてしまったな・・・。」

「そつ、そうなんだ・・・。」

フェイトはこの魔導書を書いた人は高レベルの魔導士何だろうけど、自分基準で魔法のレベルを考えていたのかな？と思った。

「ちなみに・・・これは初級偏だ。」

「ええっ!？」

初級偏でキルアに高等とか言わせる事が出来るの!？と驚くフェイト。

「この魔導書の中からフェイトに合う魔法を覚えてもらっ。」

「覚えられるかなあ・・・。」

フェイトは魔法を覚えられるか不安になった・・・それはそうだろう、初級偏なのに高等とか言われれば。

「フェイトなら修得出来るさ。」

「そ、そうかな。」

キルアに自分なら修得出来ると言われ嬉しくなるフェイト。

「さて・・・誰にも迷惑のかけない場所に移動して修行を始めよう。」

「うん、頑張るよ!」

キルア達は誰にも迷惑のかからない場所に移動した。

「アルフ、置いてきて良かったのかな・・・。」

「修行に巻き込んだら不味いだろう・・・。」

キルアはアルフが修行の余波に巻き込まれたら不味いとフェイトに言う。

「確かにそうかも……。」

「アルフはとびつきり美味しい飯を作つてやると言つたら機嫌を直したから気にするな。」

アルフは結構単純な事で機嫌を直していた。

「さあ、魔法を教えよう。」

「どんな魔法かな？」

フェイトはどんな魔法か期待を膨らませる。

「フェイトは雷系の魔法が得意だから当然、雷系の魔法だ。」

「どんな雷系の魔法なの？」

フェイトはキルアに聞いてみる。

「天空より現れし雷の龍が敵を喰らう魔法だ。」

「それ本当に初級魔法！？」

確かに初級に思えない響きがある。

「……そうだな確かに初級魔法には思えないな。」

「これ書いた人どんな感覚何だろう……。」

フェイトは改めてこの魔導書を書いた人は凄いけど感覚ずれてるなと思った。

「悪い人では無いらしいんだがな・・・。」

「でも、ずれている人だね・・・。」

「ああ・・・そうだな。」

「それで、その魔法どんな風に使うの？」

「詠唱を唱え指に魔力を集め魔方陣を描く事で発動するんだ。」  
「な、何かやつぱり難しそうだね・・・。」

フェイトは本当に出来るか不安になる・・・。

「とりあえず一回やってみよう・・・ただ。」

「ただ？」

「一回で魔力が空になるかもしれん・・・。」

「そ、そうなの？」

フェイトは一回で魔力が空になると言うキルアの言葉に少し動揺した。

「この魔導書の中では魔力消費は一応少ない部類何だが・・・。」

「書いた人の基準が高かったんだよね・・・。」

これ書いた人、本当にどんな凄い魔導士何だろうと思うフェイト。

「まあ・・・とりあえず俺に向かって放つてみてくれ。」

「い、いいの？」

「ああ構わない、詠唱と魔方陣の描く動きをするから真似てみてくれ。」

「うん、分かったよ。」

キルアは詠唱と魔方陣を描く動きをする。

「天空に集まれ雷よ・・・」

「天空に集まれ雷よ・・・」

「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」

「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」

「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」

「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」

「ドラゴボルディアス！」

「ドラゴボルディアス！」

カッ！ドツッガッーン！！ゴロゴロ！バチッ！バチッ！ピシャアア  
アッ！！バリッ！バリッ！グオオオオオ！！

天空より現れし雷の龍がキルアに直撃した。

「きつ、キルア！？大丈夫！？」

フェイトは魔法が直撃したキルアを心配する。

「大丈夫だ、フェイト。」

キルアはピンピンしていた。

「よっ、良かった・・・。」

「それよりもフェイト、魔力はまだ残ってるか？」

「キルアの言った通り空になっちゃたみたい・・・。」

フェイトは疲れた顔でそう言う。

「そうか・・・少し休むか？」

「休まなくても大丈夫！次は気を使った技を覚えてくれるんでしょ。」

フェイトはやる気満々の表情になりキルアにそう言った。

「そうか・・・分かった次は気を使った技だが知り合いのある技を教えよう。」

「キルアの技は教えてくれないの？」

フェイトは少し残念そうにキルアに言った。

「俺の技は人にそう簡単に教えてはいけない技だからな・・・。」

何せ暗殺拳をベースに強化された技だからな・・・とキルアは思う。

「そう何だ・・・キルアの技、覚えなかったな・・・。」

「今から教える技もかなりの技だから落ち込むなフェイト。」

キルアはそうフェイトに言うがフェイトが落ち込んでる理由は技が凄いかどうかではなくキルアの技を覚えられないと言う所である。

「今から教える技はブレイクジャベリンと言う技だ。」

「ブレイクジャベリン……。」

「気を練り上げ、投げ槍を作り相手に投げつける技だ。」

「なるほど……。」

「今から俺が気を練り上げ投げ槍を作るからそれを良く見るんだ。」

「分かったよ。」

「さて……始めるか。」

キルアは気を練り上げ自分の手の上に投げ槍を作る。

「凄い気の練りだ……この技を作った人この形状に合った気の練りをしてたんだ……。」

「分かるかフェイト、さすがだな。」

「これを私がするんだ……頑張らなきゃ！」

意気込むフェイト。

「俺が見て駄目な所があったら指摘するからさっそくやってみるんだ……フェイト、失敗を恐れるな。」

「うん、分かってる。」

フェイトはブレイクジャベリンを修得する為に気を練り上げる。

「はああ……。」

「フェイト早く練り上げようとするのはいいが雑になってはいけない……まずはゆっくりでいいんだ。」

「はい！」

フェイトはキルアに言われゆっくり丁寧に気を練り上げる。

「ふむ……いい感じだ。」

「そ、そう？」

「ああ・・ブレイクジャベリンが出来たら試しに俺に投げしてみるんだ威力を確かめたいからな。」

「うん、分かったよ。」

フェイトは気を練り上げブレイクジャベリンを完成させた。

「や、やっと出来た・・行くよ！キルア！」

「さあ来い！」

「ブレイクジャベリン！」

ビュオ！カッ！

「ふむ・・中々良い威力だぞフェイト。」

「でもキルアには全然効いてないけどね・・。」

「それは、まだまだレベルが違うから仕方ないと思うが？」

「でもいつかはキルアに効くぐらい強くなるもんね！」

「ふ・・そうだなフェイト・・次はもう少し気の練りを早くして今ぐらいのを作って貰おうか。」

「うん、頑張る！」

フェイトのブレイクジャベリン修得の修行はまだ続いた・・そして。

「これなら実戦でも大体いけるな。」

「そ、そうかな・・。」

フェイトはブレイクジャベリンを実戦でいけるぐらいレベルまで修得したが疲労が溜まっているようだった。



「フェイト、そろそろ帰るか？」

「ううん・・・あとちょっとこの技に一工夫を加えたら。」

「工夫？何か思いついたのか？」

「キルア、気もさ性質を変えて雷の力とか加えられるんじゃないかな？」

「まあ・・・確かに性質を変化させる事は出来ない事はないな。」

実際、キルアの技にも気の性質を変化させた技はある。

「じゃあ私やってみるよ！」

「挑戦するのは良い事だな。」

「はああ・・・。」

バチツ、バチツ。

フェイトは気を練り上げる・・・するとフェイトの作る気の投げ槍が雷を纏う。

「いきなりやってのけるのか・・・凄いなフェイト。」

「で、出来た・・・やってみたら本当に出来た！」

フェイトは気の性質を変化させる事が出来て嬉しそうにする。

「あ・・・あれ？」

フェイトは急にふらつとして倒れそうになるが・・・キルアがフェイトを抱き抱えた。

「少し無理をしすぎたようだな・・・。」

「こ、ごめんキルア・・・。」

「謝る事は無い・・・よく頑張ったなフェイト・・・あれはもう別の技と言ってもいいものになっていたぞ・・・。」

「そ、そうかな・・・じゃあ名前はボルテックジャベリンにしようかな。」

「良いんじゃないか？さあ・・・そろそろ帰ろうフェイト。」

「うん・・・でも魔法の方は一応一回成功したけど実戦じゃ不安だな・・・一回しか使えないし。」

「魔力向上の基礎練を頑張れば何回も使えるようになるさ・・・それに、あれはまだフェイトには早かったかもしれないな・・・。」

「そうだね・・・でもすぐに使えるようになるからね！」

「その調子だフェイト・・・さあ帰ろう。」

キルアはフェイトをお姫様抱っこで抱える。

「きつ、キルア！？」

「フェイトは気と魔力を殆ど使い果たして飛べないから抱えて飛ぼうと思ったんだが・・・嫌だったか？」

「い、嫌じゃないよ！」

「そうか・・・ならちゃんと掴まるんだぞ。」

「う、うん・・・。」

フェイトは顔を赤くしながらキルアにしっかりと掴まった。

「（キルアにお姫様抱っこされてる・・・幸せだな・・・。）」

そんな事を考えながらフェイトはキルアと共に帰路についた・・・。

フェイトは今日の一日で大きな成長を果たしたのだった・・・。

## 金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（後書き）

フェイト「私、新しい魔法と気を使った技を修得したよ!」

アルフ「おめでとうフェイト!」

作者「フェイトは順調に強くなってますね。」

キルア「そうだな、これからの成長も楽しみだ。」

アルフ「作者、更新遅くない?と言うより今回アタシ出番なかった!」

作者「更新遅かったのは、色々あつて携帯を使えなかったんです・・・。」

キルア「出番の方はスルーか・・・。」

作者「更新早く出来るように頑張りたい。」

アルフ「出番は!?」

作者「次回はちゃんとありますよ（たぶん・・・）。」

フェイト「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます!」

ざいます!」

キルア「出来れば次回も読んでくれ。」

作者「今後もこの小説をよろしく願います!」

金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきすぎた実力の差（前書き）

日付が変わる前に更新できなかった・・・。

## 金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきすぎた実力の差

キルア達は今、ジュエルシードがある場所に来ていた。

「街中にあるとはな・・・ジュエルシード。」

「強制発動をさせて見つけようか？」

フェイトの出した提案にキルアは答える。

「いや、そんな事をしなくてもジュエルシードの力の感覚は覚えたから見つけられる。」

「アンタの探知能力ってどんだけ凄いんだい。」

キルアの探知能力に脱帽するアルフ。

「慣れれば簡単なものだ・・・さて・・・見つけてくるか。」

キルアはジュエルシードを探し向かう。

「キルアって本当に凄いねえ。」

「そうだね。」

フェイトとアルフが少し喋ってる間にキルアは戻ってきた。

「見つけたぞ・・・ジュエルシードのある場所に連いてきてくれ。」

キルアはフェイトとアルフを街中のジュエルシードがある場所に連れて行く。

「あ、あつた。」

「フェイト、封印を始めてくれ。」

「うん。」

フェイトはバルディッシュを起動させジュエルシードを封印した。

「封印終了!」

「やったね、フェイト!」「だが・・・恐らく今回も。」

キルアは彼女達が来るだろうな・・・と考えた。

「くっ、また先を越されたか!」

「フェイトちゃん・・・。」

キルアの考え通り、なのはとユーノがやって来た。

「今回もジュエルシードはアタシ達が頂いたよ!」

「本当に君達はジュエルシードがどれだけ危険な物か分かっているのか!」

「こちらにも集める理由があるからな危険でも譲れんな。」

「何だと!!!」

「ユーノ君、ちょっと落ち着こう。」

興奮気味のユーノを落ち着かせるなのは。

「フェイトちゃん・・・やっぱり・・・。」

「ジュエルシードは渡せないよ。」

「そう・・・じゃあ、ジュエルシードを賭けて戦うんだね・・・。」

「なのは・・・ジュエルシードを戦わずに渡して。」

「えっ!?!」

フェイトの発言に驚く、なのは。

「なのはと私じゃ実力の差がありすぎる・・・無駄に傷付けたくないんだ。」

「何を言っているんだあの子は！？なのはは前よりも実力が上がってるんだ、そう簡単に負けるものか！」

ユーノは成長したなのはの実力ならフェイトに勝てると思っている。

「フェイトちゃん・・・いくら何でも私を嘗めすぎじゃないかな・・・。」

「本当の事を言っただけだよ。」

フェイトは、はっきりとそう言う。

「なら成長した私の力を見てみてよ！」

なのははレイジングハートを構える。

「デイ・・・あれフェイトちゃんは!？」

なのはは目の前にいたフェイトが急に居なくなった事に驚く。

「後ろだよ。」

「えっ!？」

なのはは直ぐに後ろに振り向く。

「かつ、彼女いつの間に!？」

「フェイト、すっごく早くなったねえ。」

「だが・・・まだフェイトは本気じゃない。」

「何だって!？」

キルアの発言に驚くユーノ。

「そつ、そんな・・・私あんなに練習頑張ったのに・・・。」

「私だって日々成長しているんだ・・・キルアのおかげだね。」

「貴方は彼女に一体どんな訓練をつけたんだ!？」

「普通に修行しただけだ。」

キルアはユーノの質問にそう答える。

「普通につて・・・。」

「まあ普通って言っても師匠のレベルの桁が違っけどね。」

アルフがユーノに向かってそう言う。

「フェイトの飲み込みが早かっただけさ・・・。」

「いや、実際私がここまで強くなれたのはキルアのおかげだよ。」

「ふ・・・そう言ってもらえると嬉しいな・・・。」

フェイトの言葉にキルアは軽く微笑む。

「私、フェイトちゃんとこんなに差が出来てたんだ・・・。」

フェイトととの差に落ち込むのは。

「まあ、キルアがフェイトの師匠何だから、仕方ない事だよ。」



落ち込むのはに対してそう言うアルフ。

「貴方は一体何者だ！」

ユーノはキルアに対しそう問う。

「ただの旅の格闘家だ。」

キルアはそう答える。

「あの子の成長率はただの旅の格闘家が師にittedただじゃ説明がつかない！」

「本当に俺はただの旅の格闘家さ……。」

ユーノにあくまでただの旅の格闘家と言うキルア。

「フェイトちゃん……今回は私の負けだね。」

「なのは！？」

なのはが自ら敗北を認めた事に驚くユーノ。

「今回は私の負け……でも次は負けないよ！私、もっともっと強くなる！」

なのははフェイトに対してそう言った。

「強くなるうとするのは良い事だと思うよ……なのは、ジュエルシードを。」

「負けちゃったし渡さなきゃね……。」

「なのは！？」

「ごめんねユーノ君・・・でもこれは決めてた事だから。」そう言うてなのははフェイトにジュエルシードを渡そうとするが・・・。

「ひゃっほーい！原作通りの場所になのはとフェイトがいるぜ！・・・原作にやいねー奴もいるぞ？転生者か？」

転生者が現れた。

「転生者！？」

「なに？なに？転生者の事しってんの？じゃ、やっぱそこの奴転生者？」

キルアを指差しそう言う転生者。

「俺は転生者ではない。」

「じゃあ何なんだよおめえ・・・でも、まっ、俺のなのはとフェイトと一緒にいるから死にな。」

急にキルアに向かって魔法を放とうとする転生者・・・キルアは軽く気絶させて終わらせるか・・・と考えるが。

「キルア、私に戦わせて。」

フェイトがキルアにそう言った。

「フェイト？」

「私、自分の力が転生者相手に通じるか確かめたいの。」

「・・・そうか、やってみると良いフェイト。」

「うん！」

「おいおいフェイトちゃん君、俺に勝てる気での？俺、原作キヤラに絶対負けない強さよ？」

転生者はフェイトに向かいそう言った。

「原作キヤラとよく分かんないけど・・・私を嘗めないでね？」

「嘗めてんのはそっ・・・」

ヒュッ！バキッ！

フェイトは転生者に素早い蹴りを放った。

「うぎゃあ！？いてえ！？魔法障壁軽く破りやがっただと・・・こんな強さ聞いてねーぞ！！？」

フェイトの強さに慌てる転生者。

「・・・簡単に勝てちゃうかも・・・駄目だ油断しちゃ戦いは何が起こるか分からないんだから。」

フェイトは油断する事なく転生者と戦う

「くっ、くそお！くらえ！俺のスーパーウルトラゴージャスな魔法を！！」

転生者はSSSランクの魔法を放った・・・だが。

「私の新技いくよ！ボルテックジャベリン！」

フェイトは雷の槍を気で作り出し転生者に投げつけた。

「こつ、こんな技フェイトが使えるなんてしらねーぞ!？」

驚く転生者・・・そして技が当たった。

カッ！バリッ！バババッ！ピシャアッ！

「うぎゃぐばええええ!!？」

転生者はフェイトにあっさり倒された。

「手加減したから死んでないよね？」

「ああ・・・ちゃんと生きてるな。」

「よっ、良かった・・・。」

死んでなくて良かったと安心するフェイト。

さすがにあれな転生者と言えど殺すのは不味いと言う事だろう。

「あれぐらいの相手では今のフェイトの相手にはならん・・・。」

「えへへ・・・ありがとうキルア。」

自分を評価してくれたキルアにお礼を言うフェイト。

「思った事を言っただけ何だかな・・・。」

お礼を言われる事だろうか？と考えるキルア。

「キルア、帰ろっか。」

「フェイト!？あの子からジュエルシードを渡してもらわないでいいのかい!？」

「うん、今回は転生者が突然横に入って来たしね・・・それになのはとはまた会うことになるよ。」

フェイトはまた会うことになるから今回はいいとアルフに言う。

「フェイトがそう言うなら仕方ないねえ・・・。」

「ふ・・・では帰るとするか。」

キルア達はこの場から去って行った。

「・・・行つたね彼等。」

「私、強くなきゃ・・・。」

強くなると言う思いをなのはは胸に強く秘めるのだった・・・。

金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきすぎた実力の差（後書き）

作者「転生者が見事にフェイトに破れました！」

フェイト「新技で決める事が出来たよ！」

キルア「技、実戦でちゃんと出来てたなフェイトさすがだ。」

フェイト「えへへ。」

アルフ「ねえ作者、アタシ全然戦ってないねえ・・・。」

作者「そのうち戦闘描写があるよ・・・では皆さんそろそろ。」

フェイト「読者の皆様、今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！  
ございます！」

アルフ「次回もちゃんと読んでおくれよ！」

キルア「これからもこの小説をよろしく頼む。」

作者「では読者の皆様また次回で！」

気になる格闘家の悲しい目（前書き）

今回はキルアの出番がすくなくいです。

## 気になる格闘家の悲しい目

「ねえ、キルア・・・時々悲そうな目をしてない？」

「いや・・・別にしていない・・・それよりも今日は一人で修行に出かける・・・御飯の用意はしておいたから暖めて食べてくれ。」

そう言ってキルアは外に出かけた。

「フェイト？何でいきなりあんな事をキルアに聞いたんだい？」

「うん・・・キルア時々凄く悲しい目をするんだ・・・本当に悲しそうな目を・・・。」

フェイトは暗い表情でそう言った。

「何か過去にあったのかねえ・・・あっ！？キルアいつも持ち歩いてる袋を持って行ってないね。」

「あっ、本当だ。」

アルフはキルアの荷物袋を見て閃いた。

「中を見ちゃおうよフェイト、過去の事とか分かるんじゃないかい？」

「駄目だよ！そんな事をしちゃ！見られたくないものだってあるかもしれないし・・・。」

フェイトは怒り気味にアルフにそう言った。

「で、でも気になるじゃないか・・・フェイトだって本当は気になるんじゃないかい？」



「き、気になるけど・・・。」

「恥ずかしい物何て入っちゃいけないよ、だから見ちゃおうよフェイト。」

「で、でもお・・・。」

フェイトの自分の中の見たいと言う悪魔と見たら駄目と言う天使が戦っていた・・・しかしフェイトが悩んでいるうちに・・・。

「もう開けちゃったよ。」

「ア、アルフ!？」

「何が入ってんだろうねえ・・・あつ、何か変わった石が出てきたね、でもこれはキルアの過去は関係ないねえ・・・。」

「アルフ止めようよ・・・。」

「もう開けちゃったしアタシは最後まで突っ走る!」

力を込めてアルフはそんな事を言うがやってる事は結構あれな事である。

「えーと次は・・・薬袋かこれも関係ないね。」

「アルフ。」

フェイトはおろおろしてアルフを見る。

「フェイトもチラチラ目をやってるじゃないか・・・ここまで来たら一緒に見ようよ、好きな男の過去を知るのはアドバンテージだと思うよ。」

けどやっている行動はデイスアドバンテージである。

「・・・キルアには内緒だよ?」

「分かってるって。」

フェイトの心の中の天使と悪魔の戦いは悪魔の勝ちのようだった。

「次は・・・おつ、何だろうねこのケース？」

「開けてみよう。」

「そうだね・・・手紙とペンダントが入ってるよ。」

「手紙を読むのは、まずいよね・・・。」

誰かがキルアに贈った手紙を読むのはさすがにまずいと思うフェイト。

「アタシは読む！」

意気込むアルフ、人の手紙を読むのに気合いを入れるのはおかしいと思う。

「えーと何々・・・。」

『キルアさんへ・・・長い修行の旅に出ると聞きました。  
私は忙しく見送る事が出来ないのでこの手紙とペンダントを贈ります』

「これ女からの贈りものだ!？」

「こ、恋人なのかな・・・?」

「続き読むよ!」

アルフは手紙の続きを読む。

『キルアさん、このペンダントは身に着けると安らぐ闇の力を込め

ておきました。

疲れた時に身に着けてください。

でもキルアさんが身に着ける事は少なそうですね。

キルアさんは強いですから。

キルアさん修行頑張ってください！

そしてできればたまに帰って来てくださいね私達の世界へ。  
皆もきつと喜びます！

アルマより  
」

「こりや恋人って言うより友達だね・・・。」

「何かこの人に悪い事をしちゃったよね・・・勝手にキルアに贈った手紙読んじゃったし・・・。」

「ちゃんと手紙はケースに戻さなきゃね・・・。」

アルフは手紙をケースにちゃんと戻した。

「キルアの過去に繋がる物は、まだ出ないねえ・・・。」

「もしかしてキルアの荷物には入ってないんじゃないかな？キルアの過去に繋がる物。」

「そうなのかねえ・・・んっ？これは魔導書初級編？」

「あつ、それキルアが私に魔法を教える時に使った奴だ。」

「中級編と上級編つてもあるね・・・でも上級編は封印が、かかっているみたいだ。」

「上級って言うぐらいだからとっても凄い魔法何だろうね。」

「だろうねえ・・・んっ？未完編って言うのも出てきたよ・・・封印の強さが異常だね・・・。」

「危険な魔法が書いてあるのかな？」

「でも未完って書いてあるけどね。」

「未完・・・気になるよね。」

魔導書未完編に興味を示すフェイト・・・人間見たらいけないものに興味を示すものである。

「まあ、今はこれよりもキルアの過去に繋がる物だよ。」  
「そうだね、アルフ。」

フェイト達は再びキルアの過去に繋がる物を探し始める。

「ん」と・・・またケースだ。」  
「また手紙と何かが入ってるのかな？」  
「開けよう。」

ケースを開けるアルフ、中には手紙と茶色い籠手（ストリートファイターのリュウが着けてる物と見た目同じ）が入っていた。

「手紙を読むよ。」  
「ごめんなさい手紙を書いた人とキルア・・・。」

アルフは手紙を読む。

『キルア、長い修行の旅に出るんだってな俺はちっとな修行が忙しくて見送りに行けねーんだ。  
悪いな俺とお前は兄弟みたいなものなのにな。』

「キルアの兄弟みたいな人だって。」  
「何か感じのいい人みたいだね。」

『お前もう籠手持ってるけどよ予備として贈つとくぜ、それにしても長い修行の旅か・・・お前と手合わせする機会も結構なくなっち

まうんだな。

まっ、永久に会えねーわけじゃないかキルア修行頑張れよ！スゲー強くなれよ！俺もスゲー強くなるからな！  
俺達の世界にたまには帰って来い！絶対だ！

剣舞より  
』

「何か勢いのある手紙だったね。」

「うん、そうだね字に凄い力込もってるし。」

「この手紙もちゃんとケースに戻さないかね。」

アルフは手紙をケースに戻した。

「にしてもキルアの過去に繋がる物まだ出ないねえ……。」

「やつぱりないのかな？」

「いや、まだアタシは諦めないよ。」

そう言つてアルフはキルアの荷物を再び探る。

「おっ？これは……絶対関係ないね……。」

アルフが取り出した物は『天才科学者発明セット』と言う物だった。

「これ中身何が入ってるんだろ？」

「開けよう！……あれ？開かない？」

「あっ、ここパスワード入力って書いてあるよ。」

「じゃあこれを開けるのは諦めよう。」

アルフは開けるのを簡単に諦めた。

「さあ次探そう。」

「もう止めた方が・・・」

「何言つてんだい、フェイト！ここまできたらとことんやるよ！」

「うう・・・分かったよ。」

「次は何が出るかな・・・これは布切れ？」

「キルアは旅の格闘家何だから野宿の時に自分にかける物じゃないかな？」

「多分そうだろうね、他には何か・・・これはマフラーだ。」

「字が縫い込まれてるね。」

その縫い込まれてる字は。

「『お兄ちゃん大好き 桃花』。」

「キルア、妹が居るんだね。」

「一生懸命さがにじみでる気持ちの込もったマフラーだね。」

「うん、このマフラーとっても暖かそう。」

「これで荷物は最後みたいだね。」

「アルフ・・・キルアが帰って来たら謝ろう？」

「うん・・・そうしようかフェイト。」

二人はキルアが帰ってくるのを待った・・・キルアに謝る為に。

そしてキルアが帰って来た。

「ただいま・・・フェイトにアルフどうした？」

キルアは二人の様子が変な事が気になった。

「ごめんなさい！」

「ごめんよー！」

二人は泣きながらキルアに謝った。

「一体どうしたんだ？」

「キルアの袋の中の荷物勝手に見ちゃったの……。」

「どうしてだ？」

「キルアが時々悲しそうな目をして……過去に何かあったのかなって気になって……ごめんなさい！」

「最初に見ようって言ったのはアタシ何だ……だから叱るならアタシだけにしておくれよ！」

「別に俺は怒っていないぞ？……過去に囚われてる俺が悪いんだ気にするな……だが他人の荷物は勝手に見てはいかんぞ。」

「過去に囚われてる……？じゃあやつぱりキルアは過去に……」

「すまない……それは聞かないでくれ。」

「うん……キルアが話したくないなら。」

「ねえキルア、アルマと剣舞ってどんな人だい？。」

アルフは手紙の二人が気になってキルアに聞いてみる。

「ああ……二人の事か、アルマは一言で言えば心の優しい分け隔てなく人を見る女性だな……剣舞は俺の兄弟みたいなもので強さを求め日々鍛練を怠らない奴だ、どちらも俺の大切な仲間だ。」

「大切な仲間……。」

フエイトはキルアのその言葉を聞きキルアが二人を大事に思ってるんだなと思った。

「そう言えばキルア妹がいるんじゃないかい？その子はどんな子だい？」

アルフはマフラーの事からキルアに妹が居ると思いそう聞いた。

「ああ・・妹は優しく兄思いの良い子だ・・。」

「良い子何だねえ。」

「キルアの仲間や妹会ってみたいな。」

「会ったら仲良くできると思うぞ・・。良い人達だからな。」

「今日はキルアの仲間の人達の事にふれる事ができたね。」

「そうだねフェイト。」

「二人とも俺だから怒らなかったが人の物を勝手に見ては駄目だぞ。」

「は、反省してます・・。」

「アタシも、もうしないよ・・。」

「ふ・・それなら良い。」

フェイトとアルフはキルアの荷物を勝手に見たがキルアの心が広がった為に怒られなかった。

人の荷物は勝手に見てはいけないと言う事をフェイトとアルフは心に深く刻むのだった・・。



## 気になる格闘家の悲しい目（後書き）

作者「やつと小説書けたよ・・・携帯使えない時が多くて大変だ・・・。」

フェイト「今回キルア主人公なのに出演が少ないよね。」

アルフ「今回はアタシとフェイトがメインだったねえ。」

キルア「アルマに剣舞・・・元気にしてるだろうか。」

作者「してるでしょ・・・あの二人強いし・・・そろそろ皆さんよろしく願います！」

フェイト「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」

アルフ「今回はキルアの出演が少なかったけど次回は普通に多目だよ！」

キルア「次回もこの小説をよろしく頼む。」

作者「この小説をこれからもよろしく願います。」

接触、閃光の騎士！（前書き）

謎の存在に出た二人が登場！

## 接触、閃光の騎士！

キルア達は現在とある公園に来ていた。

この場所にジュエルシードの反応があったからである・・・そしてジュエルシードは現在木の中に入り魔物となっていた。

「グオオオオ！！」

「木の魔物が・・・」

「あの木の中にジュエルシードがあるね。」

「倒せば出てくるよ。」

「分かった、じゃあ倒す。」

ビツ、バキッ！

キルアは一瞬で木の魔物を倒した。

すると倒された木の中からジュエルシードが出てきた。

「フェイト、封印を。」

「うん分かったよキルア。」

フェイトはバルディッシュを起動させジュエルシードを封印した。

「キルアが居るとあっさりおわるねえ・・・。」

「そうだね、アルフ。」

「来るな・・・。」

キルアはまた今回もなのは達が来ると考えていた。

そして考え通りなのは達はやって来た。

「くそっ、また先を越されたか！」

「フェイトちゃん……。」

「なのは……。」

二人の少女はお互いに目を合わせデバイスを構える。

「フェイトちゃん……私強くなったよ。」

「なのは……うん確かにね、でも私だって強くなってるよ。」

「なのはは死に物狂いで訓練をしたんだ！君に負けるものか！」  
「……。」

キルアはなのはをじっと見ていた。

「おい、フェレット死に物狂いとはあくまで合間に休みを加えてか？」

「いや、休みなしで……僕は少し休んだ方が良いと言っただこれぐらいしなきゃフェイトちゃんには勝てないってなのはが言ったから……でもなのはあの通り気合い充分疲れなんて感じさせないよ！」

「指導者失格だな……なのはは確実にフェイトに負ける……普通の奴が見ればとても疲れてるように見えないだろうが……俺には分かるなのはは体に尋常じゃない疲労が溜まっている……あのまま戦わせるのは危険だ。」

「えっ！？何だって！？」

「最悪体に障害が残るかもしれん……。」  
「と、止めないと！？」

しかしフェイトとなのはは既にぶつかり合おうとしていた。

「（止める！）」

ガッ。

キルアはフェイトとなのはがぶつかり合うのは止めた。

「キルア、どうして邪魔するの！」

「キルアさん邪魔しないでください！」

「なのは！何故そんな体で戦おうとした下手をしたら体に障害が残る所たつたぞ！」

キルアは真剣になのはを叱る。

「わ、私はこの通り元気ですよ・・・。」

「俺の目は誤魔化せん！なのはお前の体には尋常じゃない疲労が溜まっている！」

「それでキルアは戦いを止めたんだ・・・。」

「フェイト、今回の戦いは・・・。」

「うん・・・無しにするよ。」

「キルアさんは何でそこまでして戦いを止めるんですか・・・私はいくら頑張ってもフェイトちゃんに勝てない・・・つまり弱いからですか？」

「キルアは貴女の事を心配して！」

「なのは・・・お前は家族の事を考えたか？」

「家族・・・の事？」

「お前が無理をした結果、体に障害を残し苦しむお前の姿を見る家族の姿を！」

「あっ・・・！？」

「フェイトに圧倒的に差をつけられて悔しかったんだろう……だが無理をしてまで訓練をし体を壊しかけてどうする……家族が悲しむじゃないか……。」

「わ、私……私は……。」

なのは自分のした事を悔いて涙を流しかけた時・

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。君達、ジュエルシードの件に関わってるね事情を聞かせてもらおうか。」

空気を読まないでクロノとか言う奴が現れた。

そしてそのクロノは……

ヒュン！バキヤツ！

突然ぶっ飛ばされた。

「がつ！？」

「一人の少女が己の行動を悔い家族の為に涙を流そうとする時にいきなり割って入るとは……なんたる愚。」

「左様でございますね閃光の騎士様。」

「きつ、君達は何者だ！？」

「貴様ごときに名乗る必要はないKY。」

「閃華KYとは何だ？」

「黒くて弱いと言う意味の言葉でございます。」

「空気読めないと言う意味だろ！」

自分で言ってしまったクロノ。

「何？空気を読めないと言う意味だったのか。」

「そう言えばそんなも一つの意味もありました。」

「二つの意味がある言葉だったのか。」

「明らかにその君がつけ加えただろ！」

クロノは閃華を指差しそう言う。

「言いがかりをつけるな。」

「閃華に自分の無知を擦り付けるとは……ますます愚だな。」

閃光の騎士は閃華の事を信じきっていた……黒くて弱い閃華がつけ加えたものなのだが……。

閃光の騎士達が話していると別の誰かがやって来た。

「見つけたぜ格闘家！」

「貴様は……最初に会った転生者。」

キルアはちゃんと彼の事を覚えていた様だ。

「ちゃんと覚えてたみてえだな！」

「一応な……。」

「あいっかわらずムカツク野郎だな……ん？何だテツメエ？」

バカな転生者は閃光の騎士を見てそう言った。

「貴様あ……今、閃光の騎士様に向かっててめえとか言ったな……。」

「だから何？お嬢ちゃん？」

「貴様を殺す。」

閃華はレイピアでバカな転生者を切りつける・・・バカな転生者が追いきれないスピードで。

「イツテエ！？いつ切られたんだ！？」

「楽には死なさんぞ・・・。」

「閃華やめなさい私は彼の言葉は気にしていない・・・それにこれ以上やるとあの格闘家・・・キルアと言う者が彼を助けに入るだろう。」

「こんなどうでもよさそうな奴を？」

「それでも命ではあるからね。」

「転生者この場からとつとと離れる・・・死にたくないならな。」

「な、何かヤバソーだから逃げるぜ！」

転生者はさっさとこの場を離れて行った。

「さて・・・旅の格闘家キルア、君に私は勝負を挑む。」

「キルアに勝負を挑むだつてアイツ負けにいく気にかい？」

「貴様！閃光の騎士様に向かって！」

「閃華、落ち着きなさい。」

「はい。」

閃華は閃光の騎士に言われるとすぐに大人しくなった。

「で・・・戦いは受けてくれるかね？」

「周りを巻き込まんならな。」

「分かった閃華、私と彼を結界の中に入れてくれ。」

「はい分かりました閃光の騎士様。」



閃華は閃光の騎士に言われ結界をはる。

「きつ、キルア!？」

「アンタ!キルアを結界に閉じ込めてどうする気だい!!」

「閃光の騎士様の戦いの舞台を整えただけだ。

結界でどうしようなどとしていない。」

「本当だろうね・・・それにしてもこの結界、中が見えない!」

「キルア、大丈夫かな・・・。」

「キルアさん・・・。」

「それにしても何て高度な結界何だ・・・。」

ユーノは閃華の結界を見てそう呟いた。

「僕を無視して事が進んでるな・・・一体何なんだ!」

クロノは急に現れた存在のせいで自分の仕事ができなくてイラついていた。

結界の中・・・

「ここは頑丈だと思う存分戦ってくれたまえ。」

「分かった・・・では行くぞ!」

キルアは閃光の騎士に向かって行く!そして攻撃を繰り返すが。

「その程度では私には勝てんよ!光輝神鳴斬!」

ヒュパッ!ヒュヒュヒュ ヒュッ!ザン!!

「くっ。」

キルアは閃光の騎士の攻撃をガードした。

「見事な防御だ。」

「なるほど貴様の實力は分かった・・・三割の力を使って倒す。」

「三割の力で私を倒すか・・・ハツタリではないね。」

「それが分かる貴様はやはり強いな。」

「相手の力を理解するのも實力のうちだからね。」

「では行くぞ！黒龍拳！」

ドガッ！ガッガッガッガッ！！

「ぐああああ！！」

閃光の騎士はキルアの技を受け倒れた。

「俺の勝ちだな。」

「ああ・・・私の負けだ・・・私もまだ鍛練が足りないね。」

キルア対閃光の騎士の戦いはキルアの勝利でかたがついたのだった。  
そして結界の外では・・・。

「閃光の騎士様が負けた！？結界解除！」

閃華の意思により結界が解除され中からキルアと閃光の騎士が出てきた。

「キルア！無事だったんだね。」

「アタシはキルアが勝つて信じてたよ！」

「キルアさん私もう家族に心配をかける様な無茶はしません・・・考えてみて分かりましたから・・・。」

「そうか・・・それでいいんだ・・・なのは。」

キルア達が会話している中で閃光の騎士達が話しかけて来た。

「私達は帰らせてもらおうとしよう・・・キルア、私が強くなったらもう一度戦おう。」

「閃光の騎士様は次は負けない！」

「では・・・さらば！」

閃光の騎士達は光に包まれ消えて行った。

「奴等は一体何者だったんだ・・・？」

「普通の人達でない事だけは確かだよね。」

「でもキルアの相手じゃなかったね。」

キルア達が閃光の騎士達を何者かと考えていると忘れられてそうなクロノが話しかけてきた。

「おい、君達ジュエルシードに関わってる参考人として事情を聞きたいんだが。」

「時空管理局とか言ってた奴だったな・・・大方警察の様なものだろうな。」

「分かってるなら話が早い事情を・・・。」

「フェイトにアルフは先に帰っていてくれ俺はなのはと話があるから・・・すぐには帰れないかもしれないからジュエルシード探索を頼む。」

「うん分かったよ、残りのジュエルシードもちゃんと集めるよ今の

「私なら大丈夫だよ。」

「キルア、帰ったらちゃんとご飯を作りなよ！」

「分かった。」

フェイトとアルフはキルアと話すと先に帰って行った。

「ちょ、ちよつと待て！」

「事情聴取なら一応俺が受けてやる・・・フェイトとアルフを追うというなら俺は貴様を倒すぞ？」

キルアは凄まじい威圧をクロノに与える。

「わ、分かった・・・。」

「私も行くんですか？」

「ああ、そうしてくれると助かるよ。」

突如モニターが現れた。

『クロノ、二人逃がしちゃったみたいね。』

「ですがその二人の仲間が事情聴取に応じる様です。」

『ええ、じゃあクロノ早速二人をアースラに連れて来て。』

「では連いてきてくれ。」

「分かった。」

「はい、分かりました。」

キルアとなのはは共にクロノに連れられアースラに向かうのだった。  
・  
・  
・

## 接触、閃光の騎士！（後書き）

作者「読者の皆様・・・この小説もクライマックスが近くなりまして・・・あくまでリリカルなのは無印ですが・・・A・S編に普通が続けようと思います。

読者の皆様！これからもこの小説をよろしくお願いいたします！」

## 全て集まるジュエルシード（前書き）

今回はページが多めです。あと後書きにおまけ小説をちょっとだけ書きます。

## 全て集まるジュエルシード

キルアとなのはは現在クロノに連れられアースラに来ていた。

先頭を歩いていたクロノが振り返りなのはの方を見た。

「バリアジャケットとデバイスはもう解除してもいいよ。」  
「あつ、はい。」

なのははバリアジャケットを解除しレイジングハートを待機状態にした。

クロノはユーノの方へ視線を向ける。

「君も元の姿に戻ったらどうだい？」  
「あつ、忘れていました。そうですね。」

ユーノは光に包まれその中でフェレットの姿から人間の姿へと変わっていく。

光が収まるとそこに居たのは、なのはとそう対して年が変わらない少年だった。

「ふう・・・なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」  
「えっ？・・・ええー！？ユーノ君って人間だったの！？」

なのははユーノが人間であつた事に驚くがキルアは無反応だった。

「あれ？なのはと最初に会つたのはこの姿じゃなかったっけ？」  
「フェレットの姿だったよ！？」

「あ……。」

ユーノは思い返していた……そういえば確かに最初に会った時はフェレットの姿で、なのはにはこの姿を見せていなかった事に気づいた。

「この姿を見せるの今回が始めてだったみたいだね。」

「お、驚いたよ……ユーノ君が人間だったなんて……。」

「君達……話すのは後にして連いて来てくれないかい？」

クロノがユーノとなのはにそう言う、なのはとユーノはすみません  
と言いつクロノに連いていく。

「艦長連れて来ました。」

キルア達は艦長の部屋に到着した。部屋の中に入るとキルアは顔をしかめた……部屋の中は盆栽やお茶の道具に畳や獅子お脅しが置かれていた……キルアが顔をしかめた理由は和の文化の物なのに何か和がとれていない所だった。

「（ただ和の物を置けばいいと言うものでは無いだろう……。）」

「とりあえず座って楽にしてくださいね。」

笑顔でリンディにそう言われなのは達は畳に座る。

「私が時空管理局提督『アースラ』艦長のリンディ・ハラオウンです。」



この後互いに自己紹介し、ユーノ達は今までの経緯を話した。

「まあ、あのロストロギアジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね。」

話を聞きおえたリンディがユーノにそう言う。

「・・・はい、だから僕が回収しようとして・・・。」

「立派だわ。」

「だがそれと同時に無謀でもある。」

「うつ・・・。」

クロノの言葉に俯くユーノ。

「あの『ロストロギア』って何ですか？」

なのはがリンディに聞いた。

なのははリンディから聞いた。次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になると。

話を聞いた、なのはは自分がどれだけ危険なものに関わっていたか理解した。

「これからはロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「えっ!？」

リンディの言葉になのはとユーノは戸惑う。

「君達は今回の事を忘れてそれぞれ自分達の世界に戻って元のよう  
に暮らすといい。」

「でっ、でも……。」

「次元干渉レベルの事件にこれ以上民間人を巻き込むわけには行か  
ない。」

戸惑うなのは達にさらにクロノは、そう言った。

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。一晩た  
ってからまた改めて話をしましょう。」

リンディのその言葉にキルアが反応した。

「何故考える時間を与えるんだ？本当に関わらせたくないなら考え  
る時間など与えなくともいいだろう？」

キルアのその言葉になのは達を送ろうとしていたクロノも反応した。

「そう言えば確かにそうだ……艦長、何故考える時間を与えるん  
ですか？」

「そっ、それは……。」

クロノにも考える時間を与える事について聞かれリンディは少し動  
揺する。

「大方、時空管理局は人手不足だから協力を申し出てもらおう……

そう考えていたんじゃないか？」

「本当ですか！？艦長！？」

なのは達を今回の件から本当に手を引かせようと考えていたクロノは驚いた。

「ええ・・・そうよ。」

「立场上、頼めないのかもしれないがやり方がくだいな・・・。」

キルアはリンディのやり方が気にいらなかった。自ら頭を下げ頼まず相手から申し出てくるのを待つと言うやり方に・・・協力してほしいなら頭を下げて頼むこれは当然の事なのだ・・・危険な事なら尚更の事だ。

「あ・・・あの私・・・」

なのはが何か言おうとするがキルアが・・・

「すまない、なのは・・・俺から言わせてもらっても構わないか？」

「あつ、はいどうぞ。」

キルアの真剣な顔でリンディを方々向き言葉を発した。

「ジュエルシードは俺が事が終わったら全て破壊する。」

キルアの発言にリンディ達は驚きの表情になる。

「ロストロギアを破壊！？そんな事が出来る筈がない！！」

「事が終わったらと言う事は何かに使用するのですか？」

クロノは驚き、リンディはキルアがジユエルシードを使用すると言う事に注意を向ける。

「使用すると言っても邪悪な事ではない……。」

「邪悪な事では無いと言う確証は？」

「邪悪では無いのは確かだが話せん……。」

キルアは何に使用するかは話さなかった……プレシアの心の部分に触れてしまうからだ。

「クロノ……。」

「はい。」

リンディはクロノに視線を向け、クロノがその意味を理解するとクロノはキルアにバインドをかけた。

「キルアさん!？」

「ジユエルシードを使用すると言う人物は野放しにはしておけないわ。」

「（使用するの俺では無いがな……。）」

「キルアさんは邪悪な事に使わないって言ってます!それに使用するのキルアさんじゃないと思います。」

「あの金髪の子と使い魔にジユエルシードの回収を頼んだ人物か？」

クロノは何となく推測しキルアにそう言った……だがキルアは無言だった。

「黙秘か……。」

「クロノ、彼を連れて行きなさい。」

「はい。」

クロノはキルアを連れて行こうとするが・・・

「このぐらいで俺を捕らえたと思っているのか？」

キルアは軽く力を入れバインドを破壊した。  
クロノは驚愕の表情になる。

「魔力も持たない身でバインドを破壊！？・・・あの時の威圧を感じた時普通の奴じゃないとは思ったが・・・化け物か君は！？」

「別にこれぐらいの捕縛を破ったぐらいで大袈裟な反応だな・・・」

「あつ、貴方は抵抗する気ですか！？」

リンディは焦った表情でキルアにそう言う・・・リンディのその言葉に対してキルアは・・・

「別に攻撃は仕掛けない・・・だが連行される気はない。」

「くつ、ジュエルシードを利用使用とする者と繋がっている奴を捕らえておけないのか・・・」

「悪用はしないと言っているんだがな・・・なのは、ちょっといいか？」

「何ですか？」

「ジュエルシードを全て渡して欲しい・・・何に使うのかは話せんが決して悪用はしない。」

キルアは真っ直ぐな目をしてなのはに言う・・・キルアの言葉に対してなのは・・・

「ユーノ君・・・ジュエルシード、キルアさんに渡していいかな？」

「なのは!？」

「キルアさんは悪用しないって言っているし・・・それに封印して保管するよりも破壊してしまう方が絶対にいいと思うんだ・・・絶対に悪用されないためには。」

「・・・分かったよこの人の力は僕も目にしてきた・・・この人なら本当に破壊できそうだしね。」

「君達!何を勝手に決めてるんだ!」

「封印して保管すればジュエルシードと言う力はこの世に残る・・・そしてその力がある限りいつかは悪用しようとするものが現れるかもしれない・・・違うか？」

「ぐっ・・・だが管理局の管理はそんなに甘くはない!」

「だがその管理局の中に力を欲する者がいたとしたら？」

「管理局にそんな人間は絶対いない!!」

クロノはキルアの言葉に激怒する・・・だがキルアはまだ言葉を続ける。

「絶対か・・・何故そう言いきれる？」

「管理局の者は皆、次元世界に生きる人々の生命と財産を守って平和な日常を維持しつづける・・・皆その為に戦っている!だから管理局の中に力を求め道を踏み外す様な者はいない!!」

クロノは管理局の中に道を踏み外すものはいないそうはつきり断言するが、キルアはまだ言葉を止めない。

「人々を守る心を持っていたとしても何かがきっかけでその心が変わってしまうかもしれない・・・そう考えた事はないのか？」

「管理局の者の心が変わるわけが・・・。」

「ない・・・とは言い切れないな・・・人は簡単な事で変わってしまう。いい方向へも悪い方向へも・・・それぐらい分かるはずだ。」

「ぐっ……。」

「貴方に管理局の人達の何が分かるの!!」

クロノはキルアに言い負かされそうになるが、今度はリンディがキルアに対して怒りをぶつけてきた……しかし。

「管理局の人達の何が分かるか……確かに分からない俺には……だが貴様らは分かっているのか人間の事が？」

「分かっているに決まって……。」

「では何故、管理局の者はその心が変わらないと言い切れる？自分達が特別な人間とも思っているのか？」

キルアは鋭い眼差しをリンディに向けそう言葉にする。リンディはキルアの鋭い眼差しに身を縮ませる。

「別に私達は自分を特別な人間なんて思っていません！人には変わらぬ心があると私は思っているだけです！」

リンディはキルアに対して力を込めてそう言葉にする……だがキルアは鋭い眼差しを止めない。

「確かに変わらぬ心も人にはあるだろう……だがそれが全て同じ心だとは限らん。」

「うっ……でも管理局の者は……。」

「全員が次元世界の人々の生命と財産を守り平和を維持しつづける変わらぬ心を持っていると言いたいのか？……それが自分達を特別だと思っていると云っているんだ……何故全く同じだと言いつける……違う人間だと言いつのに。」

「ですが、この仕事は人々を守る仕事！守ろうと思わないものがやろうとするはずが……。」

「無い・・・と言いたいのだろうが人を守る仕事でも守ろうと言う気持ちが無くともやる者はいる・・・給料がいい、待遇がいい、人はそんな理由で人を守る仕事につくこともある。」  
「あつ・・・くつ。」

キルアの言葉にリンディは言い返せなくなる。

「貴様達は確かに人々を守ろうとする心を持っているだろう・・・だが他の者も全員が同じ心だと思うんじゃない。」

「だがそれと君がジユエルシードを壊す話は別だ！」

「俺がジユエルシードを壊す理由・・・それは俺の世界のレベルの事がジユエルシードに関わっているかもしれないからだ。」

「君の世界のレベルだと？」

「俺の世界のレベルの事では次元崩壊するぐらいの力は俺の知っているあの人は個人が普通に持っている。」

「なっ!？」

「そんな力を持つ人達がいる世界があつたと言うの!？」

「でっ、デタラメだ!そんな力を持つ人間がいるわけがない!？」

「デタラメでは無いし実際にそんな力を持つ人間はいる・・・貴様達の目の前にだ。」

「あつ、貴方そんな力を!？」

「どうせハツタリだろう!」

キルアがそんな力を持っているのかと驚くリンディだがクロノはハツタリだと信じようとしない。

「ハツタリではない。」

「口で言われるだけで信じられるか!」

「では見せればいいのか？」

「できるものならな!」



キルアとクロノが言い合う中、アースラ艦内に緊急アラームがが鳴り響いた。

「一体何事だ！」

「とにかくブリッジへ！」

「何が起こったんでしょかキルアさん？」

「とりあえずついて行けば分かるだろう。」

キルア達はクロノ達に連いて行きブリッジへ来た。

するとそこにあるモニターには荒れ狂う海上の上でジュエルシードを封印しようとするフェイトの姿が映っていた。

「あの数のジュエルシードを一気に封印！？無茶だわ！？」

「個人の出せる魔力量を越えていますね、間違いなく自滅します。」

クロノはそんな言葉を軽く口にする・・・だが。

「今のフェイトなら、あの数のジュエルシードを一気に封印する事はできない事ではないな。」

キルアは今のフェイトの実力が分かっていたのであればは無茶ではないと考えていた。

「そんなわけが・・・」

「あの少女がジュエルシードの封印に成功しました！？」

クロノがフェイトがあの数のジュエルシードを一気に封印できるのを否定しようとするオペレーターがフェイトがジュエルシードの

封印に成功した事を伝える。

「何!？」

「なのは、ちょっといいか？」

「え？何ですかキル・・・。」

なのはが言葉を言いおえる前にキルアがなのはを抱える。

「すまない。」

「えっ!？・・・ええー!？」

急の事になのはは顔を赤らめ動揺した。キルアは、なのはを抱え空間転移する。

「なっ!？消えた!？」

海上・・・

「ふう・・・封印成功したねアルフ。」

「六個ものジュエルシードを一気に封印って・・・本当に成長したねえ。」

ビッ!

フェイトとアルフが会話している所へ、なのはを抱え転移したキルアが現れる。

「きつ、キルア!？何でなのはを抱えてるの!？」

「これには理由があつてな・・・なのは、レイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えてくれ。」

「あつ、はい。」

キルアは抱えていたなのはを降ろす。なのははキルアに言われるままレイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えた。

「なのは・・・今から言うことを聞いてくれ。」

「は、はい!」

キルアはなのはにある事を言う・・・。

「えっ!?!でもそれじゃあキルアさんが・・・。」

「別に構わない・・・なのは、ジュエルシードを。」

「はい・・・。」

なのはジュエルシードをキルア達に渡す。

「これで全てのジュエルシードが集まったんだ・・・母さんの所へ報告しに行かないと!」

フェイトはジュエルシードが全て集まった事を喜びプレシアに早く報告しようと思気込む。

「なのは、やるぞ・・・この後は言った通りに。」

「はい・・・。」

キルアは片手に気を溜め海に向かって放つ。

「よし、これで・・・フェイトにアルフ、プレシアの元へ行こう。」  
「うん!」  
「あいよ!」

キルア達は場を離れプレシア達の元へと向かった。そしてこの後なのはクロノによって保護されアースラへ。。

「君、大丈夫だったかい?・・・それにしてもあの男はとてつもないエネルギーを放ったな。」

「ジュエルシードを渡していたけどあの様子じゃ脅し取られたのでしよう。」

「確かに君は彼に渡すとか言っていたがあの様子からして思いなおした君を脅しジュエルシードを奪い取ったのだろうな・・・酷い男だ。」

「酷い目にあったわね・・・あの男、こんな子を脅す何てやっぱり悪人かしら。」

「・・・わないで。」

「何と言ったんだい?」

なのはが呟いた言葉が聞こえなかったクロノは、なのはに何と言ったかを聞く。

「キルアさんを悪く言わないで!あの人は本当にジュエルシードを破壊するつもりだよ!あの気弾って言うのを海に向かって放ったのは私が脅された様に見せる為だよ!」

「何故彼はそんな事を?」

「貴方達がキルアさんがジュエルシードを使った後には破壊するって事に賛成しなかったから、そんな状態で私がキルアさんにジュエルシードを素直に渡せば私が罪に問われるからだよ!!」

なのは涙を流しながらリンディ達にそう言葉を口にした。

「彼、この子の為に自分の罪を大きくするきだったの!？」

「キルアさんが本当に悪い人なら私を倒してでもジョエルシードを奪っていったはず・・・それにキルアさんは初めて会った時に私を助けてくれた・・・そんな人が悪い人の筈がない!!」

「なのは・・・。」

ユーノは泣いてるなのはを見て思い返す・・・確かにキルアは、なのはを助けたなのはを殺そうとする奴から・・・それにキルアはフエイトと戦い負傷したなのはに回復薬を渡したりしていた・・・そしてキルアは疲れを溜め込んでも元気なふりをしていたなのはに気づき止めてくれた・・・思えば彼は悪人と呼べる要素はなかったと・・・。

「なのは・・・彼は確かに悪人なんかじゃないね。」

「ユーノ君・・・。」

「では彼はあの事についても嘘をついていないと言うの・・・!？」

「艦長?」

「彼の世界のレベルの話・・・彼が魔力を持たないのに空間転移した事からも事実の可能性が高いのかもしれない・・・だとしたら今回の件は私達では対応仕切れないかも・・・。」

「次元崩壊を起こすぐらいの力を普通に持つ者達が対処する事が・・・。」

クロノは想像してみるがレベルの話が飛びすぎていて全く想像できなかった・・・ただ分かる事は何んでもなくヤバいと言う事だけ。

「艦長・・・僕は彼が言った事を少し考えてみたんです。」

「何かしらクロノ。」

「彼は管理局の全員が次元世界の人達を守ろうとする心を持っているわけではないと言っていました・・・しかし彼は一人も持っていないや多くの者が持つていないとは言っていないませんでした。」

「!?!?・・・そう言えば確かに。」

キラアは全員がは否定したが多くの者がは否定していなかった。

「全員が全く同じ心を持つわけがないと言うのは同じ人間などいないから当たり前で平和を守る心も色々あるのではないかと僕は思いました。」

「私達は管理局の者である事で少し自分達を特別と思っていたかもしれないわね・・・。」

人は管理をする役職につくと無意識の内に自分を特別だと思ってしまうのかもしれない・・・リンディはそう思った。

「僕の中には確かにある・・・変わらない次元世界の人々の平和を守ると言う心が・・・。」

クロノは自分の中にある心確かめた・・・次元世界の人々の平和を守る心を・・・。

もうすぐ大きな異変が起こる・・・ジュエルシードが全て集まったのだから・・・本来は、無い筈のジュエルシードを加えて・・・。

## 全て集まるジュエルシード（後書き）

ここはテキトーナ研究所・・・決して適当な研究所ではない。

テキトーナ博士が住み様々な凄いが何か足りない発明を作っている。そしてそんなテキトーナ研究所に一人の男がやって来る。

「テキトーナ博士ー！呼ばれたんで来ましたよー！」

テキトーナ研究所にやって来た男の名はGヒーローゴキブリマン。ヒーローである。名前からして間違いなくゴキブリの姿でありどっちかと言えば怪人だろと思ったかもしれないが彼の心は立派なヒーローである。

「お来たかゴキブリ。」ゴキブリマンに対してゴキブリ発言した人こそテキトーナ博士・・・凄い発明を作るのだからなんかが足りないのである。

「ゴキブリって・・・ゴキブリマンってちゃんと呼んでくださいよ。」

「いや、二文字増やすとダリーじゃん。」

「二文字増やすとダリーって面倒くさがりすぎですよ・・・。」

「しゃーねーな、ゴキブリマン実はお前に実験台になって欲しい物があつてな。」

「それは一体何ですか？」ゴキブリマンはテキトーナ博士に何の実験になるかを聞く。

「それはこの次元越えもできる。テキトーナ携帯型転送装置のじゃー！」

「次元越えもできるんですか！？凄いじゃないですか！」

「早速使ってみ。」

テキトーナ博士はゴキブリマンに転送装置を投げ渡す。

「ちよっ、受け取りそこねて床に落として壊したらどうするんですか！？」

「ぐちぐち言わないではよ転送装置使え。」

「全く・・・このスイッチを押せばいいんですね。」  
ポチ。

ゴキブリマンはスイッチを押したそしてゴキブリマンはある事に気づいた。

「あの・・・博士？場所指定とかでないんですけど・・・。」  
「だってその機能つけてねーもん。」

博士の衝撃発言にゴキブリマンは驚きの表情を見せる。

「転送装置に一番必要なものが何でついてないんですか!？」

「作る途中で飽きて適当に仕上げたからな、自動修復機能と自己エネルギーチャージシステムはついてるから安心しろよ。」

「妙に凄いのつけてんのに何で最初につけるべきであり一番大切な場所指定機能がないんだあ!?!？」

ゴキブリマンは博士の適当さに驚くばかりであった。

「まあ、頑張れや石の中にいるとかならないといいな。」

「博士えええええ!！」

カツ!

フラッシュの後ゴキブリマンはその場にいなかった。

「さてと・・・寝よ。」

「あ・・・。」

私は今ここで死んじゃうんだ・・・魔女と戦っている巴マミはそう思った・・・魔女が彼女の頭に噛みつくこうとするその時。

カツ!

ゴキブリマンが魔女の口の中に転移してきた。

「へっ!？」

ガブッ!

巴マミは噛みつかれなかったがゴキブリマンが噛みつかれてしまっ



た。

「私、助かったの・・・？でもあれは？」

マミは魔女に噛みつかれているゴキブリマンを見る彼は抵抗していた。

「何だか知らんが私を食うなぁー！！！」

バキッ！

ゴキブリマンは魔女をその拳でぶっ飛ばす。

「今のは正当防衛だ悪く思わないでくれ。」

「ごっ、ゴキブリ！？」

マミはゴキブリマンを見て驚く・・・まあでかいゴキブリだし・・・。

「おや？君達は？」

ゴキブリマンはマミ達の方を見た、ちなみにマミと一緒にいるのは、まどかとさやかと言う子である。

「おっきいゴキブリが喋った！？」

「怪人だ！？」

まどかとさやかはそれぞれゴキブリマンを見て発言する。まどかとさやかの言葉にゴキブリマンは少し傷つく。

「うん・・・女の子には言われ慣れてるけどさ・・・やっぱり傷つくなぁ・・・。」

ゴキブリマンが落ち込んでいるとゴキブリマンにぶっ飛ばされた魔女が起き上がり再びマミに襲いかかるうとする。

「ひっ！」

マミは魔女が襲いかかってきた事に恐怖するが・・・。

「少女を襲おうとするとは許せん！このGヒーローゴキブリマンがお前を倒す！」

ゴキブリマンは魔女に己の正義の拳を叩き込む。魔女は凄い勢いでふき飛び倒される。

「倒したか、君大丈夫かい？」

ゴキブリマンは襲われそうになったマミを心配し声をかけるが。

「マミさんによらないで！デカゴキブリ！」

「怪人め！マミさんを助けたふりをして襲おうとする何て許さないよ！」

まどかとさやかはゴキブリマンが悪者だと思い攻撃を仕掛ける。

「ちよつ、私は怪人ではないって……こうなったら仕方ないさらば！」

ゴキブリマンは羽を広げ羽ばたいて何処かへと逃げた。

「怪人は逃げたみたいだね。」

「大丈夫だったマミさん？」

「あの人、私を助けてくれた……Gヒーローゴキブリマン……か。」

「あんな変な生き物見た事がないよ一体何なんだろうね。」

白い生物キユウベえはゴキブリマンを見てそんな事を言っていたがお前にそんな事は言われたくはないと思う。

「巴マミ……生きていたのね……それとさつき羽ばたいていったのは何？」

羽ばたいていったのを聞いたこの子は、ほむら一言で言えばまどかを助けようとしてる子である。

「……羽ばたいていった彼の名はゴキブリマン……私を助けてくれた人。」

「（ゴキブリマン……そんな奴は今までの世界にいなかったわ？）」

ほむらはゴキブリマンの存在を気にかけた……そのゴキブリマンはというと。

「この世界はどうやら私みたいな見た目の者は馴染みのない世界の様だな……それしても石の中にとかならなくてよかった……寝床どうしよう。」

ゴキブリマンは今日の自分の寝床を考えながら羽ばたいていた。

ゴキブリマンがこの世界にもたらず変化はどんなものなのか……この物語は続く……のか？

G  
ビ  
ー  
ロ  
ー  
コ  
キ  
ブ  
リ  
マ  
ン  
    プ  
ロ  
ロ  
ー  
グ  
    完

伝える真実・・・起こる異変！（前書き）

ジュエルシードを全て集めた事で大きな異変が！？

伝える真実・・・起こる異変！

キルア達は全てのジュエルシードが集まったためプレシアの所へ来ていた。

「母さん。ジュエルシードが全て集まりました。」

「よくやったわねフェイト、偉いわ。」

プレシアは笑顔でフェイトにそう言う。  
するとフェイトは照れた感じで頬を少しかく。

「母さん。早速ジュエルシードを渡すね！」

フェイトは元気良くそう言いジュエルシードを取り出そうとするが・・・。

「ジュエルシードを渡してくれるのは明日でいいわ・・・フェイト貴女は頑張つて疲れたでしょう？だからゆつくり休みなさい。」

「あ、うん・・・。」

フェイトは早く渡したいと思っていたがプレシアが明日でいい、今日はゆつくり休みなさいと言うのでジュエルシードを取り出すのを止めた。

「じゃあ、戻ろうか。」

「そうだねフェイト今日はゆつくり休もう。」

「帰ったら飯を作るんだったな。」

「美味しいの作っておくれよ。」

「キルアの作るものは何でも美味しいよ。」

フエイト達はそんな会話をしながらマンションに戻ろうとするがプレシアがキルアを呼び止める。

「キルアはちよつと残ってくれる話したい事があるの……。」

「キルアはアタシ達のご飯を……。」

「アルフ、ちよつとだけって母さんは言ってるでしょ？」

「わ、分かったよう……。」

「ちゃんと飯は作るから心配するな。」

そう言つてキルアはアルフの頭の上に手を乗せ優しく撫でた。そうするとアルフは機嫌をなおす。

「絶対だよ？後頭撫でるの上手いね。」

「妹が機嫌を損ねた時にはこうやって機嫌をなおしてたからな。」

「ううゝアルフずるい……アルフ、母さんはキルアと二人で話したいんだからそろそろ戻ろ？」

フエイトはアルフが頭を撫でられてずるいと思ったが気持ちを切り替えてプレシアとキルアを二人で話をさせるためにアルフを連れて戻ろうとする。

「分かったよ……。」

「母さんじゃあ私達戻ります。」

「ゆつくり休んでね、フエイト。」

「……フエイト。」

「何？キル……。」

フエイトが言葉を言いおえる前にキルアはフエイトの頭の上に手を乗せ撫でた。

「ジュエルシード全部集めるのよく頑張ったな・・・フェイト。」

キルアはフェイトが全部ジュエルシードを集めきつた事を誉めた。  
フェイトはキルアに誉められて頬を赤くし照れた。

「う、うん・・・ありがとうキルア。」

「フェイト、戻らなくていいのかい？」

「あつ、そうだったね・・・キルア！母さんとの話が終わったらちやんと戻って来てね！」

「分かっているさ・・・フェイト。」

フェイトとアルフはキルアとプレシアを二人で話をさせるため一足先にマンシヨンへと戻って行った。

フェイト達が戻ったのを見てプレシアはキルアと話を始める。

「キルア・・・私が話したいという事は・・・」

「分かっている・・・フェイトに真実を伝える事についてだろうか？  
ジュエルシードが全て集まった今真実は伝えねばならないからな・・・。」

「お見通しと言う所ね・・・ええ、その通りよ・・・フェイトには伝えなければならない・・・アリシアの事・・・フェイト自身の事を・・・。」

プレシアはフェイトにフェイトがアリシアのクローンである事を伝える事について悩んでいた・・・そうフェイトが最初は何の為に産み出されたという事も伝える事になるから・・・。

「私・・・あの子に・・・フェイトに拒絶されるのかしら・・・。」

プレシアは怖かった・・・自分がフェイトを最初に産み出さした理由を伝えればフェイトに嫌われるのではないかと・・・。

「自分が最初にフェイトを拒絶したくせに・・・勝手な女よね・・・。」

「・・・プレシア、今のお前の気持ちをフェイトに伝えればフェイトはお前を拒絶したりはしないさ。」

「そう・・・ありがとう、キルア。」

「それにプレシアが勝手な奴と言うなら俺の方がよっぽど勝手な奴だ・・・。」

「貴方が勝手な人？・・・どうして？」

「俺はかつては何もかもを拒絶していた・・・自分の命をもな・・・。」

「どうしてそんなに全てを拒絶していたの？」

「プレシア・・・お前には話しておこう・・・そして俺の話を聞いてフェイトの側から俺を離れさせたいと思ったならそう言ってくれ・・・。」

「何故そんな事を言うの・・・？」

「聞けば分かる・・・俺は父と妹をこの手で殺した。」

「!？・・・理由があるのでしょう？」

「俺はある奴の手により俺の中にある『殺意の波動』と言う力を目覚めさせられた・・・。」

プレシアはキルアの言った『殺意の波動』と言う言葉が気になった。

「殺意の波動とは何なのかしら？」

「殺意の波動・・・それはまだ完全に詳しい事は分かってはいないが、それを持つものに巨大な力を与えるが・・・その力を持つものは殺戮衝動に刈られてしまう・・・殺戮衝動に刈られた俺を止めようとした父を俺は殺してしまった・・・。妹は俺に正気を戻させる



為に自らの身をはって・・・俺に正気を戻させた・・・だが殺意の波動は尚も俺を蝕もうとした。」

「でもそれは悪いのは貴方じゃなくて貴方の中のその力を目覚めた奴じゃない!!」

プレシアは怒りを覚えた・・・キルアの人生を狂わせた存在に対して。

「だが俺がもつと強ければ・・・殺意の波動に負けない強さを持つていれば父と妹は死ななかった・・・父と妹が死んだのは俺が弱かったからだ・・・。」

「そんな事はない! 貴方のせいなんかじゃないわ!」

「あの人達も俺にそう言ってくれた・・・だが俺は自分が許せなかった・・・だから俺は自分を殺してくれる存在を探した・・・俺が二度と殺意の波動によって殺戮衝動に刈られ暴走する事の無いように・・・正気を保てるうちに死にたくて・・・。」

「キルア・・・。」

プレシアはキルアの辛い過去に胸を痛めた・・・。

「だがそれを絶対に許さない人がいた・・・その人は俺に言った・・・『お前が本当に父と妹を殺してしまった事を悔いてんなら死ぬな! 生きて幸せに生きろ! それが本当の意味での償いなんだ!』と・・・だが殺意の波動に蝕ばまれていた俺はその言葉を拒絶した・・・俺に幸せになる資格などないと・・・それに殺意の波動はいつ俺を呑み込むか分からなかったから・・・。」

「でも今、貴方はここにいますわ・・・。」

「その人が俺を救ってくれたんだ・・・殺意の波動の力に吞まれかけていた俺と本気で戦い・・・全てを受け止めてくれた・・・だから俺は今こうしてここにいる事ができる・・・。」

「貴方を救ってくれたその人には私は感謝しなくてはいけないわね・  
・貴方がいなければ今の私達はなかったのだから・・・。」

キルアがいなければ自分はフェイトとあんなに仲良くなる事はなかったとプレシアは思った・・・。

「俺もあの人には感謝をしている・・生きていたおかげでいい出  
会いが出来たと・・・。」

「私達との出会いは貴方にとっていい出会いだった？」

「ああ、もちろんだ。」

「それは良かったわ。」

「・・・プレシア、俺は今殺意の波動を大体コントロールできる  
様になっているが暴走を絶対にしない・・・とは言いきれない・・・  
だからフェイトの側から離れてほしいなら離れよう・・・だがジュ  
エルシードを破壊した後にしてほしい・・・。」

なのはとユーノと約束してしまったからな・・・と思うキルア。

「フェイトの側から・・・離れては駄目よ。」

「・・・いいのか？俺は危険な力を秘めているんだぞ？」

「今の貴方は殺意の波動と言うものに吞まれたりしないと私は思う  
わ・・・。」

「ありがとう・・・プレシア。」

キルアは今の自分を信じてくれるプレシアに感謝した。

「・・・キルア戻ってフェイト達にご飯を作ってあげてね。」

「ああ・・分かってる。」

「キルア・・・私、気持ちの整理がついたわありがとう。」

「礼を言われる事など別にしていないさ・・・。」

そう言ってキルアはフェイト達の元へ行った。

「礼を言われる事などか・・・いっぱいしてるじゃない・・・。」

「あつ、キルア戻ってきた。」

「話長いよ」キルア！早くご飯！」

「分かった、早く作ろう。」

キルアはキッチンに向かって行く。途中でキルアは振り返りフェイト達を見た。

「フェイト、アルフ・・・お前達といると楽しいな・・・ありがとう。」

「えっ？急にキルアどうしたの？」

「何でいきなりそんな事言うんだい？」

「ふ・・・何でもない・・・。」

キルアはキッチンに向かい料理を作り始めた。

「・・・キルア？」

フェイト達はキルアの作った料理を食べた後は寝て疲れを癒した・・・そして次の日。時の庭園にてフェイト達はジュエルシードをプレシアに渡しに行った。

「母さん、ジュエルシードを。」

「ちよつと待つてフェイト貴女に話しておく事があります・・・それを聞いたら貴女は傷つくと思う・・・だけと言わなければならぬ・・・。」

「母さん・・・？」

「フェイト・・・連いて来て・・・。」

プレシアはそう言いある部屋に向かう・・・隠されたあの部屋に・・・。

フェイト達はプレシアに連いて行きその部屋へと入った・・・そしてそこでフェイトは衝撃的なものを目の当たりにした・・・ケースの中に入っている自分と見た目が同じ少女を・・・。

「え・・・？私？」

「この子はアリシア・・・そしてフェイト・・・貴女はこの子のクローンなの・・・。」

「えっ・・・！？」

フェイトはプレシアの言葉に動揺が隠せなかった。

「私は最初は貴女をこの子の替わりとして産み出したわ・・・。」

「そつ、そんな・・・。」

「プレシア！アンタ！！」

アルフはプレシアの言葉に怒りを抑えきれなかった・・・だがキルアがアルフを止める。

「何で止めるんだい！キルア！！」

「話は最後まで聞くんた・・・。」

「私ね・・・最初は貴女の事が好きになれなかったの・・・。」

フェイトはその言葉に肩をビクツと震わせた。

「でもね・・・私貴女を心のどこかでもう一人の娘として見ようとしていた気持ちがあつたの・・・フェイト・・・貴女の私に対する貴女の愛情が余りにも純粹すぎたから・・・。」

プレシアはフェイトを優しく抱き締めた・・・。

「か、母さん・・・？」

「キルアのおかげでその自分の気持ちに気づけ素直になれた・・・大好きフェイト・・・。」

「母さん・・・うん私も母さんが大好き・・・今の母さんの気持ち・・・ちゃんと私に伝わったよ・・・。」

フェイトはプレシアに抱き締められプレシアが本当に自分をもう一人の娘として愛してる事を理解した。

「嫌いにならないでくれてありがとう・・・フェイト。」

「嫌いに何かならないよ・・・母さん。」

「プレシア・・・フェイトはちゃんと受け入れてくれたな・・・。」

キルアは今の二人を見て本当の意味で二人には壁がなくなつたと感じた・・・。

「所でジュエルシードとこの子は関係あるのかい？」

アルフはジュエルシードの事とアリシアが関係あるのかをプレシアに聞いた。

「あるわ・・・ジュエルシードはこの子を・・・アリシアを生き返らせる為に集めさせたのよ。」

「この子を生き返らせるだつて!？」

アルファは人を生き返らせるというところに驚きを隠せなかった。

「正確に言えばジュエルシードを使ってアルハザードに行きこの子を生き返らせる術を見つける為よ。」

「アルハザード？」

フェイトはアルハザードとは何だろうと思う？

「アルハザードは失われた技術が眠る場所・・・そこには人を生き返らせる方法があるのかもしれないのよ。」

「所でこの子を生き返らせたならフェイトはポイする気なのかい！」

アルフは怒り気味にプレシアにそう聞く。

「そんな事は私はしない・・・この子を生き返らせるのはこの子も含めて家族全員で暮らしたいからよ・・・。」

「本当だろうね！」

「アルフ、母さんは嘘なんかついてないよ。」

「・・・分かったよ、フェイト。」

「母さん・・・この子は・・・アリシア姉さんは私の事を受け入れてくれるかな・・・？」

「アリシアは妹が欲しいと言ってたから貴女の事を大好きになつてくれると思うわ・・・。」

「母さん・・・私を産んでくれてありがとう・・・たえ最初はアリシア姉さんの替わりに産みだされたとしても母さんが私を産んでくれたおかげでリニスやアルフ・・・それにキルアに会えたんだから！」

「フェイト・・・。」

プレシアはフェイトの言葉を聞いて胸が温かくなった・・・プレシアはむしろフェイトに感謝していた・・・アリシアの替わりではなく・・・フェイトになってくれてありがとう・・・。

「母さんジュエルシードを・・・私も早く姉さんに生き返ってほしい・・・それで色んな事を話すの！」

フェイトは姉に色々と話したい事を思い描きながらプレシアにジュエルシードを全部渡した。

「フェイト・・・ありが・・・！？おかしい・・・。」

「え？何がおかしいの？母さん。」

「ジュエルシードは全部で二十一個の筈なのに・・・二十二個あるわ！？」

「ほ、本当だ！？」

ジュエルシードは突然激しく光り輝いた。

「これは一体！？」

「フェイト！アルフ！プレシア！アリシアを連れてこの部屋から・・・いや、時の庭園から出るんだ！」

「逃げるならキルアも一緒に・・・。」

「俺はここに残らなければならない・・・何かが起こるなら俺はそれを止める！」

キルアは固い決意でここに残ると宣言した。

「で、でも・・・。」

「フエイト、キルアは大丈夫よ凄い人だから・・・だから今はこの部屋から出ましょう！」

「分かったよ・・・母さん。キルア！絶対に無事でいてね！」

「分かっている！」

「キルア！ご飯楽しみにしてるからね！」

「ああ！楽しみにしてる！」

フエイト達はキルアにそれぞれ声をかけるとアリシアの入ったケースを持って部屋から出る。

「何が起こる・・・！？」

その頃アースラにて・・・。

「艦長！凄まじい魔力反応がありました！」

「何ですって！？場所は特定出来る？」

「はい、何とか・・・魔力の上昇は止まりません！」

「もしか・・・ジュエルシードか！？」

クロノは凄まじい魔力の原因をジュエルシードだと推測する。

「ジュエルシード・・・！？じゃあその場所にキルアさんがいるんだ・・・キルアさん大丈夫なのかな・・・？」

なのは凄まじい魔力の反応と聞いてキルアの心配をした・・・因みになのはがアースラにいるのは時空管理局の仕事に興味を持ったからである。

「次元震や次元断層が起こるのか！？」



「とりあえず魔力反応がある場所へ向かってちょうだい、クロノ！」

「分かりました、艦長！」

「私もその場所に行つていいですか！」

「一般市民を巻き込むわけには……。」

「もしキルアさんの身に何か起こつてるとしたら私力になりたいんです！」

なのはは覚悟を決めた目でクロノにそう言った。

「クロノ……連れて行きなさい。」

「艦長!？」

「この子は揺らがない目をしているわ……本当に管理局の人員に欲しいわね……それに恋する乙女は強いなのよ？」

「り、リンディさん!？」

なのははリンディの言葉に顔を赤くして恥ずかしがる。

「……危なくなつたらすぐに逃げるんだぞ？」

「はい！」

クロノ達はチームを引き連れ時の庭園へ向かうのだった。

そして現在キルアはジュエルシードの光が収まりジュエルシード？を見ていた……。

「ジュエルシードが人の形になつた……!？」

「私ハジュエルシードガ集マリ願イヲ感じタ時、現レル者デス。貴方ノ願イヲ叶エタクバ私ヲ倒シテクダサイ……貴方が負けタ場合ハコノ世界ヲ全テ無二帰シマス……因ミニ戦ワナイ場合デモ貴方ノ負けデス。」

「何だと!？」

「人八願イヲ叶エル為ニハソレ相応ノリスクヲ背負ワナケレバイケマセン・・・ソノリスクハ必シモ自分ダケノモノトハ限ラナイノデス。」

「貴様を倒せばアリシアを生き返らせる事ができるのだな・・・貴様を倒しアリシアを生き返らせる!そしてこの世界も滅びさせはせん!行くぞ!」

「貴方ハ試練ヲ乗り越エラレルノデショウカネ?」

キラアとジュエルシードが一つになったものとの戦いが始まる・・・この戦いはどうなるのか!?

伝える真実・・・起こる異変！（後書き）

作者「無印編クライマックスもあとちょっとです！キルアはジューエルシードが一つになったものに勝てるのか！？ジューエルシードが一つになったものの力は一体どんなものなのか！？読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願いいたします！次回も見てください！」

## 激闘ジュエルシード（前書き）

キラアとジュエルシードの戦いが始まる！！

## 激闘ジュエルシード

フェイト達は現在屋敷の外へと避難していた。

「屋敷が崩れていくわ……」

「キルアは強いんだ……大丈夫……大丈夫。」

「キルア、無事でいて……。」

三人はそれぞれキルアの身を案じた。

そんな三人の所にクロノ率いるチームがやって来た。

「君たちこれは一体何が起こっているんだ!？」

クロノはフェイト達にそう聞いた。

プレシアがクロノの問いに答える。

「何が起きてるかは分からない……ただ……。」

「ただ？」

「とんでもないことが起ころうとしている事だけは確かよ……。」

プレシアはジュエルシードのあの反応を見てそう思った。

……その時屋敷が完全に消し飛んだ!

ドゴオオオン!!!

凄まじい轟音が鳴り響いた。

フェイト達は全員屋敷のほうを見た。

そこにはジュエルシードが一つになったものと戦っているキルアが

いた。

戦っているキルアがいたと言っても全員キルアの戦いのスピードを捉えきれてはなかった・・・そしてジュエルシードが一つになったもののスピードも・・・。

「何が起こっている・・・？  
戦闘をしているのか・・・？」

クロノが戦闘をしていると感じたのはキルアとジュエルシードがぶつかりあう姿が一瞬見えたからである。

当然それは彼等の戦いの数多く一瞬の一つでしかない・・・。  
ぶつかりあう姿が見えた時にはもうぶつかりあってないと思ってい  
いだろう・・・。

「全然追えない・・・キルアの動き・・・早すぎて気もよく察知で  
きない・・・。」

フェイトは目だけではなくキルアから気で相手の場所を探る術を学  
んでいたがこのスピードが相手では全く意味がなかったようだ・・・。

「キルアさん・・・加勢しに行かなきゃ。」

なのははそう言って戦いの渦の中に向かおうとするがフェイトが止  
めた。

「駄目だよ・・・この中の誰もキルアの戦いの手助けにならない・・・  
邪魔になるだけ。」

「フェイトちゃんはただ黙って見ているだけでいいの！」

なのははそうフェイトに言うがフェイトが拳を握りしめてるのを見て気づいた。

この子が一番力になれなくて悔しいのだと……。

「私達にできるのは安全な場所に避難してキルアの無事を祈る事だけなんだ……。」

「フェイトちゃん……。」

「避難するならアースラに来るんだ。」

クロノは安全な場所ということ自分達と一緒になら即座に向かえるアースラをフェイト達に提案した。

「でもアンタらは時空管理局だし……。」

アルフは自分達は時空管理局にとって罪になる事をしていたので捕らえる気なのでは？と警戒した。

「今は君たちを捕らえるとか言っている場合ではない！早く一緒に避難するんだ！」

クロノは今は捕らえる気はないとフェイト達に自分の意思を伝え早く一緒に避難するように言う。

「行こうアルフ……キルアの邪魔にならないためにも。」

「うん……。」

「母さんもいいよね？」

「勿論よ……時空管理局にはそもそもようがあつたの……。」  
「えっ？」

「何でもないわ……行きましょう。フェイト。」

こうしてフェイト達はアースラへと避難した・・・。

「むっ・・・（避難したようだな・・・フェイト達）。」

「彼等が避難シテクレタオカゲデ全力で戦エマスか？」

「分かっててフェイト達を狙わなかったのか？」

「私二八全力ヲ出シタ者ノ力ヲ受ケル義務ガアリマス。」

「変な所がしつかりしてるな・・・失敗した時のリスクは願いを叶える者以外も受けるのにな。」

キルアは妙な所で律儀な相手だと思った。

「全力ヲ出セナイママ失敗スルト悔イガ残りマスシ。」

「願いを叶えられなくても悔いが残ると思うが・・・。」

キルアは全力を出しても願いが叶わなければ悔いが残るだろうと思っただが・・・。

ジュエルシードはこう答えた。

「願イヲ叶エラレナカッタ時ノ悔イハ願イヲ叶エヨウトシタ者自身ノリスクデス。」

「願いを叶える者以外のリスクがでかすぎるな・・・。」

「人ノ心ニヨツテハ他ノ者ノリスクモ自身ノリスクト同ジデシヨウ



？」

「確かにな……。」

「喋ルノハココマデニシテ戦闘再開デス。」

ジュエルシードはそう言う超スピードでキルアに攻撃を仕掛けた。だがキルアはジュエルシードの放った鋭い拳はガードした。

ドゴオン！

（ガードはできたが重いな……。）

キルアはガードをしたもののガード越しにダメージが伝わって来た。実力が近い証拠であった。

「はあ！」

バキヤア！

キルアは攻撃をガードした姿勢から即座に蹴りを放った。ジュエルシードは吹き飛んでいったが……。

「今ノハイイ蹴リデシタネ。」

すぐにキルアの元へ戻ってきた。

（蹴りは、まともに入った筈だ……何故ケロツしている。）

キルアの蹴りがまともに入った筈のジュエルシードはケロツつとし

ていた。

まるで全くダメージがないようだ。

「技ヲ使イマシヨウ・・・ジュエルスプレッド。」

ドドドドドド・・・

ジュエルシードは自分の腕から大量の宝石の鋭い弾丸を撃ってきた。

「くっ、何て数だ・・・」

キルアはジュエルシードが放った弾丸の数に一瞬驚くがすぐに冷静に対処し弾丸の雨を掻い潜りながらジュエルシードへと近づいていく。

「ここだ！黒龍拳！」

キルアはジュエルシードの懐に入ると黒龍拳を放った。  
そして黒龍拳はジュエルシードにまともに入った。

ドガッ、ガッガッガッガッ！！

「オオウ！？」

ジュエルシードは黒龍拳はをまともを受けた・・・筈なのだが。

「凄イデス。今ノ技ハ今マデニ受ケタ技ノ中デ一番強カッタデスヨ。」

ダメージを負ったような反応を見せなかった。

(こいつ・・・！？)

キルアはさすがに自分の黒龍拳が通用しなかった事には動揺した。だがすぐに落ち着き戦いに集中する。

「単発が効かないなら連続で攻撃を叩き込むまで！」

「貴方が連続デ技ヲ叩キ込ム暇ナドアリマスカネ？」

そう言うとジュエルシールドは凄まじいスピードでキルアを攪乱しはじめる。

(早い・・・！)

「ジュエルソード。」

ジュエルソードは宝石でできた剣を作り出すとキルアに凄まじいスピードで斬りかかる。

「トラエキレマスカ？」

ザシュ！

「くっ。」

「マダマダ。」

ザシュ ザシュ ザシュ ザシュ！

「くっ……。」

キルアは攻撃を受けながらも動こうとしなかった。

「諦メマシタカ？ナラ止メトイキマシヨウカ。」

ジュエルシードは今までにないぐらいの力をこめキルアに対して剣を突き刺そうとした。

・・・キルアは避けようとはしない。

ズシュ！。。。。

アースラ艦内・・・

「はっ！？」

「どうしたんだい？フェイト。」

「キルア無事だね。。。」「

「なっ、何言ってんだいフェイト！？キルアは強いんだ無事に決まってるじゃないか！」

「うんそうだよね・・・無事だね。」

フェイトは口でそう言っても心の中でこう祈る。。。。

（キルア無事でいて。。。）

時の庭園内・・・

ジュエルシードにキルアは確かに突き刺された・・・だが。

「急所ヲズラサレマシタカ・・・デモ何故受ケタンデスカ？  
貴方ナラヨケラレタデシヨウコノスピードハ？」

ジュエルシードは今の攻撃は力を込めた分スピードが落ちたのでキルアが諦めていないなら避けられた筈だと思った。  
キルアは急所をずらした・・・つまり諦めていない者となるのだ。  
なのに何故攻撃をわざわざ受けたのだとジュエルシードは不思議でならなかった。

「こうするためだ・・・。」

ズドン！メキッ。

キルアはジュエルシードの腹に自分の拳を突き刺した。

「オヤ・・・？」

「貴様は俺よりもスピードは早かった・・・貴様を捕らえるにはこれが一番だと思ったのさ。」

「私ヲ捕ラエル為ニ貴方ハ危険ナ賭ケニ出タノデスカ？」

「貴様は異常に頑丈だ・・・そんな貴様を倒すには連続で攻撃を叩き込むしかない・・・スピードが早いから単発な強力な技はよけられるからな・・・。」

「確力ニソウデスネ・・・ソレニシテモ貴方ノ拳ハ抜ケマセンネ。」

メキツ・・・

「そう簡単に抜けてたまるか・・・ジュエルシード貴様を倒す！」

キルアはそう言うのと拳を突き刺したままジュエルシードに連続で攻撃を加える。

ガガガガガガガガガガガガガガガッ！

「オオウ！？」

「これで止めだ！」

そう言つてキルアは突き刺していた拳を引き抜き大技を放つ。

「修羅業波動拳！」

ドオオオン！！！！

「グッ・・・カッ・・・。」

ジュエルシードは粉々になり吹き飛んだ。

「終わったか・・・。」

アースラ艦内 ブリッジ

「艦長、巨大な魔力反応が反応が消えました！」

「そう、彼はやったのね。」

「フェイト、キルアは無事みたいだよ！」

「やっぱりキルアは強いから誰にでも勝てちゃうんだ！」

「キルア・・・私、貴方が帰ってきたら・・・。」

プレシアはキルアが帰ってきたらある事を決意していた・・・。  
しかしオペレータが再び慌て始めた。

「艦長！？再び魔力反応が！？」

「何故！？一度消えた筈なのに！？」

「キルア・・・無事だよね・・・。」

時の庭園内・・・

「残念デシタネ私ヲ倒セテナクテ。」

ジュエルシードは復活していた。

粉々になった筈だったが元通りになって。

「全くだ・・・。」

キルアは刺された場所を押さえながらそう言う。

「第二ラウンドトイキマシヨウカ？」

「くっ……。」

一度は倒したかに思えたジュエルシード……。  
だが奴は元通りに復活した。  
今の傷ついたキルアでたおせるのか！？

本当の戦いはこれからだ！



## 激闘ジュエルシード（後書き）

作者「ジュエルシードとの戦いは次回で決着！  
負傷したキルア。ジュエルシードの更なる力。

二人の戦いはどうなるのか！？

どうか読者の皆様！次回もこの小説を読んでください！」

## 激闘ジュエルシード 終結（前書き）

キラアとジュエルシードの戦い遂に終結！

## 激闘ジュエルシード 終結

一度はジュエルシードを倒したかに思えたキルア……。  
だがジュエルシードは復活した。  
そして再び戦いが始まる。

時の庭園内……

「魔力も元通りか……やはり魔力は減らないようだな。」

「エエ私ハ魔力減リマセンヨ。  
今ノ魔力ヲキープシ続ケマス。」

「粉々にしても復活するとはな……。」

「イヤー粉々ニサレル何テ初メテデスヨ。  
貴方ハ本当ニ凄イデス。  
私ガ今マデニ戦ッテキタ中デ一番デス。」

ジュエルシードはキルアを今までの中で一番だと褒め称える。  
だがキルアはそんな言葉を気にせず自分の今の状態を把握する。

（傷は痛む……だが戦えなくはない……気の量もまだある。）

キルアはまだ自分は戦えると判断した。  
だが消耗はしているのでさっきよりも苦戦する戦いになると思った。

キルアがそう思考をしているとジュエルシードが光輝き光をキルアに向かって放ってきた。

（しまった!?!）

キルアは光を浴びてしまったが……。

「……攻撃じゃない?」

キルアはジュエルシードの放った光を浴びたが全くダメージをおっていないかった。

キルアは今の光は一体と思考するが……。

「フムフム……貴方ノ記憶ニハ凄イ情報ガ、タクサンデスネ。  
魔法ヲ使ッテミマスカ。」

「記憶……魔法……まさか!?!」

キルアは今の光の意味を理解したがもう遅かった。

「天空ニ集マレ雷ヨ、雷ヨ荒ブル龍ノ形トナリテ我が前ニ立チハダ  
カル敵ヲ喰ラワン。ドラゴボルディアス。」

ジュエルシードはキルアに向かって魔導書の魔法を放った。  
キルアは予測していたため何とか避けることができた。

「やはり今のは記憶を読む光……。」

「エエソノ通りデスヨ。」

ジュエルシードはキルアの記憶を読み魔導書の魔法を覚えてしまったようだった。

（中級と上級を読んでなくてよかった・・・。）

キルアは初級の時点で高レベルだったため中級と上級は読んでいなかったようだった。

もし読んでいたら中級と上級の魔法も放たれていたのだ。

（だが初級でもあの魔導書の魔法が強力である事に変わりないか・・・）

キルアは初級でも強力な事に変わりはないので気を引き締める。

「次ハコノ魔法デイコウ。

全テヲ切りサク裂ク鋭キ風ノ双剣、ソノ鋭キ刃デアラユル敵ヲ薙ギハラエ、ウィンダルティードブレイジ。」

ジュエルシードが魔方陣を描き呪文詠唱をおえると鋭き風の双剣がキルアに襲いかかった。

「くっ、業波動拳！」

キルアは片方を避けもう片方は業波動拳でかきつけた。

「くっ・・・。」

「魔法八避ケラレテカキケサレマシタガ気ヲ消耗シテシマイマシタネ。」

ジュエルシードの言う通りキルアはダメージ受けはしなかったものの業波動拳を放ったことで気を消耗してしまった。

魔力が減らない敵に対して下手に消耗するのはまずい・・・キルアはそう思っていたからこそ最初ジュエルシードを危険な賭けをして一度粉々にしたのだ。

無駄になってしまったが・・・。

「最初ノ貴方ト私ノパワーノ差ハホボ互角デシタガ今ハ貴方ガ下デスネ。」

サテドウ逆転シテクレマスマスカ？」

ジュエルシードはキルアはどう逆転するか期待をするような発言をした。

挑発だとは思うが・・・。

（無駄に気は使えない・・・なら肉弾戦でいくしかない・・・効果的ではないだろうが。）

キルアは気を放つ技は控え肉弾戦を重視することに決めた。

「はぁ！」

キルアはジュエルシードに近づき拳を放つがジュエルシードは避けようとしなない。

ギイン・・・。

「魔導書の防御魔法か・・・くつ。」

キルアの拳は魔導書の防御魔法によりジュエルシールドにはとどかなかった。

「初級ナノニ凄イ魔法バカリデスヨネ。  
アノ魔導書。」

（肉弾戦も通用しないのか今の状態では・・・どうすれば・・・。）

キルアは悩む気を放つ技は迂闊に放てない。  
肉弾戦は通用しない。

何よりも奴は粉々にしても再生してしまうと。

（最初に残らずかき寄せば・・・だが。）

キルアは完全にかきけしてしまったら願いが叶わないのではと躊躇してしまったのだ。

「カキケシテモ私ハ倒セマセンヨ？」

ジュエルシールドはキルアの心を読んだかのようにそう答えた。

「貴方ハ私ヲ最初ニカキケセバ倒セタト考エテイルンデシヨウ？  
ダガソレハ意味ガナイ考エデスヨ。」

（ならこいつはどうやって倒せる・・・。）

キルアはかきけしても無駄だと聞いてジュエルシールドを倒す方法について悩んだ。

「私ヲ倒ス方法ハ貴方ノ中ニ、ニツアリマスヨ。」

ジュエルシードは何故かキルアに助言めいた言葉を言う。

キルアはその言葉に対して一体奴は何を考えていると警戒した。

「一ツハ教エテアゲマスヨ。」

一ツハ殺意ノ波動デス。

貴方ノ殺意ノ波動ハナニモカモヲ・・・死ガ想像デキナイカラ殺セナイトカイウ奴デモ普通ニ殺セマスヨ？」

ジュエルシードは自分を倒せる力の一つを殺意の波動だとキルアに伝えるが。

キルアは当然、殺意の波動を使う事を拒否する。

「殺意の波動は使わない・・・貴様の言うレベルは俺が殺意の波動を全開にした状態だろう。

貴様に勝っても自分に負けてしまっているし俺は殺意の波動に頼りたくない。」

自分が殺意の波動に頼ったがゆえの暴走をキルアは想像すると絶対に頼らないと心にきめる。

「暴走ガ嫌デスカ？アノ時ノヨウナ悲劇ハモウ嫌ダカラ？」

ジュエルシードはキルアの記憶を読んだためキルアの過去が分かるのでそんな発言をするが。

キルアは全く表情を崩さずにこう言った。

「ああ、その通りだ俺は暴走して新たにできた大切な人達を傷つけるのが怖いんだ。」



キルアはそう言った。

キルア自身の嘘一つない心からの言葉だ。

「自分ノ心ニ嘘ヲツイテ強ガリマセンデシタネ。

本当ノ意味デ貴方ハ強い人ダ。

ダカラモウ一ツノ答エニモ氣ツイテホシイデスネ。」

ジュエルシードはもう一つの自分を倒す答えに気づいてほしいとキルアに言う……。

キルアは何故ジュエルシードは答えに気づいてほしいなどと言った？

……と思った。

「才喋リガスギマシタネ……戦イヲ再開シマショウ。」

ジュエルシードは再び戦闘体制に入る……。

ジュエルシードが戦闘体制に再び入るのを見るとキルアも身構える。

（次はどう来る……？）

ジュエルシードは次はどのような攻撃を放つ？……と警戒するキルア。

ジュエルは詠唱をせずに魔方陣だけを描き始めた。

（あれは！まずい……あれを成功させたら大技を食らってしまう……今のうちにたたみかけなければ！）

キルアはあの魔方陣がある術の発動魔方陣であることが分かったた

めジュエルシードが魔方陣を描くのを食い止めようとする。  
しかし・・・

「邪魔ハ、サセマセンヨ？ジュエルファントム。」

ジュエルシードがそう呟くとジュエルシードの分身が現れキルアに向かっていく。

キルアはそのジュエルシードの分身をすぐに倒しジュエルシードの元へ向かいたいがジュエルシードの分身一人一人の力はジュエルシード本体よりも劣るが数が多くて先には中々進めない。

「くっ・・・仕方ない修羅波動拳！」

キルアは拳や蹴りだけでは時間がかかりすぎるので修羅波動拳でジュエルシードの分身をかきつけた。  
しかし時はすでに遅し。

「魔方陣完成デス。結界魔法ダストリアルプリズン。」

ジュエルシードは結界魔法を発動させ結界の中にキルアを閉じ込める。

「サテコレデアノ魔法ガ当たりマスネ。デハイキマスカ。」

灼熱ノ業火ヲ纏イタル魔神、確實粉碎ノ斧持チ手現レヨ、魔神ヨソノ斧ヲフルイテ敵ヲ粉碎セヨ。イグニティアジンアクセウ。」

灼熱の業火を纏いし魔神がキルアに向かって炎の斧をふりおろす。

スピードが遅い魔法なのだがキルアは結界に閉じ込められているため回避することができなかった。

ゴオオオオン！！！！

結界は粉々に碎け魔法はキルアに確実にヒットした。

スピードが遅い分、威力が異常に高い魔法なのでキルアが大ダメージを受けるのは必須だった。

「はぁ……はぁ……がふっ。」

キルアはまだ生きていたが今の一撃で気を大量にけずられた。

今のキルアは体のあらゆる部分に火傷を負い胴着もボロボロになっていた。

しかしキルアはまだジュエルシードを倒す事を諦めてはいない。

何故ならキルアの目はまだ勝つことを諦めていない者の目をしていたからだ。

「マダ諦メテハイナイヨウデスネ？」

「これぐらいで諦めてたまるか……これ以上の窮地でも俺を救ってくれたあの人は諦めなかった……だから俺はこれぐらいで諦めはしない！！」

自分を救ってくれた人はこれ以上の窮地でも諦めなかった。

だからキルアは諦めないと言っているがキルアが諦めない理由はそれだけではない。

「それに俺が負けたらこの世界が……フェイト達が貴様に消され

てしまうからな・・・。」

そうキルアは自分に出来た新たな大切な人達の為に負けられない。

その気持ちがキルアを諦めさせない一番の気持ちだ。

「ソウデスカ・・・大切な人達ヲ守リタイナラ私ヲ倒シテミナサイ。」

「言われなくても！」

キルアは力を振り絞りジュエルシードに向かっていく。

（オヤ？サツキヨリスピードガ・・・）

ヒュッ、ガアン！

キルアの拳はジュエルシードの防御魔法を突き破りジュエルシードを捉えた。

「パワートスピードが最初ヨリ上ガッテイル・・・マサカ？」

「俺の記憶を読んだから分かっているようだな。」

「貴方が殺意ノ波動ヲ抑エルタメニマワシテイタ貴方ノ気ヲ戦闘ニマワシタノデスカ？」  
「ソナナ事ヲスレバ貴方ハ・・・。」

「今の俺は力ずくで殺意の波動を抑える必要はない・・・心の力で

全てを抑える！」

キルアは今まで修行によって培った気の力で殺意の波動を抑えていた面があった……だが今の彼にはもうそれは必要なくなったようだ。

「フフ……イイデショウ。ナラ貴方ハ最高ノ私ノ技デ倒シマシヨウ。」

「何……？」

ジュエルシードの体が激しく光輝く……。

「これは……」

「ジュエル……」

「まずい！？」

キルアは直感でこれが異常に危険な技だと判断しすぐさま避ける体制に入る。

「ジェノサイズー！！」

ブイイイインー！！

ジュエルシードの体から尋常じゃない密度の魔力の光線が放たれた。

しかしキルアは避ける体制に入っていたためその技を避ける事が出来た。

「あれは当たったらヤバイな……。」

キルアはあの技に当たれば自分は確実に負ける……そう思った。

キルアはジュエルシードの放つ光線を見ていたがすぐさまにジュエルシードの方へと視線を向きなおした。

「避ケラレマシタカ。」

「予備動作があれだけ大きければな。」

「デスヨネー！デモアレガ私ノ最高ノ技ナンデス。」

「最高の技とて当たらなければ無意味。」

「デハ他ノモ技モオリマゼマシヨウ。ジュエルスプレッド。」

「その技はもう効かない！」

キルアはジュエルスプレッドはもう見切っていたので宝石の弾丸の雨を掻い潜りジュエルシードに鋭い突きを食らわせる。

しかしジュエルシードは攻撃を受けても全く消耗しない。

キルアはすぐさま距離をとった。

迂闊に近づいたままなのは危ないからだ。

「攻撃してもやはり効かない……奴に弱点はないのか？」

キルアはジュエルシードの弱点は何かと思考するが。

「考エゴトシテルト危ナイデスヨ？」

ジュエルシードが激しく光輝きジュエルジェノサイズの発射体制になっていた。

「くっ。」

キルアは思考を止めすぐさまにジュエルジェノサイズを避ける体制に入る。

「ジュエルジェノサイズ！！！！」

ジュエルシードは再びジュエルジェノサイズを放つがキルアはそれを避ける。

キルアはジュエルジェノサイズを避けたあとジュエルジェノサイズを放っているジュエルシードを見てあることに気づく。

（奴はあの技を放っている時・・・色が変化してる？）

そうジュエルシードはジュエルジェノサイズを放っている時、体の色が青色から灰色へとわずかな間だが変えていたのだ。

そして技を放ちおわると体の色の変化はなくなり青色のままだ。

（・・・・。）

キルアはあることを思い出していた。

ある人が戦いについてあるアドバイスをしたことを。

『なあ、キルア。普通に倒せねえ奴がよ、とんでもない技を放ってきたらどうする?』

『一度退いてその相手を倒す方法を調べます。』

『いや、そうじゃなくてさ・・・退けない戦いの場合だよ。』

『・・・負けてしまうのでは?』

『あのなあ・・・技に突っ込んで相手に向かうんだよ。』

『何故自ら大ダメージを受けに?』

『普通に倒せねえ奴は何か大技放ったあと特別な隙ができるかもしれないじゃねえか。』

『隙ができなかったら?』

『そんなときゃそんなときだ。』

『・・・・・・・・。。』

あのアドバイスはかなりあれだったとあの時は思ったが今は感謝するキルア。

(あの色の変化は別に意味などないかもしれない・・・だが賭け



るしかない。」

ジュエルシードがあの手を放っている時に攻撃を仕掛けるには攻撃を受けながら突き進むしかない。

避けてから攻撃をしようとすれば途中で技を中断しそれ以降技を使わないかもしれないからだ。

（チャンスは一回・・・奴の体が灰色の時に技を叩きこむ）

そう今のキルアの最高の技・・・少し前までは殺意の波動を使わずとも放てたが殺意の波動に響いたあの技を・・・。

今ならキルアはあの技を使っても全く殺意の波動に響かないだろう。

「マタタラナイカー。デモ私ハ魔力無限ダシイ力。  
デハモウ一回。」

ジュエルシードの体が激しく光輝く・・・ジュエルジェノサイズの体制だ。

キルアはそれを見るとジュエルシードに突っ込んでいく。

（技ニ当タリニクルナンテ・・・自棄ニナリマシタカ？ソレトモ気ツイタノカ・・・デモタイミングヲアワセラレマスカネ？）

ジュエルシードの体の輝きが最大まではげしくなると。

「ジュエルジェノサイズ！！！！」

ジュエルシードは最高の技を放つ。

キルアはジュエルシードが放つ魔力の光線を潜り抜けジュエルシードに近づく。

（ぐっ・・・凄まじい威力だ・・・意識が・・・だが！）

キルアは凄まじい魔力の光線の中をどんどん進む。

（負けられないんだ！！！）

キルアは遂にジュエルシードのすぐ近くまできた。  
そしてジュエルシードが灰色になった瞬間に攻撃を仕掛けようとする。

（・・・今だ！瞬獄殺！）

ドガガガガガガガガガガッ！キーン！！！！

キルアはジュエルシードに対して瞬獄殺を放つ。

ジュエルシードに瞬獄殺は決まったが果たして本当に灰色の時にやれたのか・・・。

もし決まっていなかったらこの世界は終わる・・・。

アースラ艦内・・・

「艦長！魔力反応が消えました！」

「今度こそ終わったの・・・？」

リンディは一度魔力反応が消えても一回再び反応が復活したので警戒する。

しかしいつまでたっても魔力反応は復活しない・・・。

「やった・・・キルアが勝ったんだ！！」

フェイトはキルアが勝ったと喜ぶ。

同時にキルアが帰ってくると思うとさらに嬉しくなった。

そして当のキルアは・・・

時の庭園内・・・

「復活しない・・・完全に勝ったんだ・・・。」

キルアは粉々になったジュエルシードの前に極限まで疲労した状態で立っていた。

「・・・願いはどうなるんだ？」

ジュエルシードは勝てば願いが叶うと言ったが倒しても特に何も起

こらない・・・と思っていたら粉々になったジュエルシードが光った。

「まだ終わってないのか・・・!？」

キルアはまだ戦いが終わっていないと思い身構えるがジュエルシードは復活をせずに粉々になった欠片から光が離れその光がキルアに語りかけてきた。

「オメデトウゴザイマス。貴方八見事二試練ヲ乗り越エマシタ。」

「貴様はジュエルシード・・・なのか？」

「アツ、ハイソウデス。」

光はキルアに自分がジュエルシードである事を伝える。

キルアはジュエルシードがおめでとうと言ったのが気になった。

「おめでとうと言ったがまるで願いを叶えて欲しい様な口振りだな？」

「ハイ、叶エテ欲シカッタンデスヨ。」

ジュエルシードはキルアの問いにそう返してきた。

キルアはそれを聞いてジュエルシード更にある事を聞く。

「では何故願いを無条件で叶えないんだ？」

「私ガ、ソウ作ラレタカラデス。」

無条件ニ様々ナ願イヲ叶エルヨウニスルト多大ナ歪ミヲ生ムカラデス。」

キルアはそのジュエルシードの言う多大な歪みに少し心当たりがあった。

「なるほどな・・・それで願いは？」

「ハイ、一ツダケ叶エテサシアゲマシヨウ。」

「では、アリシアを・・・プレシアの家族を生き返らせてくれ。」

キルアがそう言うのとジュエルシードはキルアにある事を聞いた。

「貴方ノ家族ハイインデスカ？ 試練ヲ乗り越エタノハ貴方デス。貴方自身ノ為ニ願イヲ叶エナクテイインデスカ？」

ジュエルシードはそう言うがキルアは迷いのない目で再びジュエルシードに言う。

「アリシアを生き返らせてくれ。」

「・・・インデスカ？」

「俺はプレシアに家族を取り戻して欲しいんだ。それに父も妹も俺がそう願う事を望んでいるだろう。」

「・・・確カニ貴方ノ父サント妹サンハ、ソウ望ムデシヨウネ。貴方ノ記憶ヲ見タカラ、オ二人ガドウイウ方カハ分カリマス。」

「分かっているなら何故無駄な質問を？」

「貴方自身ノ心ヲ確カメタカツタノデス。

願イヲ叶エルノハ貴方デスカラ。

貴方自身が、プレシアサン達家族ノ幸セヲ一番願ッテイルノデスネ。

」

「俺自身が一番か・・・そうだな。」

キルアは確かに父がとか妹がとかの前に自身が一番そう望んでいる事を理解する。

「デハ願イヲ叶エマシヨウ。」

ジュエルシードは願いを叶える。

そうプレシアの家族を取り戻すと言う願いを・・・。

アースラ艦内・・・

「アリシア!？」

プレシアはアリシアが入ったケースが光輝くのに驚いた。

そして光が収まるとケースからアリシアが消えていた。

「アリシア!？何処!？」

プレシアはアリシアの姿がケースからなくったのに慌てる。

プレシアはフェイトが自分の後ろを指差していることに気づく。

「か、母さん……。」「

「どうしたのフェイト？」「

「うっ、後ろ……。」「

「後ろ？」「

「アリシア姉さんが立ってる。」「

「えっ！？」「

プレシアが後ろを振り向くと綺麗な服を着たアリシアが立っていた。

「お母さん……。？」「

「アリシアー！」「

プレシアはアリシアの元へかけより優しく抱き締める。

「アリシア……。生き返ったのね。」「

「お母さん……。うん……。私は今ここに生きて居るよ……。」「

アリシアはプレシアを優しく抱き締め返した。

「アリシア姉さん。生き返ってよかったね……。」「

フェイトはアリシアが生き返ってよかった。

これで姉さんと色んな話ができると思った。

フェイトがそう思っていると後ろから誰かが話しかけてきた。

「フェイト、私もいますよ？」

「この声は！？」

フェイトが後ろを振り向くと大きな光があった。  
その大きな光が止むと……。

「リニス……？リニスなんだね！」

「ええ、リニスですよ。フェイト。」

プレシアもアルフも久しぶりですね。」

プレシアとの使い魔契約を解除して消滅したはずのリニス……彼女がフェイトの目の前にいた。

「私もジュエルシードの力のおかげで生き返ったんですよ。」

「でも、リニス……貴女何故使い魔の時の姿なの？」

プレシアはリニスが生き返るとしたら元々の普通の猫の姿になるのでは？と思ったが。

「ジュエルシードのサービスですよ。」

アリシアの服もそうです。」

「ジュエルシードのサービス？」

「ジュエルシードは結構気前がいい人でしたよ。」

ジュエルシードって気前いいのか……とリニスの話を聞いた皆は思った。



「そろそろ彼も来ますね……。」

リリスがそう言うのと皆の前に光が現れた……光が収まるとキルアがその場にいた。

「キルア！無事だったんだね！」

「ああ、体はボロボロだけどな……。」

「じゃあ早く治療しないと!？」

フェイトはキルアを治療しなきゃと意気込む。

「プレシア、ちゃんとアリシアは生き返ったか？」

「ええ生き返ったわよキルア……。」

「そうかよかった……。」

キルアはアリシアが無事に生き返った事を確認するとその場に倒れた。

「キルア!？」

「大丈夫だ……安心したら気が振けただけだ……。」

キルアは倒れたが気を失ってはいなかった。

「キルアさん。プレシアを救ってくれてありがとうございます。」

「……誰だ？」

「初対面でしたね私はリリス。プレシアの使い魔です。」

私は一度消滅をしましたが貴方のおかげで今ここにいますよ。」

「どういことだ・・・？ジュエルシード。」

キルアがそう言うのと光が現れたその光はジュエルシードだ。

「ダッテ貴方ハ、プレシアサンノ家族ヲ取り戻シテ欲シイト願イマシタカラ、リニスサンダッテ家族デショウ？」

「ふ・・・なるほどな。」

キルアは少し笑いながらなるほどなと理解した。

「貴方、今その光をジュエルシードと言ったけど・・・」

リンディはキルアが光に対してジュエルシードと言ったことが気になってキルアに光の事を聞こうとするが。

「私ハ、ジュエルシードデスヨ。」

ジュエルシード自身が先に答えた。

「アッ、因ミニ私モウスグ消エマスカラ。」

そのジュエルシードの言葉を聞いたユーノはジュエルシードの力はこの世からなくなると安心しキルアに感謝した。

「約束を守ってくれてありがとうございます。キルアさん。」

「別に俺は礼を言われる事はしてないさ・・・。」

「しかしこの人がジュエルシードを集めなければあんな異変は起こらなかったんじゃない？」

一人の局員がそう言うが。

「ソレハドウデショウカ？」

私ハ集メラレ願イヲ感ジルト一ツニナツテ発動シマスカラ貴方達ガ集メテモ異変ハ起キマシタヨ？」

そうジュエルシードが局員に向かって言った。

「では僕達が集めていた場合は・・・。」

「私ニ敗レテコノ世界ガ消エテマスネ。」

クロノはそれを聞くとゾツとなった。

ジュエルシードから感じた魔力は大きいということは分かるが自分達の理解を越えて大きかった。

自分達が集めていたら確実に手におえない事をクロノは理解していた。

「それじゃあジュエルシードの件を解決したのはキルアさんだね。」

そうなのは言うつと局員の者達は全員頷くしかなかった。

「世界を守ってくれてありがとうございます。」

キルアさん。」

リンディがキルアにお礼を言う。

成り行きはどうであれキルアは結果的に世界を守ったのだから。

「最初、フェイトにジュエルシード探す協力を頼まれた事・・・それが今に繋がったただけなんだがな。」

「じゃあ世界を守ったのは、ある意味フェイトだね！」

アルフがそう言うときルアは軽く笑みを浮かべながら確かにそうかもな・・・と思った。

「世界を守ったのは私じゃなくてキルアだよ。」

「きっかけを与えたのはフェイトだ。だからフェイトが守ったと言っても過言じゃないな。」

「キルアまで。」

「世界を守った妹がいるなんてお姉ちゃんとして鼻が高いよフェイト。」

「アリシア姉さんまで・・・あれ妹って？アリシア姉さん私の事・・・。」

「知ってるよ天国から見てたから・・・私の可愛い妹フェイト。こんなにちは、そしてこれからよろしくね！」

アリシアは笑顔でフェイトにそう言った。

フェイトはアリシアの言葉からアリシアが自分を受け入れてくれる事が分かった。

「アリシア姉さん。ありがとう・・・うん、よろしく姉さん！」

フェイトも笑顔でアリシアに言葉を返した。

プレシアはそんな二人の微笑ましい光景を見て笑っていた。

自分にとって最高に幸せな光景だったから……。

プレシアはキルアも無事に帰って来たので決心したあることをする事にする。

「時空管理局の艦長さん。」

「何でしょうか？プレシアさん。あと私はリンディでいいですよ。」

「リンディさん……私、自首します。」

プレシアのその言葉にフェイトは驚いた顔をする。

「母さん!？」

「フェイト……私がジュエルシードを集めた事は結果的に死人や大きな被害は出さなかったわ……でも立派な犯罪なの。」

そう確かにロストログアを勝手に集め利用することは犯罪になってしまう。

「でもそれなら私だって集めるのを協力……」

「フェイト、貴女は私に集めさせられた。そう言う事でいいの……リンディさん。どうかフェイト達の事は……。」

「分か……」

「ちよっと待ってくれ。」

キルアがプレシアとリンディの会話に割って入った。

「ジュエルシードを最終的に利用したのは俺だ。

願いを叶えたからな・・・プレシア達は俺が願いを叶える為に利用された被害者だ。」

「キルア貴方は何を言ってる!？」

「プレシア。お前がフェイト達の側から離れるのは駄目だ・・・フェイト達が寂しがるだろう?」

キルアはプレシアがフェイト達から離れるのは駄目だと思い自分が罪を被ろうとする。

キルアはリンディの方を見る。

「俺が世界を守ったと言うなら俺が罪を全て背負う事でプレシア達を無罪にしてくれ頼む・・・。」

「・・・分かりました。上層部に掛け合ってみます。」

「艦長!？」

「クロノ、何か言いたいことが?」

リンディはクロノが上層部に掛け合う事に反応したので何か言いたいことがあるのかと聞く。

「・・・僕は彼等が無罪にしてもいいんじゃないかと思っています。」

リンディはクロノの意外な発言に驚いた。

「ロストロギアを集め力を利用する事は確かに罪です。」

しかし僕達がジュエルシードを集めていたとしたら世界は滅んでい  
たんです。

彼は成り行きはどうであれ世界を守りました。

そしてその彼が罪を背負うのはおかしいと思います。

世界を守った彼が彼女達の無罪を望むならそれを配慮していいの  
はないかと僕は思います。」

クロノがそう言うときリンディは、ふっと笑いこう言う。

「クロノ、貴方変わったわね・・・私はそもそも彼等を全員無罪に  
する気で上層部に掛け合うつもりです。」

リンディは上層部に最初から無罪にする為に掛け合う気だった。

それはキルア達がどう考えたって悪人ではないからだろう。

「世界を守ってくれた人とその人の大切な人達を罪人にしてしまっ  
ては私も寝覚めが悪くなっちゃうしね。」

「リンディさん・・・ありがとうございます！キルアさん達を無罪  
にしてください。」

「なのはちゃん。まだ気が早いわよ。」

頭の固い上層部の連中をどうにかできるかしらね・・・。」

リンディは無罪にするつもりで上層部に掛け合うとは言ったものの  
頭の固い上層部をどうにかできるだろうかと悩んだ。

「まあ、とりあえず貴方達は自宅待機してて。」

リンディはキルア達にそう言った。

リンディがキルア達を拘留せずに自宅待機と言つのはキルア達を信頼しての事だろう。

「・・・いいのか？」

「貴方達は自宅待機中に逃げたりしないでしょ？」

「それはそうだが・・・」

「いいから帰ってゆつくり休みなさい。」

「・・・分かった。」

キルアがリンディの言った自宅待機を了承するとジュエルシードがキルアに話しかけてきた。

「ソロソロ、オ別レデスネ。」

キルアサン私ノ願イヲ叶エテクレテアリガトウゴザイマス。」

「お前の願い？そんなもの叶えたか・・・？」

キルアはジュエルシードの願いなんか叶えたかと思つたが、ジュエルシードがその事について答える。

「私ノ願イハ願イヲ叶エテアゲルコトデスヨ。」

ダツテ私ハ願イヲ叶エルタメニ作ラレタモノデスカラ。」

「そうか・・・。」



「デハ、サラバデス。」

そう言うジュエルシードは消えていった。

「・・・完全に消滅したな。」

キルアはジュエルシードは、別に悪い奴ではなかったなと思った。

だってサービスと言い負傷した自分をここまで運んでくれたのだから。

「キルア。帰ろう私達の家へ。」

「ああ、そうだな・・・と言いたいが体が負傷していて動けないな・・・。」

キルアはジュエルシードとの戦いのダメージが体に溜まって動けなくなっていたため歩けなかった。

「仕方ないねえ・・・アタシが抱えるよ。」

「すまないな・・・。」

「キルアさん。帰ったら私とお話してくれる？」

私、フェイトがキルアさんと楽しそうに話しているのを見たら一緒にお喋りしたくなったんだ。」

「別にいいが・・・俺と話すのは、そこまで楽しくないと思うが？」

キルアはそうアリシアに言うがアリシアは笑いながらキルアにこう

言う。

「話してみなきゃそれは分からないよ？」

「そうか？」

「でもまずは傷を癒さないとなキルア。」

「確かにな・・・フエイト。」

「キルア。」

「何だ？プレシア。」

「本当に・・・本当にありがとう。」

「別に礼を言われるほどの事はしていないさ。」

「そんな事はないわ・・・。」

「・・・それより帰って俺は休みたいな・・・。」

「ふふ、ボロボロだね。」

「君達そろそろ送るぞ。」

クロノはキルア達をそろそろ家であるマンションがある世界に送ろうとする。

「ああ、分かった。」

「あのキルアさん！」

キルア達が帰るとすると、なのはがキルアに喋りかけてきた。  
「ユーノも隣にいる。」

「あの私を……」

「僕を……」

「何だ？」

「「鍛えてください！！」」

二人の突然の頼みにキルアは少し驚く……そしてキルアは何故二人が自分に鍛えてほしいのかを聞く。

「私、強くなりたいんです。キルアさんみたいに……」

「僕もです。キルアさんみたいに強くなれば色々なものを守れるから……」

「……分かった。別に構わないぞ二人とも……ただし無罪になつただけだな……」

「キルアさん達は無罪になります！」

「キルアさんは寧ろ世界の危機を救ったんですから。」

「ふ……そう言ってくれると嬉しいな……またな二人とも。」

「「はい！」」

キルアは二人にまたなと言つとフェイト達とともに家へと帰って行った。

キルア達は果たして無罪になるのだろうか？

## 激闘ジュエルシード 終結（後書き）

作者「無印編の終わりも本当に近くなりました・・・。

無印編が終わったら次のA's編では凄い事を最初に起こすつもりです。

それが何かは言えませんが・・・。

この小説を読んでもくれた読者の皆様！

どうか次回もこの小説を読んでください！

これからよろしく願います！」

## フェイトのお礼（前書き）

作者「投稿やっどできました。無印編最終話です！」

## フェイトのお礼

ジュエルシードとの激闘から一週間がたった。

そして現在そのジュエルシードと戦い結果的に世界を守った、次元を渡り歩く旅の格闘家キルアは：

「ふっ、はっ。」

軽く体をならしていた。彼は激闘のあとベットのの上に縛りつけられていたからである。本当は激闘があった次の日に。

「ちよつと修行に行ってくる。」

などと言い修行に即座に行こうとしたのだが

「なに言ってるのキルア！まだ傷は治りきってないでしょ！」

「アンタ死ぬ気かい！？」

「昨日今日でいくらなんでも無茶よ！？」

「無理はダメだよ？キルアさん。」

「それにそのボロボロの胴着で外に行くんですか？ダメですよ不審者と間違われますから私が同じのを作ってあげますからそれまで休んでください。」

などと言われたあとに縛りつけられたのだ。あとリニスは胴着を作るのをわざと一週間もかけた。キルアを休ませるために。

「ふう…体は鈍ってないか…むしろあの一戦で成長したようだ…そろそろ帰るかあまり長くすると叱られるからな。」

キルアは笑いながらそう言った。帰りを待つものがいるのは嬉しいのだろう。

そしてキルアが帰るとアリシアが飛びついてきた。

「お帰りキルアさん！無茶してないよね？」

「無茶はしてないが…アリシアが飛びついてきてあたった場所が傷口…なんだが…？」

キルアは痛む箇所を押さえた。するとアリシアは慌ててすぐに謝る。

「ごっ、ごめんなさい！」

「大丈夫だ。もう痛みは引いたからな。それにこれぐらいは謝られるレベルじゃないさ。」

キルアはそう言ってアリシアの頭を軽く撫でた。  
アリシアはくすぐったそうに目を細めた。

「そろそろかな…。」

キルアはそうボソリと呟いた。その言葉は時空管理局での自分達の処分をどうするかをリンディがそろそろ言いにくるだろうという意味だろう。

「俺は罪に問われも構わんが…プレシア達は…そう言えば…？」

キルアはあることを思い出す。困ったときに開けると言われたものの事を…。

キルアはすぐに自分の荷物袋の元へ向かう。アリシアもなんとなく



ついて行った。

「あつた…。」

キルアが荷物袋から取り出したもの…それは『天才科学者発明セツト』と書かれた箱だった。

「パスワードは確か…『僕超天才科学者』」

そうキルアが入力すると箱はカチツと音をたて開いた。

「すごく変わったパスワードだね…？」

「確かにあれなパスワードだが…本当に天才科学者なんだこれを作ったのは…。」

アリシアのパスワードの事を言われるとキルアはそう返した。確かにこれを作ったのは天才科学者であるから…。

「中には何があるの？」

「T・H A K A S E の技術ノートと鞘花の技術ノートか。あとは…色々な発明とパーツか…。」

「そのノートなに？面白い事が書いてるの？見せて！」

アリシアがそう言うのとキルアは鞘花のノートだけを渡した。

「そっちのノートは見せてくれないの？」

「アリシアは見ない方がいい…。」

アリシアはキルアが真剣な顔でそう言うものだからもう一つノートの事は気にせず薔花のノートを読み始めた。

「このノート…手紙が挟まってるな…でもこの手紙は『キルアは開けるなこのノートを渡す相手に開けさせる』…と書かれているな…何でだ？」

キルアがそんな事を考えていると玄関から聞き覚えのある声が聞こえたのでノートを持ったまま向かった。

キルアが玄関を開けると表情を暗くしたリンディがいた。

「どうした…。」

キルアはどうしたかを聞くが大体の事は分かっていた。そしてリンディの声が聞こえたのでプレシア達も玄関に集まってきていた。

「リンディさん…やはり駄目でした…？」

そうプレシアがリンディに聞くと無言でリンディは首を縦に振る。

「そう…ですか…。」

プレシアは暗い表情になる。自分達が無罪になる確立が低い事は分かっていた…だがやはり希望は抱いていたのだ…しかしその希望はうち砕かれてしまった。

しかし…。

「リンディ、少しずるい手段かもしれんが…これを交渉の道具にできないか？」

キルアはリンディにあのノートと手紙を渡す。

「これは…？」

「天才科学者の技術ノートだ。間違いなく時空管理局のもちえる技術よりも遥かに上のものが書かれている。あと手紙は上層部にとりあえず渡してくれ。」

リンディはノートを開き目を通す…すると驚愕の表情を見せる。やはりあのノートの技術は凄まじいものようだ。

「凄い…この技術は上層部は間違いなくほしがるわ…確かに交渉の手段に使える。………使えるけどページごとに『馬鹿な人にも分かるように説明すると』と書かれているのが気になるわ…。」

「………すまない…そういう科学者なんだ…。」

キルアはノートに書かれている失礼な事について謝る。書いた科学者が明らかに悪いが一応仲間だからだろう。

「これを持ってもう一回上層部の所へ行ってくるわ！」

リンディは上層部の元へ向かって行った。

「うまくいくかな…？」

「いくといいんだがな…。」

フェイトとキルアはそう呟いた。

そして時空管理局上層部。リンディは緊張した面持ちで上層部の面々の前に立っていた。それは一回かけあうのに失敗したのにまた再びキルア達の無罪をかけあいにくたのだ。また失敗すればクビになるかもしれないからだ。しかしリンディは勇気をだして立ち向かう。

「……これを。」

リンディは上層部の一人にノートを渡した。

「これはなんだね？」

「とりあえず見てください。」

リンディにそう言われるとノートを渡された上層部の一人はノートをめくって内容を見ていく。

…すると次第に驚愕の表情になっていく。

「所々にムカつく事も書いてあるがこれは素晴らしい技術書だ！こんな凄いものをなぜ君が？」

「キルアさんから渡してもらいました。彼らを無罪にすればその技術書は貰えるそうです。…彼らは実際に被害はだしてはいません。だから無罪にしてください。その技術書があれば今後の我々時空管理局の活動もより良好なものになるでしょう。」

リンディはこれで交渉は成立……と思ったが。

「……これは罪人の物だろう？しかも出身も分からぬキルアという者のだから証拠物件として預かるう。」

その衝撃の言葉にリンディは驚く。

「ちょっと待ってください！？そんなおかしいです……！」

「いいから君はここから去りたまえ。クビになりたくなかったら。」

リンディはくつと唇を噛み締めた。……そう言えば自分は渡していないある物があるのを思い出す。手紙だ。リンディはこんな物を渡してどうなるかは分からないがとりあえず渡すことにした。

「この手紙も彼の所有物ですから渡しておきます。証拠物件とやらでしょ？」

「とりあえず中をしてみるか。」

手紙を開けると何も書いてなかった。上層部はそれを見てただのゴミかと思うが、突然手紙が光だした。……そして映像が目の前に現れたオレンジ色の髪に眼鏡をかけ白衣を着た男の映像が。

「何だこの映像は？」

上層部の奴がそう思っていると映像の人物は喋りだした。

『やあ、お馬鹿な諸君達。僕は超天才科学者のチャタインです。』

とメチャメチャ相手を馬鹿にした言葉を最初にだした。そして映像の人物チャタインは喋り続ける。

『交渉とかのために僕のノートが渡されたと思うけどさそれを変な理由で交渉を蹴っていただこうとした場合、君達を解体するぞお！  
！…違う場合はメンゴネね。』

怖い雰囲気とおちやらけた雰囲気을だすチャタイン。上層部の奴らはもちろんリンディもポカーンとなる。  
しかしチャタインの顔は急に真面目になる。

『僕の仲間が本当に悪い事をした場合をした時は本当に罪に問いてもいい。…まっ、悪いことしないと思うけどね。…そして実際に被害を出した訳でもないのに罪に問うと言うのなら……僕達は……おそらく相手は組織だと思うからこう言おう……貴様ら組織を解体……いや……ぶっ潰すよ？』

威圧感を込めてチャタインはそう言うが上層部は。

「何が潰すだ！我々時空管理局を嘗めているのか……！」

「ふてぶてしい態度だ！」

「ふざけるな！」

チャタインに向かって各々言葉を吐くが。

チャタインは映像なので意味がない。

そしてチャタインはまだ喋り続ける。

『言つとくけど僕達の世界のレベルは凄いや？  
だって多次元を滅ぼす敵なんかさらに戦ってきたからね。』

その言葉を聞くと上層部はヒヤッとなったがすぐに。

「デタラメを！」

と否定した。だがリンディは上層部に向かって言った。

「チャタインという人の言う事は本当だと思います。…なぜなら前に報告した通りキルアさんは大きいという事が分かるだけで計測は不能の魔力をもつものを倒しているからです。」

リンディのその言葉を聞くと上層部の連中は黙った。理解をしたのだろうか？

「し…しかしだな…」

「あつ、因みにこれ映像自体、力はないけど一応魔法なんだよね。メインは手紙だね。君達の回答を感じとり大爆発するんだ？まつ、キルアが本当に悪い事をしてたらしいけどね…でも逆に君達が彼を陥れようとするなら普通にドツカーン！！ってなるけどね。」

チャタインがそう言うと言紙が光っていた。

「まつ、まさか本当に!？」

「すつ、すぐに処理を！」

『銀河規模の爆発だからね。すぐに処理なんて無理無理…あと十秒前』

チャタインは行動を読んでいたののようにそう言う。上層部は慌ててこう言った。

「分かった！キルアとキルアが無罪を望む者達は全員無罪でいい！」

上層部がそう言うと言紙の光は収まる。

『……………まだ僕の言葉を聞いていると言うことは無事のようなね？そしてキルアは無事に無罪』と言うところだねえ……………ぷっ……………くく……………ははははは！…爆発なんて嘘だよ〜ん。』

「何！？」

『というのが嘘です。僕はマジでやる派だからね。……………僕の話しはここまで、あと次元を渡ったときに君らキルアになんかしてるのを見たらマジで潰すから。じゃあね〜。』

そう言うと言紙の映像は消えた。

「…上層部の皆さん。キルアさん達は無罪、確かにそう言いましたね？今更言った事を変えません…よね？」

リンディは笑顔だが明らかに威圧感を漂わせる表情で上層部の連中にそう言った。…上層部の連中は何も言わない……………つまりキルア達の無罪は確定と言うことだ。

「では私は彼らに無罪を伝えて来ます。いいですね？」

「う…うむ…。」



上層部はただ了承するしかなかった。

リンディはキルア達の元へ来た。そして無罪を伝える。

「…あなたは全員無罪になりました！」

「……やったあー！」

「キルア、無罪だよ。やったねえー！」

「ああ、そうだな！」

「フェイト達が罪に問われなくてよかった…。」

「皆、無罪で本当によかったね。お母さん。」

「これにて一件落着ですね。」

キルア達は全員無罪になった事を喜ぶ。リンディはそんなキルア達を見てふっふと笑いながらある事を言う。

「皆さん、無罪になった、お祝いに旅館で宴会をしましょう！」

「それいいね！」

「ご馳走が食べられるねえ！」

「確かにいい考えね…一番頑張った人の労いも込めてね。」

「ああ、フェイトの事だな？」

「お母さんが言ったのはキルアさんだよ？」

「いや、一番頑張ったのは…」

「キルアさん。貴方ですよ？」

キルアはリニスそう言われるといや、フェイトが…と言おうとする  
がリニスから威圧を感じたので言えなかった。

そして場所は変わり旅館へ。ここにいるメンツはキルア達をもちろ  
んとして。リンディ、エイミィ、クロノ、ユーノ、なのは、であつ  
た。

そして各々、飲んだり、食べたり、話したり、楽しんでいた。  
そしてキルアはその現状を見て少し物思いにふけていた。

（…この空気、懐かしいな…あの人達ともこんな感じに騒いだな  
…いや、あつちはちよつと荒々しいか…。）

キルアがそんな風に思っているとフェイトが話しかけてきた。

「キルア…。」

「何だ？フェイト。」

「ありがとう…私と一緒にジュエルシードを集めてくれて…キルア  
がいなかったら今のこの幸せな状況はなかっただよ…本当にあり  
がとう。」

キルアはフェイトにそう言われるとふつと笑いこつ言った。

「別に礼を言われるほどの事はしていないさ…。」

「キルアはいつも通りだね…ねえキルア…お願いがあるの…？」

フェイトは目を潤ませ頬を赤く染めながらキルアにそう言った。

「お願いって一体なんだ？」

「目を閉じて…。」

「…？分かった目を閉じればいいんだな。」

キルアは何故フェイトが目を閉じてなどと言ったのかは分からないがとりあえず目を閉じる事にした。…そしてキルアが目を閉じたあとフェイトはキルアの唇に自分の唇を近づけ…重ねた。そしてフェイトはすぐにキルアから離れた。…顔を真っ赤にして。

「キルア…これが私からお礼…」

「唇にやわらかい感触がしたが何をしたんだ？」

フェイトはキルアの言葉にポカーン…となった。

それはそうだろう普通はあのシチュエーションなら誰でもキスと思うだろう。

「キルア？普通このシチュエーションなら、ああ思うよね？」

「ああって何だ？」

「……………キルアだから仕方ないか。」

普通は納得いかないだろうがフェイトはキルアだからと言う事で納得する事にした。

しかし後ろでフェイトだけがキルアとキスした事に納得いかない女性達が目を光らせてキルアを見ていた。

「ど、どうしたんだ？アルフ、プレシア、なのは…。」

キルアは三人の妙な迫力に思わずたじろぐ。

「キルア？アタシもお礼するから目を閉じて？大丈夫だから。」

「何が大丈夫なんだ？」

「娘に先を越されたままと言うのはね…。」

「プレシア何を言っているんだ？」

「キルアさ〜ん！お願いだから目を閉じてくれませんか？」

「なのは、目だけ笑ってないんだが？」

三人はジリジリとキルアに近づいてくる。

そしてキルアは…

「何だか分からないが今は逃げるときだな。」

そう言ってこの場から走って逃げた。

しかし三人は逃げるキルアを全力で追いかける。

「『待て〜！！』」

「ある意味ジュエルシードとの戦いよりも迫力があるぞ！？」

「世界を守った人も恋する乙女には敵わないのね。」

「一人乙女と呼んでいい年か怪しい人がいますか？」

「クロノくん。それあとでプレシアさんに伝えてもいい？」

「それはやめてくれないか…？」

「いや〜それにしても楽しい宴会だわ。世界を守った人のたじろぐ姿が見れたんですもの。」

「そうですねえ〜艦長。」

「キルアさん。助けなくていいのかな？」

ユーノがそう言うとクロノはユーノの肩に手をポンと置くと。

「君はあの三人を相手にして平気なのかい…？」

と言った。ユーノはそう言われる何とも言えなかった…。

「三人とも何でそんな目で追いかけてくるんだ！？俺は何かしたのか！？」

「いいからキルア止まってよ？」

「別に怖い事はしないわよ？」

「お願いキルアさん止まって？」

「断る！」

キルアは三人から逃げ続ける。

「「「待てー！！！」」」

そして三人はぎらついた目をしてキルアを追いかける。

ジュエルシードの一件は賑やかな追いかけてここで完全に幕を閉じた。

しかしこの世界にはまだ驚異はまだあるかもしれない……。

だが…今は幸せな一時が流れるのを彼らは楽しむべきだろう…。



## フェイトのお礼（後書き）

作者「無印編終了です！」

キルア「とりあえず無事に終わったようだな。」

フェイト「皆、最後はハッピーでよかったよね！」

作者「そうですね。……あと二人に言うておくことがあります。」

キルア「何だ？」

フェイト「何？」

作者「次回から数話ほど無印キャラはフェードアウトします。出番は無しです。」

フェイト「ええ！？」

キルア「そうか。」

フェイト「キルア。もっと気にしようよ！？主人公なんだよ！」

キルア「出番がいっぱいほしいとか別に思っではないしな。」

フェイト「欲がないんだねキルアは。」

作者「まーまー、数話たったら出られるんですから。あとそろそろ。」

「

フェイト「読者の皆様この小説をここまで読んでくださってありがとうございます！」

キルア「次回からはA's編だ。これからもこの小説をよろしく頼む。」

作者「ではまた次回！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5695y/>

---

その者の拳は滅殺の拳

2011年12月30日22時49分発行